
妖精ing (フェアリング) せんせ～しょん

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリング
妖精िंगせんせしよん

【Nコード】

N0637Y

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

なとりゆうりゅう
名取優歩の目の前に突然現れた少女は、妖精だった。守護妖精、つまり守護霊のようなものらしい。守護妖精は意思に反して人間に見られたことで、姿を消せなくなり離れることもできなくなっていた。

仕方なく、プリンと名づけたその子も一緒に学校へ。今の状態を治せるのは妖精界の女王だけ。女王の決定により、悪霊退治をしてポイントを稼ぐことになる。

優歩はクラスメイトの笹樹麻実子あさきまきこに恋をしていた。その恋愛のドキ

ドキが妖精のエネルギー源となる。
なるべく麻実子とともにいてドキドキパワーを得つつ、悪霊退治を
する。そんな日々が続いていくが。

コンコン。部屋のドアからノックの音が響いた。
ガチャッ。

「お兄ちゃん、頑張ってるね」

俺の部屋に入ってきたのは、今年小学校五年生になった妹、優佳^{ゆうか}だった。手には、二個のおにぎりとコーヒーマシーンを乗せたお盆を持っている。母さんが持たせたのだろう。

「ん、ありがとな」

お盆をテーブルに置いてくれた妹の頭を撫でてやる。
髪がくしゃくしゃになるのも気にせず、いつもの満面の笑みを浮かべる優佳。小さい頃から、妹はこうやってやるとすごく喜ぶのだ。こうしていると、いつまでたっても妹は小さいままだと錯覚してしまう。

「あつ。邪魔しちゃう悪いよね。んじゃあ、お兄ちゃん、頑張ってる」

ひとしきり甘えた笑顔を振りまいたあと、そう言っただけで妹は部屋から出ていった。

俺は勉強机から離れ小さなテーブルに座り直すと、まだ温かいおにぎりに手を伸ばした。

うーん、おにぎりにコーヒーマシーンは、ちょっと合わないかな。そう思いながら、夜食をノドに流し込む。

時計に目を向けると、針は十一時三十分を示していた。

「よし、十二時まで、もうひと頑張りするか」

気合いを入れ直し、眠気と戦う最後の三十分に備えるべく、ふたつ目のおにぎりをひと粒残らずたいらげたあと、再び机に舞い戻る。

俺は名取優歩^{なとりゆうほ}。青木ヶ原中学校の三年生、受験戦争真つただ中だ。成績は悪くないし、それほど必死に勉強しなくても、学校のテストであれば平均点より少し上くらいの点数は取れるだろう。とはいえ、そういったテストは短期的な記憶力があれば一夜漬けでもどうにか頑張ってしまふもの。

だけど受験ともなると、そうはいかない。だから俺は、まだ五月のこの時期から、しっかりと総合力をつけるべく頑張っているのだ。

高校受験は、よく話に聞く地獄の大学受験と比べると倍率もずつと低いし、自分の成績から考えて無難な学校を選んでおけば、どこかの学校には入れそうなものだけだ。

それでも、なるべく自分で行きたいと思える学校に入学できたほうがいいのは確かだ。

将来なにがしたいのか、これといって考えてもいない俺は、とりあえず普通科志望。

高校のあいだに将来の目標が決まればいいか、としか思っていない現状を考えると、住めば都とも言つし、どこの高校に行ってもそれほど変わりはないのかもしれない。

カリカリカリ。シャープペンを走らせ、数学の問題を解いていく。俺の場合、勉強するときに静かすぎると逆にダメだから、テレビをつけたり音楽をBGMにしたりの、いわゆる「ながら勉強」をし

ている。それらの音が聞こえない状態になることで、自分が集中して勉強していたかがわかるのだ。

でも、今日はどうしても集中できなかった。もう少しだけ、というつもりなのに。

眠いからかな……。

ぐっと伸びをして、気合いを入れ直そうとするけど、いまいち効果はない。

ふう……。一旦休憩しよう。

シャープペンを置いて立ち上がった俺は、部屋を出て階段を下り台所を目指す。

台所には誰もいなかった。お風呂場から音が聞こえてくる。母さんが入っているのだろう。

優佳はさすがにもう寝たかな。父さんは毎日帰りが遅く、今日もまだ帰ってきていないようだ。

俺は冷蔵庫を開けて中身を物色する。

おっ、ちょうどいいのがあったぞ。

俺はそれを持って部屋に戻った。

取ってきたのはプリンだった。

もうひと頑張りするための糖分補給。カロリーとか、ちょっと不安ではあるけど、両親も妹も細い家系だから大丈夫だろう。

食べる前に部屋の換気もしておくか。

眠いときはやっぱり、冷たい夜風に当たるのが一番だし。

俺は閉めきった窓に近づき、一気に開け放つ。

春も終わりに近づいたとはいえ、まだ夜中では涼しいと感じる風が、心地よく肌をくすぐり吹き抜けていった。これで眠気も引いていくかな。

と。

ふわっ。

なにかが目の前を漂うのが見えた。

ほのかに果物のような甘酸っぱい香りを感じさせるそれは、風に乗ってほのかに揺らめいている。

その揺らめきは、鮮やかな藍色の長い髪の毛。

俺の目の前で今、ひとりの少女がふよふよと浮いていた。

「な………!?!」

声にならない声を上げる俺。

うっむ、幻覚を見るほど疲れていたのだろうか。少々現実から目をそむけたい心境に陥った。

「や………やほお………」

少女は手をひらひらさせながら、引きつった声を上げる。

その声で、これが現実だと悟る。というか、悟ってしまう。

目の前の少女は、窓の外に浮いていた。

俺の部屋は二階だし、窓のすぐ真下に足場があって乗ることができるといふ構造にもなっていない。そこにあるのは、ただ空間のみ。

なんとか心を落ち着かせ、俺は少女の姿をよく眺めてみた。

背中から生えている大きな二枚の蝶のような羽根。

綺麗な模様のついた青白い輝きを放っているそれを、彼女は優雅に羽ばたかせている。

髪と同じ鮮やかな藍色をした大きなふたつの瞳が、じつと俺を見据えている。

顔の両側、つやのある髪からは、色白の長く尖った耳が飛び出している。

「え〜っと……」

状況を把握できずに立ち尽くす俺を、その少女も呆然とした表情で見つめていた。

「……ま、まあ、とりあえず入るよ」

窓枠に足をかけることもなく、すーっと部屋に入ってくる彼女。

律儀に窓を閉めてから振り向いたその子は、ぼりぼりと指で頭を掻くような仕草をしながら、上目遣いで俺を見ていた。

「うーん、困ったな……」

困ってるのは、こっちのほうだよ。思わず文句が飛び出しそうになる。

それにしても、なんというか……羽根も生えているし、どこからどう見ても妖精としか思えないような容姿をした少女。

ちよっと目がつり上がり気味だけど、整った可愛い顔立ちをしている。

……つて俺はなにを考えてるんだ。

「完全に、見えちゃってるよねえ……」

少女はぐつと顔を近づけて言う。

藍色の彼女の髪がなびいて俺の顔をくすぐるほどの至近距離に、一瞬ドキッとしてしまう。

……だから、そんな場合じゃないんだって。

「ちょっと、なんとか言っつてよ！」

突然、俺の胸倉をつかむ彼女。その勢いで顔がさらに近づく。

彼女は深い藍色の瞳で俺をじつとのぞき込んでいた。

その色のあまりの深さに、ふつと吸い込まれてしまいそんな感覚に陥るほどだった。

とはいえ、そんな感覚に溺れている間もなく、いきなり胸倉をつかまれた俺は思わず咳き込んでしまう。

それが引き金となったかのように、俺は次々と頭に浮かんでいた思いをぶちまけた。

「げほっ！ な……なんだよ、君はいったい何者だ！？ 羽根まで生えてるから普通の人間じゃないよね！？ コスプレとかってわけでもないだろうし……！」

いきなりの反撃に少々ひるんだのか、少女は後ろにのけぞる。それでも、俺の胸倉はつかんだままだ。

この華奢な少女のどこにそんな力があるのか、彼女につかみ上げられた俺の体は、ちょっとだけ浮かされていた。

「おつ、反撃してきたね！ うん、とりあえず見えてるってのは完璧にわかったよ」

そう言つと、ぱつと俺から手を離す。俺はやつと体の自由を取り戻した。

「ふう。……お前なあ！ いきなり入ってきてこんなことするなんて、いったい、なんなんだ！？ ちゃんとわかるように説明してくれよ！」

俺は力が抜け、その場に座り込んでしまっている状態。怒鳴る声の強さとは裏腹に、その姿は情けないことこの上ない。自分でもそれはわかっていただけ。

少女は当然のように、そこにつけ込んで攻撃を開始してくる。

「そんな体勢で凄んだって、カツコ悪いよ！ わつ、鋭い目つき！ もともと悪い人相がさらに凶悪に見えるね！」

「あ……あのなあ！」

思わず声が大きくなってしまっていた。

「ちよつと、優ちゃん。まだ起きてるの〜？ 早く寝なさいよ〜？」

一階から母さんの声が響いてきた。さすがに大声になりすぎたらしい。

ちなみに、うちの母さんは俺のことも妹のことも、「優ちゃん」と呼ぶ。できれば呼び分けてほしいと思っただけ、母さんは聞く耳を持たない。もう諦めることだけ。

この時間だと妹はもう寝ているはずだし、俺に言ってるのは明らかだろう。

「あっ、うん、もう寝るよー！」

俺は大きな声で母さんに答える。

そんな様子を、少女はニヤニヤしながら見ていた。

「優ちゃん、だって！ まだまだ甘えん坊って感じかな！？」

と、若干声のトーンは落とすつも、少女はおなかを抱えて笑う。
くう……！ いったい、なんなんだよ、コイツは……！

「さて……」

いつの間にか座布団を敷いて勝手に座っていた少女が口を開く。
テーブルを挟んで彼女の反対側には、俺もしっかりと腰を落ち着けていた。

「一応聞いておくけど、このまま話し続けていいのかな？ 母親に寝ると宣言してたよね？」

声のトーンは落としたまま、質問を投げかける少女。俺はその少女の様子をうかがいつつ答える。

「ん、大丈夫。区切りのいいところまで勉強を進めてたとか言えば、どうとでもなるだろうしさ」

「ほむ、そうかい。ならいいけど」

一旦大きな目を閉じ、一呼吸おいてから、少女は語り出した。

「とりあえず、一目瞭然かもしれないけど、オイラはキミたちの言うところの妖精ってやつなんだ」

他には考えられない容姿をしていたわけだけど、とりあえず相づちを打ち、俺は聞き続ける体勢を保つ。

「妖精というと、トンボのような羽根だったり、もっと小さいサイズを想像したりするかもしれないけど、見てのとおり、キミらと変わらないくらい的身長で、蝶のような羽根を持っている。これがス

タンダードなオイラたちの姿なんだよ」

少女は羽根を軽く羽ばたかせる。その瞬間、鱗粉がまき散らされた。

「あつと、悪いね。でも妖精の羽根の粉は、少しすれば雪のように消えていくから汚れることもない。安心していいよ」

謝罪の言葉とともに、すつと羽根がたたみ込まれる。

羽根からこぼれ落ちた鱗粉は、青白い綺麗な光を放ちながら絨毯の上に落ち、まるで吸い込まれていくかのようにその光を薄め、そして消えたていった。

「実際にはイメージした姿を具現化しているだけだから、どんな姿にでもなれるはずなんだけどね。オイラたちの中でも固定観念化しているみたいで、この姿のほうが落ち着くんだ。だから人前に出る場合は、こういう姿になる場合が多いかな」

そう言いながらお茶をすする。

小型のポットと急須を持ってきて、お茶の準備をしておくのが勉強時の習慣となっていたため、俺の手もとにはその用意があった。

とはいえ勝手にお茶を淹れ、しかも自分だけ飲んでいるというのは、いったいどういうことか。妖精に人間の常識なんて通用しないとは思っけど。

さっきからかなり眠かったし、これはやっぱり夢なのか……。

ぼやけた頭で少女の動向を見守っていた俺の視界に、テーブルに乗ったプリンのカップが映り込む。

さっき持ってきたやつだ。

そうだ、とりあえず糖分を補給して脳を活性化させよう。目の前の少女だって、勝手にお茶を飲んでいる状況なわけだし。

「ちょっと失礼して、夜食を食べるね」

「ほむ？ ああ、ご飯ってことだね。了解っ」

言ってお茶をおかわりしている彼女。ほんとに遠慮なんてないみたいだ。

ともかく俺は、若干ボーっとした頭のまま、プリンを手にとって食べ始める。

うん、このちょっと甘すぎるくらいの風味。

眠気が九十五パーセント程度まで充満していた頭に染み渡っていくようだ。

「キミさ、ちゃんと現実を受け入れてる？」

ふと、そんなことを聞いてくる。ちゃんと受け入れてるかって、そんなの無理ってもので……。

眠気もあるからか、ちょっとイラついて言い返してしまった。

「うるさいな。だいたい、キミなんて言うな。俺には優歩って名前があるんだ」

少女はちょっと目を丸くしていたけど、すぐに納得したような顔を見せる。

「ほむほむ。優歩だね、了解っ。そう呼ぶね。ところでさ、オイラには名前がないんだよ。下っ端の妖精だと名前を呼ぶ必要なんてないからね。優歩、こうなってしまったのもなにかの縁だし、オイラ

にいい名前をつけてくれないかな？」

「プリン」

すかさず答える俺。

うん、スイーツの魔力、糖分の影響でちょっとは脳の回転も戻ってきたかな。

怒って反論してくるのを想像していたのだけど、それを聞いた彼女は、きよとんとした表情を向けていた。

「ほむ。今優歩が食べてる食べ物の名前と一緒にだね。ちょっと安直すぎる気はするけど、了解っ。オイラの名前は、プリン。うん、結構いい響きだね、気に入ったよ！」

にこ〜っ、と満面の笑みを伴って、そんな答えが飛んできた。

むむむ……。意地悪のつもりだったのに、気に入られてしまった……。

ま、本人がいいのなら、べつに構わないか。俺も気兼ねなくプリンと呼んであげることしよう。

それはそれとして、そろそろちゃんと現実に目を向けてみることにしようか。

まず、この子はいったい何者なのだろう？

……自問したところで答えは出ないだろうし、本人に聞くのが一番てっとり早そうだ。

「……………それで？ 妖精さんである君が、どうしてここに？」

まだいまいちすべてを信じ込めてはいなかったものの、とりあえずこの子が妖精であると想定して訊いてみる。

そのほうが話もスムーズに進むだろう。
プリンは、俺が話をちゃんと聞くつもりなのがあったからか満足そうな表情に変えて、こう訊き返してきた。

「優歩は、守護霊っていると思うかな？」

突然守護霊などという単語が出てきたことで、一瞬戸惑ったけど。

守護霊というのであればよね、いつも背後にいて、その人を守ってくれるっていう。

お婆ちゃんは、ご先祖様の霊が守ってくれるんだよ、と言っていただろうか。

「そう、優歩の守護霊なら、優歩を守ったりする役割を持った霊のことだね。守護霊は、目には見えないけど実際にいるんだよ。でも、それはご先祖様の霊なんかじゃない」

「ふむ」

じつと彼女の顔をのぞき込む。

すでにプリン（スイーツのほう）は食べ終えて、容器をゴミ箱にポイしたあとだ。

プリン（目の前の少女）は、一瞬目を閉じて間を置いてから、こう続けた。

「オイラは、優歩の守護霊なんだ」

微妙な沈黙が訪れた。

「……あゝ、やっぱり信じられないかな？」

プリンが俺の顔をじつと見つめ返しながら問う。

お互い見つめ合っているからか、徐々に顔が近づいてしまったことに気づいて、俺は身を少し後ろに引いた。

それを答えたと見て取ったのか、プリンの表情が陰る。

「そっだよね。妖精ってこと自体が通常の人間なら信じがたい上に、守護霊だなんて。信じられないのも無理ないよね……」

さらに表情を暗くしながら、ぼそぼそとつぶやくプリン。

憂いを帯びた表情が、妙に可愛いかも……。

そんな感想を持ってしまった自分に焦りつつ、なるべくそんな焦りを悟られないように弁解する。……弁解、になるのかな？

「いやいや、信じないわけじゃないよ。そっか、守護霊か。今まで俺を守ってくれたりしてたのか？」

とりあえず、さっきの妖精だと聞いたときと同様に、プリンが守護霊だという前提で質問してみる。

すかさず、彼女はぱっと明るい笑顔を取り戻す。

なんとまあ、わかりやすいことか。

「うん、そっだよ！ 感謝してよね！」

プリンは、どうだ、と言わんばかりに胸を張る。

「でもどうして妖精が守護霊をやっているんだ？」

素直な疑問をぶつけてみた。

「ほむ。えっとね、べつに妖精だから守護霊をやっているってわけじ

やなくて、キミたちのイメージでは妖精が一番近いようだから、そう言ったただだよ。例えば守護霊もそうだけど、他にも精霊とか、あとは悪霊だとか幽霊なんかも、そうかもしれない。つまりね、キミらの感覚で見えない得体の知れないもの、それはすべてオイラたちのような存在なんだ」

「ずずず。音を立てながらお茶をすするプリン。」

「どうやら妖精でもノドは乾くようだ。ノドを潤した彼女は、さらに続けた。」

「オイラたちは基本的に人間や動物に干渉したりはしない。そこら辺で好き勝手に生活しているだけって感じかな。人間の立場から見ても好ましい結果を生み出す存在をキミたちは妖精や精霊と呼び、害を成すような存在を悪霊や幽霊と勝手に呼んでいるというだけなんだ。本質的には同じような存在と違っていいよ」

「妖精も悪霊も同じ……なの？」

「うん、そういうことになるね。例えばさ、妖精だと思っている存在がいたとして、それはキミたちにとっては信じがたい存在でしょ？ でも現にそこにいるのがわかったとする。そして、実際になにか人間を助けるような行動を取っていた。その場合、良い存在として認識されるよね？ けどそう認識されていた妖精が、突然人間に悪影響を及ぼす行動を取ったらどうか？ もちろん擁護する人間だっているだろうけど、おそらくは恐怖の対象として距離を置くか、もしくは悪い存在として迫害を受けるんじゃないかな？ 場合によっては、悪者として退治されてしまうかもしれないよね」

「そう言われて、なるほど、と思った。」

人間は確かに自分勝手な存在という部分も多い。弱肉強食と云ってしまえばそれまでかもしれないけど。」

「わかったかな？」

「ああ、プリンが妖精で守護霊だったことは、とりあえずわかったよ」

半信半疑ではあるけど。

俺は心の中でつけ加えた。もちろん口には出さない。

「でも、さっき困ったって言ってたよね？ なにが困るんだ？ ……姿を見られたからには口封じのために死んでもらおう、なんてことはさすがに言わないよな？」

「もちろん、そんなことは言わないよ。オイラは優歩の守護妖精なんだから。でもさ、ちょっと困ったことが起こるんだよね」

プリンは深刻な顔でつぶやく。しつかりと、お茶のおかわりを湯飲みに注ぎながらだったけど。

「普段妖精は、人間には見えないようにしているんだ。もちろん自分の意思で姿を見せることも可能だし、声を届けたりもできる。でもね、自分の意思に反してその姿を見られてしまった妖精は、見た人間はもとより、周りの人間にも見えるようになってしまっただよ。そしてそのまま、姿を消すこともできなくなる」

お茶を手に取り、ひと呼吸置く。

「それだけなら、どこかに隠れていけばいいだけだけどね。ただ守護妖精の場合はちよいと厄介で、守護する相手、つまりオイラの場合は優歩の近くから離れることもできなくなっちゃうんだ。少しくらいの距離なら平気だし、短い時間なら大丈夫なのかもしれないけど、遠く離れようとすると引っ張られて戻されてしまう感じかな。絶対に切れないゴムひもでつながれているのを想像するとい

かもしれないね」

呆然としながら聞いていたからか、俺はよく理解できないままだった。

もっとも真剣に聞いたとしても、理解できたかどうかは怪しいところけど。

「まあ、つまり。優歩とオイラは、離れられない仲、ってことだよ」

いや、それは誤解を招く表現では……。

そうは思ったものの、そろそろ眠気も限界にきていた俺には、ツッコミを入れる気力なんて残っていなかった。

「ん、そろそろ寝るかな？ さすがにこんな時間まで起きてると、明日もつらいだろうしね。これから忙しくなるから、今日はこれで寝ておくといいよ」

俺がうとうとしているのを、プリンも感じ取ったのだろう。

限界突破目前といった状態だった俺は、じゃあ、そうさせてもらうよ、と素直にベッドに入った。

プリンの言葉の意味を、よく理解しないままに。

バサツ。布団を頭からすっぽりとかぶると、すぐに睡魔は俺を深い暗闇の世界へと連れていった。

朝だ。

カーテンを抜けて入ってくる光が、まぶたを通して俺に目覚めの時刻を告げる。

昨日遅かったからかな、まだ眠い……。

そうか。きつと遅くまで勉強を頑張りすぎたんだな。

だから、あんな夢を見た。

そくに違いない。

俺はまだはつきりしていない頭でそう結論づけた。

今日もまた、いつもと変わらない平凡な日常が始まるのだ。

さて、そろそろ起きるとするか。

ほのかな甘酸っぱい香りが俺の鼻をくすぐっているのに気づいたのは、そこまで考えたあとだった。

重いまぶたをぱっちりと開けると、そこにあったのはいつもどおりの自分の部屋の光景……ではなかった。

顔。

目の前に女の子の顔があった。

「ぐっも〜にん！ やつと起きたね！」

声を発すると、その吐息が俺の顔に直に感じられる、そんな至近距離に彼女はいた。

ちよつとドキドキ……。

なんて言ってる場合じゃない！

俺は飛び起きた。

「うわっ！ 布団をバサツとしないでよ！ 髪が乱れちゃうじゃないか！」

甘酸っぱい香りをばらまきながら、髪を振り乱して叫ぶプリン。布団のせいよりも、自分で乱している分のほうが多そうに見えたけど。

「プリン！ お前、なにしてんだよ！」

「優歩が起きるのを待ってただけだよ。寝てると可愛い顔してるのに、起きた途端に怒鳴るなんて。朝は一段と目つきが悪いんだから、自重してほしいもんだね」

「お前なあ……！」

と、そこまで言って、はたと気づく。

おや？ なにか雰囲気が違う。

……って、

「お前、なんで制服着てんだ!？」

「そりゃ、今日からオイラも優歩と一緒に学校に行くからだよ」

両手を腰に当てながら、プリンはあっさりそう言い放つ。

「は？」

「オイラも・優歩と・一緒に・学校に・行くから・だよ」

俺の腕に自分の腕を絡めて、ゆっくりはつきりと言い直すプリン。いやいや、音符をつけて可愛く演出したってダメだ！

「だから、なんでお前が学校に行かなくちゃならないんだよ！」

朝っぱらからこんな大声出すなんて、きっと生まれて初めてのこ
とだろう。

そんな大声だったのだから仕方ないとは思うけど、突然部屋のド
アが開かれた。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「うあー！」

俺を心配してくれたのだろう、優佳が部屋に飛び込んでくる。

いつもノックをしろと口をすっぱくして言ってるのに、こいつは

……。

「いや、あの、この子は……」

「ふえ？　この子？」

俺は怪訝な表情をする優佳の言葉を聞いて部屋を見回す。そこに
プリンの姿はなかった。

「あ……いや、なんでもない。夢、見てたから、ははは」

乾いた笑いを浮かべる俺に、優佳は冷めた視線を向ける。

「女の子の夢見てたのね、なんかやらしく！　お兄ちゃん、そろそ
ろ彼女作ったほうがいいんじゃない？」

「う……うるさい、このマセガキ！　早く学校の準備しろ！」

そう言って枕を投げつける。

「きゃ~~~~！ 撤収~~~~！ お兄ちゃんこそ、早く着替えないと遅れるよ~~~~！」

優佳が自分の部屋に戻ったのを見届けると、俺は廊下に転がった枕を引つつかみ、素早くドアを閉めた。

「どうだい？ 上手く隠れたでしょ？」

そこでプリンがひょっこりと顔出す。さっきまでよりも声のトーンを落としているところを見ると、しっかりと状況は把握しているようだ。

ベッドと壁のあいだは、掛け布団が壁でこすれないように少しだけ離してある。

どうやら彼女はそのすき間に入り込んで隠れていたらしい。

「まあ、とりあえず助かったけどな」

俺も声を落として答える。

「で、さっきの話の続きだけど……」

「うん。昨日言ったように、オイラは優歩から離れられない上に姿も隠せない。なら、普段から一緒にいても不自然じゃない存在になつておけばいい。つまり、優歩のいところってことにして同じクラスに転入すればいいと考えたわけさ！」

どうだ、まいったか、といった様子で、プリンは偉そうに両腕を組んで答える。

「いとこって、そんな勝手に……。だいたい転入するためには手続きとかいろいろあるんじゃない……」

「その辺りは心配なっしんぐ！ オイラたちの世界……便宜上、妖精界って呼んでおくね。その妖精界には、様々な事柄を取りまとめる女王様がいるんだ」

すごく美しい方なんだよ、うつとりした目をしながらプリンは言った。

「とにかく、その女王様と連絡を取ったわけ。守護する人間に見られてしまった妖精をどうするかは、その女王様が決めるんだ。その決定には一週間くらいかかるから、とりあえずはそれまで待たなきゃならない。それで、優歩の家に居候することになったところ、って名目で転入手続きの処理をしておいたって報告が、ついさっき届いたんだよ」

妖精界との連絡って……。

俺から離れられないとか言ってなかったっけ？ いつ妖精界とやらに行っただんだか。

「昔は面倒だったけどね。今はこういうのがあるから」

と、なにやら小型で可愛いピンク色をしたノートパソコンのようなものを取り出す彼女。「のようなもの」というより、「そのもの」って感じだったけど。

「そうだね、ほとんどキミたちの世界のパソコンと変わらないかな。フェアリーコンピューターっていうんだけど、普段は端末って呼んでる。とにかく、これを使って女王様とチャットで連絡を取ったんだよ」

妖精がコンピューターを使ってチャット……。

呆然とする俺の目の前で、プリンは素早くキーボードを操作し、チャットの画面をモニターに映し出す。

古風な黒い背景に白い文字で、名前と入力した文章が出るだけのシンプルな代物だった。もっとこう、テレビ電話風だとか、立体映像を浮かび上がらせるとか、そういった感じのものを想像したのだけ。

「機能面としては、これだけで全然問題ないしね。それに、妖精界とこっちの世界を結ぶこと自体、なかなか面倒らしいんだよ。オイラはそういった技術的な部分はチンプンカンプンなだけだね」

妖精界も万能ではないってことか。

「うん、そういうこと」

どうでもいいけど、さっきから、いちいち思考を読まれている気がする。

べつに今は問題ないけど、考えてることが筒抜けなのは、ちょっと嫌かもしれない。

「ほむ、なるほど。確かにそうかもしれないね。了解っ！ 思考を読むのは極力やめておくよ。もちろん勝手にオイラの頭に流れ込んでくる思念までは止められないけどさ」

「うん、そうしてくれるとありがたいな」

思念が流れ込むうんぬん、の部分はよくわからなかったけど。強く思ったことまでは隠せない、といった感じだろうか。

「それにしても、学校の制服まですぐ用意できるんだな」

「うん。チャットで申請して、特急便で送ってもらったんだ！」

……やっぱり妖精界はこっちの世界より便利っぽい。

「そういえば、俺のいとこ、ってことだと、母さんや優佳には通用しないんじゃないか？　もしかして、記憶操作とかを使って対処済みだったりするの？」

制服に着替えつつ、そう質問をする。

着替えたいとプリンに言っても、「ほむ、勝手に着替えればいいでしょ？」と言うだけでなにも気にしていないようだったけど、さすがに見られているとこっちが恥ずかしい。

だからプリンには少しだけ離れてもらい、さらに反対側を向いてもらっている。

人間ってやつは面倒な生き物だね、なんてぼやかれてしまったけど。

「いや、さすがに記憶を操ったりまではできないよ。絶対に無理ってわけでもないらしいけどね、規制がどうか。オイラは細かいことまでは知らないけどさ」

つついついこっちに顔向けてしまいそうになるたびに、自分で気づいて慌てて向きを戻しているプリンの様子を見ると、なんだか可愛いな、なんて思ってしまう。

「とりあえず、離れられなくなっただとはいえ、これでもオイラは妖精だからね。空も飛べるし、窓から外に出ておくよ。この部屋の窓の位置からすれば、誰かに見られることもないだろうからね。羽根だけは消せるみたいだから、外に出たあとも問題ないでしょ」

「羽根って……消すことができたとしても、背中から生えてるんだよね？ どうやって制服から外に出すの？」

素朴な疑問。

羽根の部分だけ切っておくとかだと、羽根が消せても、制服の背中の二ヶ所に切れ込みを入れた変なねーちゃんと思われな気がする。

「それなら問題ないよ。もともとオイラたちは、この世界の物体を通り抜けたりできるんだ。オイラの体は消せなくなってしまうけど、羽根だけは消せるっていうのはつまり、羽根だけはもとのままってこと。だから、羽根はこの世界の物体を通り抜けられる。すなわち、制服もその下のシャツも全部通り抜けて羽ばたくことができるってわけ」

なかなか便利じゃないか。でも、もうひとつ疑問が。

「今の話だと家の外まで離れても大丈夫みたいだし、うちの家族に見つからないようにするなら、俺が家にいるあいだずっとベランダに隠れてればいいんじゃないのか？」

すると、プリンはムツとした表情になってこう叫び声を上げた。

「キミも酷い人だね！ ベランダじゃ、寒いじゃないか！」

「ほら優ちゃん、ゆっくり食べなさい」

俺は朝ご飯を、大急ぎでがつつばくばくと食べていた。無駄に喋っていたから時間が足りなくなったのだ。

ちなみに今日は妹も時間がないみたいで、俺の横で一緒にご飯を食べていた。

ふたりまとめて「優ちゃん」と呼ぶのは、母さんにとって便利な言い方だからなのだろう。

「私はレディーですからっ！ 支度に時間がかかるのよっ！」

優佳はそんなことを言っていた。小学生なのだからレディーもなにも、あったもんじゃ無いとは思っただけだ。

でも、今は子供向けの化粧品なんか普通にあるみたいだし、小学生は小学生なりにオシャレに気を遣ったりするものなのかもしれない。

もっとも、優佳の小遣いでそんな物をいろいろと買ったりまではできないはずだし、それ以前に、化粧をして学校に行ったら、校則違反になるだろうけど。

と、そんなことより、早くしないと。窓から出たプリンが、外で寒い思いをしながら待っているはずだし。

もう五月になっているとはいえ、朝はまだ肌寒い。あまり遅くなると文句たらたらだろう。

「ごちそうさま〜！ 行ってきま〜す！」

ご飯と目玉焼きをたいらげ、味噌汁をノドに流し込んだ俺は、カバンを手に取り玄関へと駆け出した。

「ごら、優ちゃん！ ちゃんと歯磨きしてから行きなさい！」

……素早く回れ右。俺は洗面所へ向かって急いで歯磨きを開始する。

プリンの愚痴攻撃も怖いけど、母さんの優しい笑顔風味のねちねちしつこい嫌味攻撃をくらうほうが、もっと怖いのだ。

口をゆすぎ、顔を洗い、玄関へ向かう頃には、優佳も食事を終えていた。

さて、今度こそ。

「行つてきま〜〜す！」

玄関のドアを開けると、すぐに門がある。ごく一般的な庶民の家といった感じだろう。

俺は素早く門を出て学校方面に体の向きを変える。

そこには、腰に両手を当て眉をつり上げている長い髪の女の子が、仁王立ちで待ち構えていた。

「ゆ〜っ〜ほ〜！」

覚悟はしていたけど、プリンの愚痴攻撃の開始だった。

「遅いじゃないか！ 寒かったよ！ 知らない人が通りかかってじろじろ見ていくから、不快な気分にもなったよ！ 謝って！」

じろじろ見られるなら、門の中にも入ってればよかったのに、と思うのだけど。

口答えなんかしたら、プリンの罵声攻撃力アップは免れないだろう。

「あゝ、ごめんごめん」
「心がこもってない！」

そんなやり取りも、道行く人には仲のよい男女の学生ふたりの会話、というふうに見られるのだろう。

とくにプリンは、黙ってさえいればかなり可愛い女の子。長い綺麗な髪もそれに拍車をかけているのか、プリンのことを振り返って見ていく人も結構いるようだ。

「だいたい外で待つてると、優歩との距離がちよつと遠いから、引つ張つて戻される力に抵抗するのも疲れるんだよ。今後はもっとオイラのことを考えてよね」

「ん……そっか。わかつたよ」

それにしても、どうしてこいつは、こんな喋り方なのか。女の子なのに、自分のことを「オイラ」なんて言うし。

精霊に性別があるのかはよくわからないけど、もっと可愛い喋り方をすれば、アイドルになつてもやっていけそうなほどの容姿だと思つのに。

でも、そんなことを言つたら調子に乗りそうだし、絶対に黙つておこつ。

思考を読まれていたら意味はないのだけど、約束したから大丈夫だろう。プリンが約束を守らないとは考えられない。

昨日会つたばかりとはいえ、口はちよつと悪いけど、素直な性格なのはよくわかつていた。

悪く言えば単純つてことなのだけど。

と、プリンがいきなり腕を絡めてくる。

「わっ、なんだよ！ くつつくなくて！」

「いいじゃん、減るもんじゃないし。少し離れて寒かった分、くつついていさせてもいいでしょ？」

そう言って、引き寄せた俺の肩に頭を寄せるプリン。とはいえ、この状態で登校するのは、さすがにちょっと……。

「わかったから、でも学校が近くなったら離れるんだぞ」

「ほむ。了解」

とりあえず学校前の直線に差しかかるまでは、学生の通りはほとんどないはず。

俺は知り合いが通らないことを祈りつつ、プリンとふたり、学校へ向けて歩き始めた。

「は~~~~い、ちゅうもお~~~~く！ 転入生を紹介するわよお~~~~ん！」

担任の甘野小夜子先生が、いつもながらのハイテンションな声で生徒たちに告げる。

大学を卒業後、去年の副担任を経て、今年晴れて担任となったばかりの先生だ。

若くて綺麗なので男子に人気があるのは確かなのだけど。

いつもひらひらのフリルのついた服で着飾っているこの先生。さすがに派手すぎると校長から何度も注意を受けているらしい。

それなのに、まったくと言っていいほどへこたれていないのは、立派というか常識がないというか……。

さて、先生の声に続いて、教室の前側のドアを開けて入ってきた転入生。

藍色の綺麗な長い髪をさらさらと優雅に揺らしながら教壇の横まで歩いていく。

生徒の とくに男子生徒のどよめきが聞こえた。

入ってきたのはプリンだった。確かに外見は可愛いからなあ……。

「この子が転入生よ！ 名取くんのいとこなんだって！ 仲よくしてあげてねっ！」

そう言って、先生はプリンに自己紹介するよう促した。

前に向き直り、はっきりとした声で自己紹介を始める彼女。

「皆さん、初めまして。今日からこのクラスで一緒に勉強することになりました。私は、先生のご紹介にあったように優歩のいところで」

クラス全員の視線をその小柄な身に受けながらも戸惑うことなく紡ぎ出される綺麗な声に、みんなうっとりとした表情で聞き入っていた。

どうでもいいけど、思いきり猫がぶってるな、こいつ。まあ、いいけど。

そんなふうを考えていると、彼女は迷わず、こう紹介を続けた。

「名前は、プリンです」

ガタツ。一瞬椅子からずり落ちそうになる。

いや、その名前を名乗るのはマズいだろ……。

ちゃんと言っておかなかった俺も悪かったかもしれないけど、転入手続きをしてあるというからには、もっとまともな名前で処理してあるのだろうと考えていたのに。

ざわざわ……。

プリン？ 今、プリンって言ったか？

クラスメイトもさすがにざわめき始めていた。

俺はプリンをじっと睨む。

その視線に気づいた彼女は、こくん、と頷いた。

「ちょっと変わった名前かもしれないけど、お母さんがプリン好きだから、こんな名前をつけたみたいなの。小さい頃は私もちょっと嫌だったけど、でも結構可愛い名前だよな？ 私、結構気に入って

るんだ！」

そんなことを満面の笑みを浮かべて言われたら、誰も否とは言えないだろう。

俺としては、もっと別のまともな名前に言い直せ、という意味で彼女を睨んだのだけど。本人は違った意味に受け取ったらしい。

ともあれ、「可愛いと思うよ！ 安心して、プリンちゃん！」なんてクラスメイトが言ってくれているのだから、どうやら問題はなさそうだ。

「へー、そんな名前だったんだー！ なんか、名簿には名字しか載ってなくて変だなあ、って思ってたのよねえー！」

甘野先生はあっけらかんとした表情で、生徒たちの声に紛れてそんなことをのたまう。

そう思ったのなら、ここに連れてくる前に確認するべきなのでは……。

この担任にそんなことを言っても無駄だというのは、よくわかっているけど。

「それじゃあ、プリンちゃん、席に着いて！ 窓際の一番奥、優歩くんのすぐ後ろの席だよ！」

軽く会釈して席まで歩いてくるプリン。俺の横を通り過ぎ、甘酸っぱい香りを残したまま、彼女はすぐ後ろの席に座った。

ちなみに席順は名前の順などではなく、かなりバラバラだった。先生が始業式の日に表示した席順だ。

厳正に決めたとはいったけど、きつと遊び半分で適当に決めたに違いない。

「優歩。あんな感じで、よかったかな？」

背後から小さな声が届く。

妖精とはいっても、やっぱり不安だったみたいだ。この世界での常識なんてわからないだろうし、それも当然か。

俺は、すつと左手を軽く上げて、親指と人差し指で丸を作った。

「ほむ、よかった」

安堵のため息をつくプリン。俺も、よかったよ。面倒なことが起こらなくて。

でも、これからどうなるのやら……。

ちよつと不安ではあったものの、俺は少しだけ楽しい気分になっていた。

さて、一時間目の授業が始まった。

今日の一時間目は数学。そして、数学の教師は担任の甘野先生だった。

なぜ、あんな適当な感じの先生が数学教師なのだろうか。世の中不思議なものだ。

まあ、それはいいのだけど、一時間目からあのハイテンションな声を聞き続けなければならぬというのは、正直きつい。

とりあえず先生の声は耳を素通りさせて、ノートだけしっかり取るようにしていた。

「うー、つまらないよ。優歩く、こんなことをするために毎日学校に来てるのか？」

後ろの席からシャープペンで俺の背中をツンツンつつきながら愚痴っているプリンは無視する方向で。

ひらひらの服をなびかせながら、動き回って授業する甘野先生。数学の授業でそんなに動き回らなくても……。

と、そんなことより、ノートノート。黒板に書かれた文字や数式をすらすらと書き写していく。

でも……。

やっぱりダメだ。集中できない。

俺が授業に集中できない理由はただひとつ。俺の席から黒板を見ていると、必ず視界に入るのだ。

あの子が。

俺の席の右隣の列、ふたつ前の席に彼女は座っている。

前の席に座っている友人の女子生徒が、後ろを向いて彼女になにか話しかける。それを聞いていた彼女はその友人とともに、くすつと笑う。

甘野先生が彼女たちのほうを睨んでいるのに気づき、慌てて友人の肩を叩いて前を向かせる。

そんな様子を、俺はついつい観察していた。

笹樹麻実子しんじゅまみこ。それが彼女の名前だ。

この学校には、近くにあるふたつの小学校の学区を合わせた範囲の生徒が通っている。そして、麻実子ちゃんは俺とは別の小学校出身だった。

俺は最初にこの中学の門をくぐった入学式のあの日、目の前を他の生徒と一緒に歩いて登校していた彼女にひと目惚れした。

入学式は体育館で行われるのだけど、クラス分けの紙が入り口に貼り出されていて、そのクラスごとに並ぶ。同じクラスの列に彼女の姿を見つけたときは、飛び上がりそうなほど嬉しかった。

同じクラスにはなったものの、最初は同じ小学校から来た仲間であるのが普通だった。だから、なかなか話すきっかけも持てないだろうと思っていた。

彼女は向こうの小学校ではそれなりに有名な優等生だったらしく、学級委員を決めるときに真っ先に推薦された。

学級委員は男女ひとりずつ選出される。まず女子は彼女が推薦された。だいたい立候補する物好きはそうそういないだろうから、女子は彼女で決定だろう。

そして俺は、立候補したのだ。学級委員に。

今考えると、ずいぶんと思いきったことをしたものだと思う。もともとあまり目立つのを好まない俺が、立候補だなんて。

でも、それで彼女と話す機会が得られたのだから、この選択は正しかったと言えるだろう。

さて、それから二年経った今、彼女との関係がどうなったかという……。

べつにどうにもなっていなかった。

一年生のあいだは同じ学級委員として、いろいろなことをともに頑張った。

彼女は、どちらかといえば恥ずかしがり屋でおとなしめな性格。学級委員に推薦されたのも、そんな彼女の性格を知っている小学校

からの友人のいたずらのな感じでもあったのだろう。
頼まれたら断れないような性格なのだ、麻実子ちゃんは。

でも彼女は、学級委員に選ばれたことを嫌がったりはしていなかった。

「せっかく推薦してくれたんだしね。それに、結構楽しいとは思うんだ。学級会でみんなの前に立って話したりするのは、ちょっと恥ずかしいけど」

その一年で、俺の恋心はまるで風船のように膨らんでいったわけだけだ。

とはいえ、あまり女子と仲よくしてばかりいると、男子からは冷やかされ、からかわれてしまう。

だから、学級会の司会や委員会の集まり以外では、彼女と話したりすることもなかなかできなかった。

そんな一年が過ぎ、二年生になった。

昇降口の前に貼り出された運命のクラス分けで、俺は彼女と別のクラスだということを知る。

一学年は七クラスあるし、同じクラスになんて、そう簡単にはなれないだろうとわかってはいた。でも、そのときはすぐ落ち込んだものだ。

違うクラスになったその一年間。

たまに廊下ですれ違う彼女の笑顔を見られるだけで、その日一日が幸せになるかのように感じていた。

そんなわけで、よりいっそう彼女への想いは募っていった。

そして今年のクラス替え。

また麻実子ちゃんと一緒のクラスになれたのには、運命的なものを感じた。というのにはさすがに言いすぎかもしれないけど。

で、現在に至る……。

すなわち、まったく進展なんてしていないのが現状だ。

そんな彼女の様子が視界に入ってくる、というか、自分から進んで見ているのだけだ。

彼女の笑顔や仕草を、そっと見つめているだけでも幸せな気分になれる。そうやって、たまに振り向く彼女の友人に気づかれないようにしながら麻実子ちゃんのほうを眺めていると、すぐに授業は終わってしまった。

同じように、午前中の他の授業時間も、あっという間に過ぎていくのだった。

お昼になった。

ここ青木ヶ原中学には給食がない。そのため、お弁当を用意する人、学食を使う人、購買でパンなどを買う人といった感じに分かれる。

学食と購買は食堂の建物の中に一緒に入っているのだけど、食堂はかなり広く、テーブルも多めに用意されている。

だから食堂では、学食を食べる人だけでなく、購買でパンを買った人もいれば、持参したお弁当を広げて食べる人までいるのが普通だった。

「優歩、お昼はどうするんだい？」

「俺は購買でパンと飲み物を買って食堂で食べるけど」

「ほむ。ならオイラも一緒に行くよ」

迷うことなく決断したプリンは、朝と同じように俺に腕を絡めてくる。

「ここらから、教室内でそんな……」。

ふと、麻実子ちゃんのほうに視線を向ける。友人と机をくっつけ、お弁当を広げていた彼女と、目が合った。

俺は恥ずかしくなっただけで、すぐに目を逸らし、腕を絡めてきているプリンを引っ張るようにして教室を出た。

いとこだというのにはわかってはいるはずだけど、プリンと仲よく腕を組んでるところを麻実子ちゃんに見られるなんて……。

俺はブルーな気持ちになりながら購買に向かうのだった。

「ん、どうした？ 元気ないね？」

ブルーになった原因である張本人から、そんな心配を受けながら

。購買でパンを買う、ということ、戦争のような奪い合いを想像したりするものだろうか？

でも、少なくともこの学校ではそうではない。

普通に行儀よく並んでパンを購入する。割り込んだりする人なんていないのだ。

プリンは先に食堂の席に座らせて、俺はパンを買いに購買に並んだ。

適当に四種類ほどのパンを買い、パックの飲み物をふたつ、自動販売機で購入して席に戻る。

「お待たせ。パンは好きなのをふたつ取っていいよ」

そう言ってパンをテーブルに並べながら俺はプリンの正面の席に着く。

飲み物はコーヒー牛乳と苺ミルクのふたつ。もちろん俺がコーヒー牛乳で、プリンが苺ミルクだ。

彼女に希望を訊いたら、それを指定したのだ。以前から飲んでみたいと思っていたらしい。

そういえば、妹の優佳が大好きだったな、苺ミルク。

「ほむ、ありがとね」

ぱつと見て適当にふたつのパンを選んで取るプリン。
残ったふたつを自分のほうに引き寄せて、とりあえず俺はコーヒ
ー牛乳を口を含む。

「優歩、キミさ」

苺ミルクのパックにストローを差し込みながら、プリンが突然口
を開いた。

「……ラブだね」

ぶっ！

ニヤニヤと笑みを浮かべながら、そんなことを言い出すプリンに、
思わずコーヒー牛乳を吹き出しそうになった。

「うわっ、きつたないなあ！」

訂正。すっかり吹き出していたらしい。

「お前がいきなり変なこと言うからだろ！」

げほげほと、むせながら反撃する俺。

当の本人は、事もなげに苺ミルクをすすり、ほむ、やっぱり美味
しいね！　なんて満足そうな笑顔をこぼしていたのだけど。

それにしても、よくもあんな甘ったるい飲み物を美味しく飲める
もんだ。かなり前に妹が美味しそうに飲んでるのを少しもらったけ
ど、甘すぎて俺の口には合わなかった記憶がある。

そんなことを考えながら、苺ミルクを飲むプリンをじっと見つめ
ていたからだろう、彼女はストローから口を離し、それを俺のほう

に差し出す。

「ほむ？ 優歩も飲みたいのかい？ ほれ」

勘違いしてるだけだからというのもあるけど、それって間接キスになるわけだし。さすがにちょっと……。

周りに人がたくさんいるからというのもあって、俺は丁重にお断りする。

「ふうん？ 美味しいのに」

といながらプリンは再び苺ミルクを飲み始める。

うーん、もうちょっと人間の普通の感覚とか常識とかを教え込まないといけないのかもしれないな。

……って、そんなことを考えている場合じゃない。

さっきの、ラブ発言のほうに話を戻さないか。

「……で？ ラブってなんだよ」

コロッケサンドを頬張りながら訊いてみる。もっとも、だいたい答えの予想はついていただけ。

「キミ、ずっとあの子のこと見てたでしょ？ 斜め前のほうにいるあのショートカットの子。なんて名前だったけ？」

やっぱり、見られていたか。

プリンはすぐ後ろの席なのだから、気づかれても不思議はないのだけど。

でも、そんな面白そうに、いやらしい笑みを浮かべながら言わな

くても……。

「ああ、そうだよ。笹樹麻実子ちゃんだ。言っとくけど、このことは黙ってるよ」

今さら否定しても無駄だろうから、素直に認めた上で、ちゃんと釘を刺しておく。

「ほむ、了解了解っ！」

ニヤニヤしながら答えるプリン。うん、プリンに弱みを握られてしまったか。

「でもさ、あの子って、ちょっと地味じゃないかな？」

失礼な。

と思ったけど、否定はできないかもしれない。確かに麻実子ちゃんはおとなしくて、それほど目立つ印象ではないのだから。

クラスの男子の評価でも、空気みたいな子、って言われていた気がする。

とはいえ、それでも好きなんだから、しょうがないじゃないか。

「うるさいな、いいだろ。それに、地味なん言い方するなよ。清楚な感じ、とかそういうふうに表示してほしいところだな」

「清楚……っていうのは、ちょっと違わないかな？」

「いいんだよ！ なんだって、麻実子ちゃんは麻実子ちゃんなんだから！」

思わず少し声が大きくなってしまっ。

周りにいた数人が、その声に気づいて俺たちのほうを見ていた。

プリンはさっきまでよりもさらにニヤニヤ度を増している。

「悪いかよ……」

恥ずかしくなって勢いも失くした俺は、赤くなりながら小声でつぶやく。

「いや、いいと思うよ。というか、そういう想いはオイラにとっても必要なんだよ」

急に優しい微笑みに切り替えて、プリンは言う。

「オイラたち妖精は、べつに食べ物を食べたりする必要はないんだ」

バナナクリーム入りカステラパンを口いっぱい頬ばりながら言う。つても、説得力がないぞ。

「食べることは普通にできるし、美味しい、不味いといった感覚もあるからね。美味しいものを食べれば嬉しいんだよ」

苺ミルクでカステラパンをノドに流し込む彼女は、確かに心底嬉しそうな声を響かせていた。

「でね、妖精が生きていくには、エネルギーが必要なんだよ。そのとき一番つなかりの強い人間が感じるドキドキ感。それがオイラたちのエネルギーになる」

「ドキドキ感……」

「うん。よくはわからないけど、心臓の鼓動自体がエネルギーを放出していて、通常なら空気中に広がって消えていくだけのそのエネルギーを捉えて妖精が食べる、という感じになるのかな。ドキドキ

にもいろいろあるよね。怖いときや、緊張したときなんかにも、ドキドキするでしょ？ でも、妖精側の好みの問題はあるかもしれないけど、恋愛のドキドキが一番大きなエネルギーになるんだよ」

そういうものなのか、妖精って。

「守護妖精なら、その守護している人間が対象になるんだ。野良の妖精だと、手近な人間からエネルギーをいただいたりするみたいだけれどね。で、その中でも、とくに恐怖のドキドキを好む妖精のことを、キミたち人間は悪霊と呼んでいるみたいだね」

なるほど。つまり悪霊が悪さをするのは、生きるエネルギーを食べるためなんだ。

「まあ、そういうことになるね。すべてがそうとは言いきれないけど」

と、ついつい話し込んでいるうちに、午後の授業の予鈴が鳴ってしまった。

授業開始まであと五分。素早くパンを口の中に押し込んで、俺はプリンとともに教室へと戻ることにした。

満腹感で眠気と戦いながらではあったけど、午後の授業も午前中と変わらず、ちらちらと麻実子ちゃんのほうを見たりしながら、ぼーっと教師の声を聞き、ノートに黒板の内容を書き写していた。

麻実子ちゃんのほうに長く目をやっていると、そのたびに後ろの席のプリンが、「また見てるし」とか小声で言ってくるのを適当にあしらいつつ、午後何事もなく時間は過ぎていった。

五時間目が終わると、各自担当の掃除場所に散らばっていく。掃除を終えて教室に戻るとホームルームがあり、その後、解散となる。それから、部活がある生徒は各部活動に向かい、帰る人はそのまま校門へと去っていく。もちろん長々と教室で喋っている生徒なんかもいたりするわけだけど。

うちの中学は、どこかの部活に入らなければならないことになっている。でも、三年生ともなると受験があるため行かない人も多くなる。

基本的に自主性を重んじる校風だから、行かないからといって問題になることもない。

ちなみに俺は天文部に所属している。とはいえ、三年生になる前からほとんど幽霊部員だったりするのだけど。

顧問の先生が甘いということもあってか、あまり部活動に興味のない人が集まっている部なのだった。

麻実子ちゃんはどうなのかというと、彼女は文芸部に入っていた。そちらも天文部と同じように、とりあえず在籍しているだけの人も多いらしい。

部活動もちゃんとやれば楽しいだろうし、同じ趣味の仲間が集まるのだから、友達もできやすいとは思っただけだ。

「は〜い、今日も一日お疲れ様あ〜！」

朝から夕方までテンションの変わらないこの先生は、やっぱりすごいな。ある意味、という修飾詞つきになるけど。

そう思いながらホームルームの内容を聞き流し、時間が過ぎるのを待つ。

「プリンちゃん、どお？ もう学校には慣れた？ 一日じゃ、まだかなあ〜？」

転入生に気遣いを見せる甘野先生。

教師に向いてるのかどうか、いまいちよくわからない感じの先生だけど、俺はこの先生の雰囲気は好きだった。なんというか、怖いとかそういう印象はまったくないし。

もちろん、悪いことをした生徒がいれば教師としてちゃんと叱るのだけだ。

それでも、あのひらひらの衣装で、あの声で、あのテンションで叱るので、生徒のほうも若干呆然としてしまうからなのか、苦笑を浮かべながらも素直に謝って終了、という場面をよく見かける。

「うん、それなりには。それに、優歩がいるから大丈夫だよ」

プリンはきっぱりと答える。

最初の自己紹介だけは、あんなに丁寧口調で猫かぶっていたプリンだったけど、疲れてきたのか、すぐに普段どおりの軽い口調に戻っていた。

でも、先生に対する口の聞き方は教えないとダメだろうな。

なんて考えていたのだけど、甘野先生は気にする様子もなかった。

「あらあら、ほんとに仲がいいのねえ〜！ 名取くん、これからもしつかりプリンちゃんをフォローしてあげるのよ！」

「はい……」

こちらを振り向いて、くすくすと笑うクラスメイトもちらほらとあまり目立ちたくはないのに……。

プリンがいたら、平穩無事な学校生活を続けていくのは無理なのかもしれない。先行き不安だ。

麻実子ちゃんもこちらに目を向けてほのかに笑みを浮かべていた。

俺は微妙に恥ずかしくて、窓の外に視線を移した。

「そうそう、名取くん、笹樹さん。今日は美化委員会の日だから忘れずにね！」

「はい」

慌てて前に向き直った麻実子ちゃんと俺の声が重なる。

言われなくても忘れるわけではない。待ち望んでいた、麻実子ちゃんと一緒にいられる時間なのだから。

一年生のときは学級委員をやっていた俺と麻実子ちゃんではあるけど、今は美化委員だった。

学級委員は、もっと優秀でリーダーシップのある生徒が他にいたのだ。

麻実子ちゃんは綺麗好きらしく、進んで美化委員に立候補していた。それを見た俺は、またしても自分で立候補したのだ。

美化委員は、クラスの掃除場所の点検と、花壇の世話が主な仕事となる。

美化委員の顧問が担任の甘野先生だからというのもあってか、雑用まで頼まれたりするのは、ちょっと納得のいかない部分ではある。でも、そういう場合は俺と麻実子ちゃんのふたりで、というふうに表示される場合が多いため、彼女と一緒にいられる時間が増えるという点では結構嬉しかったりするのだけだ。

ホームルームが終わったあと、俺は教室の自分の席に座って美化委員会が始まるのを待っていた。

委員会にはこの教室が使われる。

顧問が担任の甘野先生だからだけど、ほとんどの生徒が帰ってから始まるので、もうしばらくは待つことになるはずだ。

先生も一旦職員室に戻ってから、再び教室にやって来ることになる。委員会用の準備などもあるのだろう。

さて、ここでちょっとした問題があった。

プリンだ。

部活にはまだ入ってないからいいとして、俺からあまり離れられない彼女。先に帰らせるということもできない。

「……ってわけだから、委員会のあいだ、廊下で待っていてくれるか？」

「ほむ。了解っ！」

俺の願いを素直に聞き入れたプリンは、カバンに教科書を詰め込んですでに準備万端だった。

そのうち、麻実子ちゃんも掃除から戻ってきた。甘野先生はまだ来ていない。

「名取、まだ先生来てないんだね」

麻実子ちゃんが声をかけてくる。

彼女は俺の横の席に座っていた。委員会のときは、自分の席ではなく、いつも俺の隣に来てくれる。

クラスごとにまとまっておくように、と先生に言われているからなのだけだ。

「笹樹、おかえり。いつも時間ぎりぎりだしね、あの先生が来るの。それはそうと、今日もやっぱり見回りはあるよね」

「毎週のことだし、多分あるだろうね。プリンちゃんは、もう帰るのかな？」

後ろの席で俺たちの会話に耳を傾けていたプリンに、麻実子ちゃん優しい口調で尋ねる。

「優歩と一緒に帰るつもりだから、廊下で待ってようかな〜って思ってたところだよ」

「……そうなんだ。ほんとに仲がいいのね。でも、見回りもあると遅くなっちゃうよ？」

そうなのだ。

美化委員の務めとして、各掃除場所の確認もしないといけないことになっている。

プリンも一緒に行ってもいいのだけど、せっかく麻実子ちゃんとふたりきりになれる時間だし、悩みどころなのだ。

「そうなのかい？」

と俺のほづをつかがうプリン。
……よし、こうしよう。

「プリンは先に帰っていいよ。道はわかる？ まだ覚えてない？
じゃあ、地図を書きましょう」

俺はノートを一枚破って家までの簡単な地図を書き始める。
最後に麻実子ちゃんからは見えないようにちよっこと字を書き足してプリンにそれを差し出した。

「ほら。気をつけて帰るんだぞ」

「ごめん、見回りが終わるまで、麻実子ちゃんに気づかれないように隠れてて。」

紙に書いた文字を確認したプリンは、軽く頷いて、紙を折って制服のポケットに入れる。

「了解つ。じゃあ、またあとでね！」

そう言ってカバンをつかみ、プリンは元気よく教室を出ていった。でも、隠れるといても俺から遠くへは離れられないのだから、廊下の曲がり角辺りで様子を見るくらいしかないはずだね。

他の生徒からは丸見えだろうし、変な噂にならないといいけど……。

「はあ〜い、お待たせ〜！」

そんな俺の心配を振り払うような声で、プリンと入れ替わりにハイテンションなフリル衣装の先生が教室へと到来した。

委員会の集まりのあとは、やはり見回りの時間となった。

各クラスの美化委員ふたりずつで、それぞれ自分たちのクラスの担当になっている掃除場所を見て回ることになる。

ちゃんと綺麗になっているか、ゴミは捨てられているか、黒板のある教室の場合はちゃんと消されているか、など、美化委員日誌にチェック項目が書いてある。

俺は麻実子ちゃんとふたり並んで、廊下を歩いていた。

クラスの掃除場所は自分たちの教室も含めてだいたい五、六ヶ所ほどある。美化委員になってまだ日が経っていないけど、どういう順番で回っていくと効率がいいかを、そろそろ考え始めている頃だった。

「ねえ、プリンちゃんって、名取の家で一緒に住んでるの？」

家庭科室へと向かいながら、麻実子ちゃんが訊いてきた。

「うん、そうだよ」

「すぐく仲がよさそうだよね。うらやましいなあ、って思って見たの」

うらやましいって……一瞬ドキッとしたけど。

あ……そっか、そういうことか。

「笹樹って、ひとりっ子だったよね」

「……うん。名取って、妹さんもいるんだよね？ いいなあ、私も兄弟ほしかったんだ」

「妹もプリンも、うるさいだけだけどね。笹樹は男兄弟と女姉妹、どっちが欲しかったの？」

「うん、そうだなあ。可愛い弟が欲しかったかな」

ちょっと頬を赤らめながらそう言う麻実子ちゃん。彼女に弟がいたら、ものすごく可愛がるだろうなあ。

「あ……」

麻実子ちゃんはなにか気になったのか、背後を振り向いてきよきよと辺りを見回していた。

プリンのバカ、気づかれたか？

「どうしたの？」

とりあえず、俺はなにも気になるようなことはなかったよ、という感じを装っておく。

「……うん、なんでもない」

麻実子ちゃんは笑顔を浮かべて振り返る。

なんとか気づかれずにすんだかな？

まったく……しつかり隠れていてくれないと困るじゃないか。

それから俺たちふたりは、家庭科室、音楽室、視聴覚室を見回した。

そのあいだも俺がふと後ろを盗み見ると、本人は上手く隠れたつもりなのだろうけど、髪の毛の一部やらスカートの一部やらがしっかりと見えているプリンの姿があった。

俺は麻実子ちゃんに積極的に話しかけるようにして、こちらに気

を引くことで、プリンが気づかれないようにしていた。

さて、あとは教室掃除の確認だけだ。それが終われば、美化委員
日誌を職員室の甘野先生に渡して今日の仕事は終了となる。

職員室は下駄箱の近くにあるため、教室でカバンを持ったあとに
日誌を渡しに行くのが効率的なのだ。

「あれ？ ゴミ箱がいったいだ」

「ほんとだ」

「おかしいなあ、さっき教室を出るときには入ってなかったのに…

…」

「え？ そうなの？」

教室の後ろのドアから、ちらちらと中をつかがうプリンの姿が見
えた。

俺の視線に気づくと、人差し指と中指を立てて、ピースサインを
作る。……なるほど、お前の仕業か。

「捨てに行こっか」

麻実子ちゃんはゴミ袋を取り出して口をしぼる。

「笹樹、俺が持つよ」

そう言って、そっとゴミ袋を手取る俺。

いいよ、私が持つから、などと言わせる間もなく、素早く持って
しまつのがポイントだ。なんてね。

「あ……ありがとう」

俺たちは、ゴミ袋を持っているということで、カバンは持たずに教室を出た。

ゴミを捨ててから教室に戻ってくればいいだろう。……せつくだから少しでも長く楽しい時間を過ごしたいしね。

プリンが微妙に気を回してくれたおかげで、裏門近くにある焼却炉までの往復分の距離だけ、麻実子ちゃんと一緒にいられる時間が増えたことになる。

プリンには感謝しないといけないな。あとでまた、苺ミルクでも買ってやるか。

「ふふっ」

上履きから靴に履き替え、中庭を歩いて焼却炉へ向かっている途中、突然麻実子ちゃんが微かな笑い声を上げた。

「どうしたの？」

「プリンちゃんって、ほんと可愛いわよね」

そんなことを言い出す。

一瞬、隠れて追いかけてきているプリンのことがバレたのかと思っただけど、どうやらそういうわけではなさそうだった。

それにしても、可愛い、か。確かにぱっと見、可愛いとは俺も思うけど。

「名取は、ずっと前からプリンちゃんとあんなに仲よくしてるの？」
「えっと……」

やっぱり仲よしに見えるんだ。

プリンは守護妖精としてずっと俺のそばにいたみたいだけど、実

際は昨日初めて会ったようなものなのに。

でも、いとこ同士ってことになっていてのだから、麻実子ちゃんには嘘をつくことになるけど、ここは適当に話を合わせておこう。

「そうだね、小さい頃からよく一緒に遊んだりしてたんだ。でも落ち着きがないから、一緒にいるこっちに迷惑がかかることが多いさ。そのあたりはもう少し自覚してもらいたいと、ずっと思ってるんだけどね。あんな感じの子だから難しいかな」

ははは、と乾いた笑いを浮かべながら言う。

「ふふ。やっぱり可愛い。プリンちゃんみたいな妹がいたら楽しいんだろうなあ」

同じクラスに転入してきているわけだから同い年ってことになるはずなのに。

プリンはイメージ的に年下っぽい雰囲気を漂わせているのだろう。もっとも妖精の実際の年齢がどうなのかは、わからないけど。十萬歳とか言い出しそうで怖いから、本人には聞かないことにしておこう。

俺たちが焼却炉に着くと、ちょうど用務員のおじさんがゴミを燃やしているところだった。

これもお願いします、と言って、持ってきたゴミ袋を焼却炉の近くに積んであったゴミの山の横に置く。

「はい、」苦労さん

人のよさそうな微笑みを向けてくれる用務員さんにお辞儀をして、俺たちは職員室の甘野先生のもとへと向かった。

カバンは教室に置いたままだったため、焼却炉から戻るとなる
下駄箱で上履きに履き替えなければならぬ。先に職員室に寄つて
も距離的には変わらないし、先に日誌を渡してしまうことにしたの
だ。

甘野先生は、いつもどおりのハイテンションで日誌を受け取り、
労いの言葉をかけてくれた。

その後、職員室を出た俺と麻実子ちゃんは、一旦教室に戻ってカ
バンを持ち、そのままふたりに昇降口を通って校門まで歩いて来て
いた。

夕焼けがやけに綺麗に見えたのは、麻実子ちゃんと一緒にいるか
らだろうか。

「今日はお疲れ様。それじゃあ、また明日ね。……プリンちゃんに
も、よろしく」

手を振って背中を向ける彼女。

麻実子ちゃんの家は、俺とは反対方面だから、一緒に帰ることが
できるのもここまでなのだ。

さすがに遠回りしてまで一緒に帰ろうとするのは、図々しいすぎ
るだろうし。

「うん、また明日！」

俺も彼女に手を振り返して家路に就いた。

麻実子ちゃんとふたりの時間を、心の中で思い返しながら

。

今日もたくさん話せたな。美化委員のある日は、やっぱりいい。他の日は全然話せないわけだけど……。

麻実子ちゃんとの会話を思い出して、ちょっとニヤついたりしながら歩いていたのだろう、唐突にツツコミが入った。

「なにひとりでニヤニヤしてるんだか。気持ち悪いよ」

言うまでもなく、プリンだ。すっかり忘れていた。

こいつは俺から離れられないのだから、どこか近くに潜んでいるのは当たり前だった。

気持ち悪いなんて言っているくせに、プリンは俺のそばに来るなり腕を絡めてきた。

「こらこら、まだ学校から近いんだから、誰かに見られるかもしれないだろ」

「もう下校してる生徒なんてほとんどいないって。それに、ずっと言われたとおり離れて隠れてたんだから、これくらい許してよ」

まあ、いいけどさ。それにしても、隠れてたといっても、あれじゃあ……。

「ほむ？　上手く隠れてたつもりだったんだけど……。ダメだったかな？」

「いや、ダメとは言わないけど。今後はもう少し考えて、もうちょっと見つかりにくいように隠れてくれるか？」

明らかに不満そうな顔になるプリン。

「ほむ。でも、しっかり隠れたりすると、優歩と麻実子の様子が見れないじゃん」

やっぱり、のぞいてたのか。

「そりゃあ、面白いしね」

プリンはコロツと笑顔に戻って、きっぱりと言い放つ。

「べつにいいでしょ？ キミのドキドキは、オイラのご飯みたいなものなんだよ？ だいたい、ちよっと手伝ってあげたっていうのに、文句言うなんて酷くない？」

ああ、そういえばそうだった。

あの教室のゴミの件は思ったとおり、というか他には考えられなかったけど、プリンの仕業だったというわけだ。

「うん、それは感謝してるよ。ありがとう」

「ふんっ」

突然の感謝の言葉に驚いたのか、プリンは赤くなって顔をそむけていた。

「ご褒美に、苺ミルクをおごってやるっ」

「ほんとかい！？ やったあ！」

こんなことでよくそこまで喜べるな、とも思ったけど、それがこいつ、プリンってやつなんだ。

可愛い顔をした、妙な口調の守護妖精。

突然現れて、こんな状況になって戸惑ってはいるけど。これはこれで楽しくていいかもしれないな。

苺ミルクを幸せそうに飲んでいるプリンを見ると、そんなふうに思えてしまう。

「これからも、いろいろ手伝ってあげるよ!」

苺ミルクを飲み終えた彼女は、いたずらっぽいニヤニヤ笑いを浮かべながらそう言った。

それはありがたいと思うのだけど、プリンのこの面白がっているだけのような笑顔を見ると、とんでもないことをしでかしそうで、すごく怖い……。

もう地平線近くまで落ちかけている夕陽は、腕を組みながら歩く俺たちふたりの姿を赤く染め上げていた。

いろいろなことがあった一日が終わり、俺はぐっすりと眠った。夢の中にまでプリンの声が響いていたように思うのは錯覚だろうか。もちろん夢のことだから、よく覚えてはいないけど。

ともかく、朝になったらしい。

カーテンから朝の心地よい日差しが俺の頬を温かく包み込み、雀の鳴き声が聞こえてくる。

「うーん」

まぶたを開けた俺の目に飛び込んできたのは、昨日はプリンの顔だったけど今日は違っていた。

「あっ、お兄ちゃんおはよう〜!」

「わっ!」

すぐ目の前にいたのは優佳だった。なんでお前がここにいるんだよ!」

「だってえ、お兄ちゃん目覚まし止めないんだもん」

だからって、勝手に入るなよ。

「え〜、いいじゃん。私とお兄ちゃんの仲じゃない」

「あのなあ……。まあ、それはいいとして、なんですぐ目の前にいたんだよ」

「ついでだから、お兄ちゃんの寝顔を観察してただけ」

きっぱり言っただけの優佳。

うむ、そんなことをして楽しいのだろうか。

昔からいつも俺にべったりだった妹だし、そういうのも趣味みたいになってくるのかもしれない。さすがに最近では、そうそうくっついてきたりはしなくなっただけ。

それにしても、パジャマのまま俺の部屋に入ってくるかねえ。

もっとも妹のパジャマ姿なんて、べつにどうということはないのだけど。そもそも、小学生だし。

それはともかく、プリンはどうしたのだろうか。

思わず、部屋の中を見回す。

「ま、ほんとには起こそうと思って近づいたんだけど。……って、お兄ちゃん、どうかした？」

「あ……いや、なんでもない。起こしてくれてありがとな。んじやあ、そろそろ着替えるから出ていけよ。お前もそろそろ着替えて学校行く準備しないとだろ？」

「はあ〜い」

優佳は甘ったるい声を残して、そそくさと出ていった。

さてと、プリンは……。

俺は、部屋の中を隅から隅まで見回してみた。

ベッドの裏……には、いないな。見える範囲だと、もう他に隠れられそうな場所はない。

外に出てるのか？ いや、寒いから嫌だなんて言っていたし、それはないな。

とすると……。俺はクローゼットを開けてみる。プリンはここに

もいなかった。

「ぐっも〜にい〜ん」

背後から寝ぼけた声が響いてくる。彼女は押入れの上の段から顔を出していた。

なるほど、そっちだったか。

「妹さんが来てたからね。物音を立てないように気をつけていたんだよ」

そう言っつて、布団の間からもそもそと這い出してくるプリン。

俺の部屋にはベッドがあるのだけど、季節に応じてベッドの掛け布団は使い分けるため、押入れに仕舞ってある布団を寝床としていたようだ。

……妖精でも寝たりするのか。

「そりゃあね。人間の睡眠とまったく同じ原理なのは、わからないけどさ」

それはともかく、布団から出てきたばかりなのに制服を着ているのは、どうということなのか。

「ほむ？ べつに構わないでしょ」

「シワになるだろ。それに、寝苦しくなかったか？」

俺は思わず声を上げていた。

「ああ、そういうことね。これは素材が違うから、寝ているうちにアイロンがかかるような感じなんだよ。寝苦しいつてのは、よくわ

からないかも。オイラはべつに気にならないよ」

妖精だから感覚も違つのだろうか。素材が特殊だからなのかもしれないけど。

まあ、どっちでもいいか。

とにかくプリンはすでに起きていて、学校に行く準備も万端ということだ。

「じゃあ、着替えるから」

「わかった」

窓のそばで外の景色を眺め始めたプリンの後ろ姿を気にしながら、素早く着替える。

こうして今日も一日が始まった。

昨日と同じようにプリンには窓から外に出てもらい、俺は一階へと下りる。今日は急いで朝食を終え、プリンに文句を言われないように心がけた。

優ちゃん、もっとゆっくり食べなさい、と母さんからのお小言は浴びせられたけど。

プリンは相変わらず腕を絡めてくる。

振り払うと文句を言うだろうし、周りを気にしながらの登校。

そのうち絶対誰かに見られるよな……。噂になったらやっぱり困るよなあ……。

もっとも、たった一日にして、「仲がよすぎるほどべったりしすぎな、いとこ同士」なんてクラスメイトに言われていたのだから、今さらという気もするけど。

「おい、優歩！」

背後から声がかかった。

む、この声は。

振り返ると、背がすらりと高く、少々たれ気味ではあるけど切れ長の目をした、爽やかな笑顔が似合う男が立っていた。

桑島宵夢^{くわしまよいむ}。彼とは小学校に入学してから中学二年生までずっと一緒のクラスだった。

ここまで腐れ縁が続くと、お互いのこともさすがによくわかってくる。

だから、今でこそクラスが違ってしまったけど、一番気の知れた友人だった。親友と言ってもいいだろう。

爽やかで結構カッコいい上に、こいつは俺と違って女の子とも積極的に喋れる。だから結構人気もあるらしい。

目つきの悪さのわりに積極性に欠けると言われるような俺にして

みれば、ちよつと悔しいというか、うらやましく思っている部分だ。

「あつ、宵夢。微妙に久しぶりだな。また女の子追いかけるのに忙しかったのか？」

「こちらから、人聞きの悪いことを言うな。最近は部活が忙しくてな。春の予選も近いし、気合いを入れて練習してるんだよ」

宵夢は爽やかな笑顔を崩さずに訂正してくる。

こんなに爽やかな容姿だけど、実は体育会系で、空手部所属だったりする。それほど強そうには見えないのだけど、どういうわけか、県大会で上位に進出するほどの実力を持っていた。

顔に似合わず負け嫌いで、さらに上を目指して特訓だ！ なんて去年も言っていたっけ。

三年生となった今年は最後の大会となるため、とくに気合いが入っているようだ。空手の全国大会は夏休み中に行われるのだけど、県ごとの予選会は五月末にあるのだとか。

「へへ、頑張ってるんだな」

「当たり前だ。と、そんなことより」

宵夢が視線を俺から逸らし、俺の陰に隠れるようにして警戒しているプリンのほうへと向けた。

プリンは普段の調子とは違って、人見知りしているような雰囲気だった。そんな恥ずかしがり屋な性格でもないと思うのだけど。

「それが、噂のいとこの子か。確かに噂どおり、仲がよさそうだな」

そう言うと、宵夢は無理矢理俺の腕をつかんで引っ張り、その腕に絡みついていたプリンを引き剥がす。

そして、彼女には聞こえないように俺の耳もとでこう言った。

「麻実子ちゃんは、どうしたんだよ？」

その声には、若干の怒りも混じっているように思えた。宵夢にしては珍しいことかもしれない。

中一の頃、俺と同様、麻実子ちゃんと一緒のクラスだった宵夢。明るく背も高くスポーツも結構できる宵夢は、クラスの女子にも人氣があった。

そして二学期が始まって少し経った頃、クラスでも可愛いと評判の子から告白された。

そのままつき合ったりするのかな、と思っていたのだけど、宵夢はきっぱりと断ったそうだ。好きな子がいるんだ、と。

そして、宵夢が好きな子というのが、よりもよって麻実子ちゃんだった。

俺も好きなのだから悪い言い方はしたくないけど、クラスの男子の評価では、おとなしくて地味な女の子だというのに。

もちろん、好きになるのに明確な理由なんて必要ないとは思いますが。でも俺としては宵夢がライバルだと、舞台上上がる前から負けているような気がして嫌だった。

その後、積極的な宵夢は麻実子ちゃんを呼び出して告白したらしい。結果、ふられた。

彼女はただ、ごめんなさい、とだけ答えたそうだ。好きな人がいるのか？ という問いにも無言だったという。

そして宵夢は、優歩か？ とも訊いたらしい。

そんなこと訊くなよ、と思っただけ。

ともかく、そう訊かれた彼女は、やはり無言だった。でも宵夢は、さっきの答えとは違った雰囲気を感じたのだそう。

「本人が言ったわけじゃないが、彼女はお前に好意を持つてるはずだ」と宵夢は語る。

俺は、麻実子ちゃんが好意を持ってくれているかまではわからなけれど、少なくとも嫌われてはいないはずだし、一緒に話していらればそれで幸せだから今のままでいいや、なんて思っていた。

余計なことを言っただけだというのは重々承知しているけど。もちろん臆病なだけだというのは重々承知しているけど。

それが宵夢には許せないみたいだ。宵夢は麻実子ちゃんにふられてから、当たって砕ける！ と言いたげな目で俺を見るようになっていた。

俺は、砕けたくないし、と思うばかりで、結局そのまま変わらないう距離を保ち続けているのだけ。

「べつに、プリンは単なるいとこだし。くっついてくるのは、昔からだから仕方ないだろ」

ともかく俺は、宵夢に反論した。

「それもちょっと納得いかないんだよな。ずっと一緒にクラスだったのに、いとこの話なんて聞いたこともなかったぞ？」

うっ……鋭いな。

まあ、長年一緒にいたのだから、それくらいは感づかれてしまう

か。

とはいえ、本当のことを言うわけにもいかないし、このまま嘘をつき通そう。

「だって、いとこの女の子がべたべたくっついて来るだなんて、恥ずかしくて言えないだろ？」

「そうか？」

鋭い疑いの眼差しを向けられているように思えて、内心焦ってしまっ。

とりあえずここは反撃しておくか。

「……お前に女の子のいとこの話なんて、できるわけないだろ？ しつこくいろいろ訊いてくるだろうし、紹介しろとかまで言い出しそうじゃん？」

「むっ……。お前親友の俺のことを、そんなふうに思ったのか？」

「もちろん」

きっぱり言い放つ。

「……まあ、いいさ。大切なところ、ってことだな。よくわかった」

本当にわかってくれたのだろうか。微妙に怖い口調だったような気がしなくもなかったけど。

「最後にひとつ聞かせろよ。麻実子ちゃんの話は、今でも好きなんだな？」

「……うん」

宵夢が相手だと、恥ずかし気もなく本心を言えてしまっから不思議

議なものだ。

やっぱり俺の中で宵夢の存在は、クラスの離れた今でも変わらずに親友なんだ。

それは宵夢のほうも同じなのだろう。爽やかな笑顔に戻った彼は、

「わかった。頑張れよ」

そう言うと、訓練も兼ねているから、と走って先に行ってしまった。

「お前も、大会頑張れよ！」

遠ざかる宵夢の背中に向かって、俺は大きな声援を送った。

「ねえ、こそこそと小声で、なにを喋ってたんだい？」

宵夢がいなくなると、プリンが俺に腕を絡め直しながら訊ねてきた。

「男同士の話だよ」

とりあえず、適当にごまかしてしておく。

そういえば宵夢と話してるあいだ、プリンはまったく話しかけてきたりしなかった。それどころか、近づきもしないで素直に話が終わるのを待っていた。

今までのプリンからは考えられなかったけど。

「なんかね、ちょっと変な感じがしたんだよ。……あつ、キミの親友なのに、こんな言い方をしてゴメンね。でも、嫌な性格だとかそういうことじゃなくて、なんか雰囲氣的に引つかかるっていうか……。うーん、オイラ自身にもよくわからないや」

ふむ……。

まあ、苦手な相手というのは誰にでもいるものだろう。

妖精とはいっても、どうやら人間っぽい部分も結構あるようだし。プリンのことがよくわかってくるほど、そう思うようになっていた。

「ま、いいや。それよりさ、あいつとはお互いに、優歩、宵夢、って名前で呼び合ってるんだね」

今までの雰囲気振り払うかのように、いつもどおりの力強い口調に戻って、プリンがそんなことを言い出した。

「ああ、小学校からの腐れ縁だな」

「なのにごうして、麻実子のことは笹樹って名字で呼ぶんだい？麻実子も優歩を、名取って呼んでるし」

「いや、それが普通なんだよ。だいたいみんな名字で呼んでる」

そう答えると、怪訝な表情を見せるプリン。

「でも、オイラと話してるときは、彼女のこと、麻実子ちゃんって呼んでるよねえ？」

なんて言ってくる。俺はちょっと答えに窮してしまった。

「そりゃ、名前で呼べたほうが仲よしって感じでいいなあ、とは思ってるからさ。でも、実際に名前で呼ぶのは恥ずかしいし……」

「なんで恥ずかしいんだい？ オイラにはそれがよくわからないんだよね」

うーん、どうやって説明すればいいのだろう。

「麻実子はオイラのこと、プリンって名前で呼んでたよ？」

「それは、名取って名字で呼ぶと、俺と区別がつかないからだと思っけど。他のクラスメイトとか先生も、そう呼んでたでしょ？」

「ほむ、なるほどね。妖精には名字なんて概念はないから、どうもよくわからないけど」

アゴに人差し指を添えて考え込んでいる様子だった。考えても、やっぱり納得がいかない、といった表情ではあったけど。

「とにかく優歩は、麻実子を名前で呼びたいんだよね？」
「え？ うん、そうだね」

もちろん、麻実子ちゃんと名前で呼び合える仲になりたいな、とは思っ。

でも、たとえそういう感じになれたとしても、学校内でお互いに名前で呼び合うのはちょっと恥ずかしい気がする。

俺たち恋人同士です、って宣言しているようなものという気がするし。

……恋人同士なんて考えたら、余計に恥ずかしさが増してきた。

そんな話をしながらだったから、歩いていても牛のような速度だったのだろう。

いつの間にか時間はかなり経ってしまったようで、予鈴の鳴る音が聞こえてきた。

あっ、ヤバい。まだ学校までちょっと距離があるのに……！

「プリン、走るぞ！」

彼女の手を取って走り出す。急がないと遅刻してしまう。

「うわっ、ちょっと！ 走り出してから言わないでよ！」

一瞬バランスを崩しそうになっていたプリンだったけど、どうにか体勢を立て直し、俺に手を引かれながらもしっかりと走り出した。不覚にも、こんな感じで校門まで走ってしまったため、「手をつないで登校してきた、やっぱり仲がいいね」などと噂がさらに広がる羽目になってしまったのだけ。

甘野先生のハイテンションなホームルームが終わりを告げると、突然プリンが声を上げた。

「おーい、麻実子ー！」

「え？ なぁに、プリンちゃん」

突然プリンから呼ばれるなんて思ってもいなかったのだろう、麻実子ちゃんはちょっと驚いているようだった。プリンは俺にべつたりで他の人に声をかけるなんて、今まで全然なかったのだから。

というか、むしろ俺のほうに驚いていたのだけど。なにを企んでるんだ、プリンの奴……。

「ちょっとこっちに来てよ」

軽い口調で手招きするプリン。

麻実子ちゃんは素直にプリンのそば すなわち俺の席のすぐ横まで来る。

ほのかに爽やかな香りの風が感じられた。

「そういうば麻実子って、オイラのことプリンって名前て呼ぶよね」

「え？ そうね」

「それなのに優歩のことは、名取って名字で呼んでるよね？ どう

して？」

「え？」

訊かれて少々戸惑う彼女。

「ん〜、だつて、ねえ？」

そのまま俺のほうに助けを求めてくる。
いや、でも、「ねえ」と言われても。

「ん〜……。みんなだいたい名字で呼んでるよ？ プリンちゃんは名字で呼んだら、名取とどっちかわからなくて混乱しちゃうと思うから……」

「でも、オイラも名取なんだよ？」

「う〜ん、それはそうだけど」

困った表情の麻実子ちゃんも可愛いな。

なんて、そんなこと考えている場合じゃないか。

これはやっぱり、今朝の話を聞いてプリンが気を利かせてくれて
いる、ってことなんだろうな。

76

「だからさ、麻実子も優歩のこと、名前で呼びなよ！ オイラが許すからさ！」

「許すって言われても……、ねえ？」

いや、だから、「ねえ」って言われても。

「じゃあ、命令っ！」

それはどうなんだ？ かなり無理矢理な気がしてきたぞ。

困惑気味にふたりのやり取りを見ていたのだけど。

「う〜ん、でも確かにふたりとも名取なんだから、そのほうがいいのかな？」

驚いたことに、麻実子ちゃんは納得しかけていた。なんとというか、かなり流されやすい性格のようだ。

「うん、そうだよ。ほらほら、とりあえず呼んでおきなつて！」

困った子だなあ、なんて視線をプリンに向けたあと、麻実子ちゃんは俺のほうを向いて遠慮がちに口を開く。

「……優歩くん」

「うん」

ほのかに笑みを浮かべながら呼びかけに応える俺。
ああ……、なんだか、心が温まる感じ。

「いらら、優歩。キミも名前で呼んであげなきゃ」

「え？」

一瞬驚いたけど、それもそうか。
でも、いいのかな？

……うん、いいんだよね？

「……麻実子ちゃん」

「うん」

俺の声に、うつむいたまま応えてくれる麻実子ちゃん。

ああ、幸せだなあ……。

プリンに思考を読まれていたら、こんなことくらいで幸せな気分
に浸ってるんじゃないよ、とツッコミを入れられそうな気はしたけ
ど。

ふたりとも、会話になつてるとは言えない感じではあったものの、
ともかく名前で呼び合う仲にはなれたのだ。

とりあえず、プリンには感謝しておこう。……帰りに苺ミルクか
な、やっぱり。

「あ……それで、プリンちゃん。どうして私を呼んだの？」

「ほむ、忘れてたよ」

プリンはそう言うと、自分のカバンの中をごそごとと漁り始めた。
うわ、なんとというか、ちらつと見えたプリンのカバンの中、すつ
ごくごちゃごちゃしていたような……。

プリンらしいといえば、らしいのだけど。きちんと整理整頓、な
んて性格じゃないだろうし。

「ほい、これあげるよー!」

プリンが取り出したのは、透明で綺麗な緑色の石がついたペンダ
ントだった。

この石はエメラルド? ……なんてことはないよな。

というか、そんなの学校に持つてくるなよ。勉強に関係ないもの
は基本的に持ち込み禁止なんだぞ。

青木ヶ原中学は規則でがんじがらめにするような校風ではなく、
どちらかといえば生徒の自主性に任せるといふ、やんわりとした学
校だから、生徒が通常持つてきそうな物であればたいして問題には
ならないだろうけど。

でも、いくらなんでも、これは……。

「え? うわ、綺麗! でも……こんな高そうなの、いただけ
ないよ」

麻実子ちゃんはさすがに遠慮する。

まあ、そうだよな。こんな宝石のような物を素直にもらえるわけはない。

いや、人によっては全然気にせず、もらってしまうのかもしれないけど。

「これ、べつに高価なものじゃないんだ。その、えーっと、オイラの住んでたところには、こんな石がたくさん落ちてるんだよ。それをちよつと、おもちゃの鎖でつないでみただけの物だから」

少々もつたりしていたのは、自分の住んでいたのが妖精界だからなのだろう。

「う、うーん……。でも、どうして私に？」

「オイラ、麻実子のこと、気に入ってるからね！ プレゼントだよ！」

プリンは満面の笑みで答える。

こんな顔でそう言われたら、たとえ同じ女の子である麻実子ちゃんでも断ることなんてできないだろう。

「そう？ それじゃあ……。いただいておくね。ありがとう、プリンちゃん。今度、なにかお菓子でも作ってお返しするわね」

「ほむ、やったあ！ 目いっぱい甘いのが、頼むね！」

「ふふふ、はいはい」

そろそろ一時間目が始まる。麻実子ちゃんはプリンからペンダントを受け取ると、自分の席に戻っていった。

「おい」

俺は後ろの席のプリンに小声で話しかける。ちなみに、先生はまだ来ていない。

「さっきのあれ、いったいなんなんだよ？」

プリンはちょっと考え込む。

「ん〜、妖精石のペンダント、とでも言っておこうかな。ま、そのうちわかるよ」

納得のいかない答えが返ってきた。

「あれを持つてると、変なことが起こるとか、危険だとか、そういうのじゃないよな？」

「ほむ？ 安心してよ。プレゼントって言ったでしょ？ オイラ、麻実子のこと好きだからね！」

まだ納得のいかない部分はあったものの、無理に訊いてもこれ以上は答えてくれないだろう。

プリンの表情を見ていればわかる。だから追求はしなかった。

麻実子ちゃんを気に入っているという言葉に、嘘はなさそうだったし。

「それよりさ、優歩。どうだい？ 上手くやったでしょ？」

そう言ってプリンはニヤニヤし始める。

ああ、名前の件か。

「そうだな。あれは感謝。帰りに苺ミルクだ」

「やったあ〜！」

満面の笑み。

苺ミルクでここまで喜ぶるっていつものも、やっぱりすごいな。…

…単純なだけかもしれないけど。

そんなわけで、授業の時間はあっという間に過ぎ去った。

とくに今は、なにかとちょっかいをかけてくるプリンもいるから、つまらない授業でも暇にはならない。

もっとも、プリンがいなかったとしても、俺はちらちらと麻実子ちゃんを観察することに余念がないのだから、どちらにしても時間はすぐに過ぎていくのだけだ。

「さあ〜て、みなさん！ 今日も一日お疲れ様〜！」

掃除を終えて綺麗になった教室で、相変わらずな甘野先生が今日も元気にホームルームを始める。

ちなみに、美化委員の顧問ということもあってか、教室の掃除が行き届いていない場合には、結構怒ったりするから油断はできない。

「それにしても、春は暖かくて気分がいいわねえ！ 心も晴れやかになる感じ〜！」

一日の終わりなのに疲れた様子もなく、爽やかな笑顔を振りまく先生。

晴れやかなのは、そのど派手なフリフリ衣装のせいもあるのでは、と思った。

「それなのに……」

先生は突然、表情を曇らせる。そして、

「あの校長ときたら、ちょろっと汚れたところがあつたからって、

美化委員顧問のあなたがしっかりしていないからだとか、ぐちぐちぐちぐち文句言ってきてさっ!」

泣きそうな表情で、というか実際に涙でうるうるしながら訴えかけてきた。

「そういうわけで、美化委員のおふたり、これから強化月間ってことで、毎日見回りお願いねっ!」

「はあ……、わかりました」

素直に返事をする麻実子ちゃん。

俺としても、べつに異論はない。

麻実子ちゃんと一緒にいられる時間が長くなるのだから、むしろありがたいくらいだ。

「あの……他のクラスの美化委員への連絡もしたほうがいいのではよいか?」

「あつ、その必要はないわ!」

麻実子ちゃんの申し出を、あつさり却下する甘野先生。

「うちのクラスの担当部分だけは先にちゃんとしておけば、さすが美化委員の顧問が担任しているクラス、ってことで校長の印象もよくなるって寸法よ! うん、我ながらナイスアイデア!」

クラスのみんなが、苦笑を浮かべていた。

「そういうわけだから、お願いね〜! じゃ、今日は解散〜!」

先生はそう言うと、さっさと教室を出ていってしまった。

さて、とりあえず見回りだ。ということ、またプリンには先に帰るフリをしてもらわないといけない。

一緒に見回りに行ってもいいかもしれないけど、やっぱり麻実子ちゃんとふたりきりになりたいのだ。

どうせプリンは、どこかの物陰から俺たちの様子をのぞくだろうから、ふたりきりとは言えないのかもしれないけど。

まあ、気分的な問題だな。

プリンにそう素早く伝えると、素直に頷きカバンを手に取る。それと同時に、麻実子ちゃんが俺のそばまで歩み寄ってきた。

「それじゃあ、行きましょう……優歩くん」

クラスメイトもまだ残っていたため、ちょっと名前を呼ぶ声だけ小さくなってはいたけど。

「うん、行こう、麻実子ちゃん」

席を立ち、彼女を促して歩き出そうとする俺に、茶々を入れる声
が。

「そこで手をつないで……」

「余計なことと言わなくていい！」

言っまでもなくプリンだったわけだけ。

「ちえ〜！ ま、オイラは帰るから、おふたりさん、頑張ってね！」

軽やかな足取りで、長い髪を揺らしながら教室を出ていくプリン。もちろん教室を出たらすぐ、どこかに身を隠すのだからうけど。

周りで見ている生徒がいたら、やっぱり不審に思ったりするだろうなあ。

でも、ふたりきりの時間のためだ。許せ、プリン。そっちもある意味、頑張れよ。

「……じゃあ、頑張って見回り、行きましようか」

プリンが言った「頑張って」は、別の意味だったと思うけどね。心の中でつけ加えつつ教室を出る。

麻実子ちゃんとともに過ごす時間の始まりだ。

「でも、甘野ってすごいよね」

俺はそうつぶやく。

本人がいる目の前で呼ぶ場合なら「先生」とつけるだろうけど、生徒同士で話するときには教師は呼び捨てが普通だった。

「うん。もうこのクラスになって一ヶ月くらい経つけど、まだ慣れないよ。あのフリルの服には慣れてきたけど」

苦笑を浮かべる麻実子ちゃん。

俺たちは最初の見回り場所、家庭科室に入りながら会話を続けていた。

「校長には怒られてるみたいだけどね。それでも、衣装だけは絶対に変えようとしないので、やっぱりこだわりなのかな」

「そうね。可愛くていいと思うんだけどな、私は」

そう言うてにっこりと笑う麻実子ちゃんのあまりの可愛さに、恥ずかしくなって思わず目を逸らしてしまう。

と、逸らした視線の先に、風で揺らめくカーテンが見えた。

「あ……窓開いてるね。閉めてくる」

すかさず窓のそばまで駆け寄った彼女の短めの髪を、そよ風がなびかせる。

窓を閉めて、少しだけ乱れた髪を整えている彼女のちよつとした仕草も、俺の心にほのかな温かさを与えてくれるようだった。

俺は視線を合わせるのも恥ずかしかったため、彼女がこちらに向き直る前に、とりあえずゴミ箱をチェック。

うん、ゴミはない。

「家庭科室はこれで大丈夫だね」

「うん、そうね。でも、見回りに来てよかったよね。窓が開いたままだったら、また先生怒られちゃうところだったかも」

甘野先生のことなら、心配しなくてもいいとは思ったけど。たとえ怒られても、絶対にめげないだろう、あの人なら。

「あつ、麻実子発見！ おやおや、名取もいたんだ。ああ、そっか、美化委員の見回りだっけね。ご苦労さん！」

突然、そっやって明るい声を上げながら近寄ってきたのは、麻実

子ちゃんの友人、神林梨乃かんばやしらのだった。

麻実子ちゃんの前の席に座っている彼女。

神林が後ろを向いて麻実子ちゃんと話していると、俺の顔が丸見えなわけだし、ふと彼女が視線を移動させたら、麻実子ちゃんを見ていることに気づかれてしまう。

その点では、ある意味、敵とも言える存在だ。

「梨乃、なにしてるの？ こんなところで」

ここは家庭科室から音楽室へ向かう最短の階段なのだけど、普通はそのふたつの教室を行き来することはない。そのため、校舎内でも極端に人気ひといけがない場所となっていた。

だからこそ授業をさぼった生徒なんかが、こちら辺にいたりすることもあるのだけど。でも、今はすでに放課後だから、そういった生徒がいるはずもなく。

「校舎内の散歩をしてるのさ！」

神林は、胸を張って堂々と答えた。

散歩って……。

校舎内じゃなくて、外のほうがいいのでは。

「……名取、なにか言いたそうだね？ 人の趣味に、とやかく言わないでほしいなあ」

べつになにも言う気はなかったのだけど。

俺は麻実子ちゃんのほうに視線を向けて助けを求める。彼女は苦笑を浮かべていた。

「梨乃、優歩くんはべつになにも言っていなかったよ」

そう言って友人をなだめようとする。でも神林は、その言葉に別な意味で反応を示した。

「うわうわわっ！ 優歩くん、だって！ きゃ〜〜、麻実子ってば、いつの間に名取とそんな仲になったの!？」

黄色い声を上げ騒ぎ立て始める神林。

困り顔の麻実子ちゃんを、必要以上に攻め立てている。

「も〜、親友のあたしにすら内緒でつき合ってたなんて〜！ あ、そっか、ここに来たのってそういう……きゃ〜〜！ そっかそっか、そうなんだ〜〜！」

なんかひとりで盛り上がってますよ？ この人。

「ちょっと梨乃お〜！ そういうのじゃないってば〜。ここだって本当に見回りで通りかかっただけなんだよ〜」

麻実子ちゃんは真っ赤になって反論している。

でも、つき合ってるなんて言われて、俺としては悪い気はしなかったのだけど。

「はいはい、わかったわかった」

ニヤニヤしながら、そんなぞんざいな対応をする神林。全然わかってないだろ、君は。

なんて考えながらも、友人同士の微笑ましいやり取りを見て、心和ませている俺だった。

神林は、ひとしきり麻実子ちゃんをおもちやにするかのごとくか
らかっていた。

「さてと、あたしは散歩の続きでもしようっと。じゃ、またね、お
ふたりさん。……麻実子、頑張つてね！」

「うん、見回りの続き、頑張るね」

そう言葉を交わすと、神林は去っていった。

麻実子ちゃん、神林の言った「頑張つて」も、別の意味だったと
思うよ。

最後の見回り場所である教室に着くと、またもやゴミ箱にはゴミが入れられていた。

「あれ、まただよ？ 今日とちゃんと最初に確認もしたのに……」
「見回ってるあいだに誰かが捨てたのかもね。これくらいの量ならロッカーの整理でもしたら出てくる人もいるだろうし」

犯人はプリンだろうと目星はついたので、軽くフォローを入れておく。

ロッカーの使い方は人それぞれだろうけど、普通はジャージとか縦笛とか、毎日持って帰る必要がない物を置いておく場合が多い。だから、こんな紙くずなんかが出るってことは、あまり考えられないのだけど。

「仕方ないから、捨てに行っておこう。強化月間って言ってたし、ゴミが残っていると先生から文句が飛んできそうだし」

そう言って素早くゴミ袋を持ち上げる。

「うん、そうだね」

よしよし、これでまた焼却炉を回って職員室へ行く距離分、麻実子ちゃんと一緒にいられる時間が増えたぞ。

下駄箱で靴に履き替える。

カバンを持って職員室で日誌を返してからゴミ捨てに行ったほう

が早いんだけど、ちゃんと仕事は終わらせてからでないと。
という口実のもと、ちよつとでも麻実子ちゃんと一緒にいられる
距離を稼ぐ。

「きゃっ」

先に昇降口から外へ出た麻実子ちゃんを、強い突風が出迎えた。
めくれ上がりそうになるスカートを手で押さえる彼女。「見えた
？」という感じの目で、俺のほうに視線を向けている。

もつとも、指定の制服だと丈は結構長いから、そうそう見えたり
はしないのだけ。

女子は短いほうがオシャレと考えているのか、短めのスカートに
している子が多い。あまり酷くなければ、学校側も注意したりはし
ないようだし。

でも、麻実子ちゃんはきちんと指定の制服だった。

……ちよつと残念、なんて思いが頭をよぎったり……。

「今日は風が強いね。中庭だと、校庭のほうから砂とか飛んできそ
う」

麻実子ちゃんに続いて昇降口のガラス戸を開け、俺は外に出る。

焼却炉へ向かうには、教室棟と特別棟を結ぶ渡り廊下を横切り、
中庭を通り抜ける必要があった。

渡り廊下を横切った先は花壇地帯になっている。そこを抜けると、
左手に焼却炉のある裏門が見え、右手に曲がれば校庭へと出られる。
校庭側の道にはウサギ小屋もあったはずだ。

小学校じゃないのだから、ウサギを飼っていても喜んで見に行く
人なんてそうそういないんじゃないかと思っていたけど、結構人気

があつたりするらしいから不思議なものだ。確かに可愛いし、わからなくもないのだけど。

中庭を道なりに進んでいくと、花壇地帯は右手に広がっている。すぐ左には教室棟の校舎があり、ベランダになっていた。

一階でもベランダがあるのは、どうしてなのだろう。教室から直接外に出る生徒がいるからなのだろうか。

それにしても、今日は風が強いな。

ゴミ袋を持ち替えようとした瞬間、またしても突風が俺たちを襲った。

「わっ」

髪がすごい勢いで乱れる。

スカートを押さえながら、もう片方の手で髪も気にしている麻実子ちゃんの様子が見えた。

!?

なにかが視界の端、上のほうに映ったような気がした。

とっさに俺はゴミ袋を投げ出し動いていた。

「危ない！」

「きゃっ！」

俺は彼女に飛びつき、その場から突き飛ばす。

勢いあまつた俺と麻実子ちゃんの体は音を立てて地面に転がった。

ガシャーン！

二人が倒れるのと同時に、大きな音が響き渡った。
俺に覆いかぶさられたまま、仰向けに倒れた麻実子ちゃんは視線をそちらに向けている。

俺もそれをじっと見つめた。

落ちてきたのは植木鉢だった。

粉々に砕けた破片と中にあつた砂や植物が、地面の上で無残な姿をさらしていた。

「危なかったね……」

ほっと息をつく。

「あ……あう……優歩くん、ありがとう……」

震えながらも、麻実子ちゃんはどうにか声を絞り出した。

彼女の怯えきつた瞳が、俺のすぐ下にあつた。仰向けで倒れている彼女の上に、俺は四つん這いの状態で覆いかぶさっている状態だった。

「……って、うあ！ 麻実子ちゃん、ごめん！」

慌てて飛びのく。

とっさだったとはいえ、あんな状態だったなんて。

でも麻実子ちゃんは、倒されたときにどこかを打ったのか、そのまま動けない様子だった。

「あ……大丈夫？ ごめんね、突き飛ばしちゃって……。痛む？」

「ううん、大丈夫。びっくりしただけ……。でも……」

顔を歪めて不安そうな表情になる彼女。

「でも、怖い……。植木鉢が落ちてくるなんて……。なんかね、最近変な視線を感じるのがあるの！もしかして私、誰かに恨まれてたりするのかな！？」

震えていた彼女は、言葉を発することで不安な思いが爆発してしまったのか、俺につかみかからんばかりの勢いだった。

「というか、実際に俺の両腕にすがりついてきていたのだけど。俺は彼女の両肩をそっとつかんで落ち着かせようと試みる。」

「大丈夫だよ。……俺がついてるから」

それにしても……。

視線を植木鉢のほうに戻す。あんなのが直撃したら、タダでは済まないだろう。

もしかして、これもプリンンの仕業なのだろうか。もしそうだったら、いくらなんでもやりすぎだ。

「どうした？　大丈夫か！？」

用務員のおじさんが駆け寄ってくる。音に気づいた生徒も何人が、こっちを集まり始めていた。

「麻実子ちゃん、大丈夫？　立てる？」

差し伸べた俺の腕を取って、麻実子ちゃんはどうにか立ち上がる。

「ありがとう。うん、ちょっと肘をすりむいたみたいだけど、大丈夫

夫だと思う」

よかった……。

安堵のためか、俺はふと視線を上に向けた。

一番上の四階のベランダに鉢植えがいくつも見える。もちろん落ちたりしないように、しっかりと固定してあるはずだけど、その並びのうちのーヶ所が不自然に空いていた。

どうやら植木鉢はあそこから落ちてきたようだ。

あれ？ でも、あそこって空き教室じゃなかったっけ？

ベランダ自体は隣の教室のほうからつながっているし、隣のベランダが植物で溢れているところを見ると、植木鉢置き場として勝手に使ってるだけなのかもしれないけど。

俺はちょっと不審に思ったものの、麻実子ちゃんのケガのほうに心配だったため、そのことはすぐに忘れてしまった。

そのあと、念のため麻実子ちゃんを保健室に連れていった。

本人も言っていたとおり、肘のすり傷くらいで他にケガはなかった。肘を消毒してもらい手当てを受けた彼女とともに校門の外まで出た頃には、夕陽はすっかり見えないくらいまで落ちていた。

あんなことがあったあとだし、家まで送るよと俺は言ったのだけだ。

大丈夫だからと笑顔を見せて麻実子ちゃんは断った。

無理について行くのも悪いかなという思いはあったものの、今日は俺も譲らなかつた。

やっぱり心配だったのだ。

彼女も心細いと思っていたのは確かなのだろう、最後には、「じゃあ、お願いするね」と頷いてくれた。

麻実子ちゃんの家……。

お邪魔したことなんてもちろんないけど、どこが彼女の家なのかは知っていた。

俺の想いを知っていた宵夢が、たまたまふたりで彼女の家のそばを通りかかったときに教えてくれたからだ。

宵夢がどうして彼女の家を知っていたのかというと、名簿の住所録から調べたからだと言っていた。

そんなことをするような奴でもないと思うのだけど。宵夢もそれだけ本気だったのだろう。

彼女をしつかりと家まで送り届けてから、俺は自らの帰途に就いた。

当然ながら隠れてついて来ていたプリンが、ひょっこりと顔を出す。

「あれはお前がやったのか？」

そう問いただした俺の声は、少し責めるような口調になってしまっていたのだろう。

プリンはちよつと怯えた顔になって、

「オイラはなにもしてないよ」

とだけ答えた。

その言葉に嘘はないように思えた。

風が強かったし、そのせいだったのだろうと結論づけておく。

でも麻実子ちゃんは、最近変な視線を感じると言っていた。

プリンが隠れて見ている視線、ということも考えられなくはなかったけど、それだと昨日と今日だけのはずだ。最近と言うからには、もう少し前からなのではないかと思う。

彼女の気のせいならいいのだけど、なにかあったら問題だ。注意深く彼女のことを見ておく必要があるのかもしれない。

麻実子ちゃんを守るのは俺の使命なのだから、なんて勝手な決意を固めていた。

それから毎日、俺は麻実子ちゃんとふたりで放課後の見回りを続けた。

視線を感じると言っていたこともあり、周りに気を配りながらではあったけど、それでもふたりでいろいろな話をしながら、俺としては有意義な時間を過ごしていた。

プリンはもちろん今までどおり、どこかに隠れて俺たちの様子を見がっているだろう。

ただ、周りも気をつけて見ておくようには言っている。

もしも誰かが麻実子ちゃんを恨んで彼女に危害を加えようとしているのであれば、近くに潜んでいるという可能性が高い。その場合、当然こちらに注目しているはずだから、違う目線から見ることのできるプリンの存在は有効だと考えたのだ。

もちろん、杞憂であってほしいと願ってはいるのだけど。

見回りをしている時間は、まだ部活などで残っている生徒も多い。ほとんどの先生方も、職員室や他の場所に残っている時間帯だろう。それに加え、なにが楽しいのかよくはわからないけど、放課後に校舎内の散歩をしている神林とも、たびたび遭遇していた。

見回りを終えたあとプリンに尋ねてみたものの、怪しい人影を見たり感じたりはしなかったそうだ。

プリンは妖精だから、なにか特殊な力が働いているとか、人の憎悪の念だとかも感じやすいのではないかと考えていたのだけど。

「べつにオイラたちも万能ではないからね。そんなに優歩たちと違

わないんだ。それに、実体化して消えることもできなくなったオイラじゃ、なおさらだよ」

そうつぶやくプリン。

教室のゴミ箱にゴミが入っていたのはプリンがやったことなのは前にも聞いたとおりだったのだけど、その他にも妖精としての力を使って、少しだけ麻実子ちゃんを驚かせて俺にくつつくように仕向けたり、ということはやっていたらしい。

いきなり廊下に猫が飛び出してきて、ぶつからないように飛びのいた麻実子ちゃんがすぐ横を歩いていた俺の腕にしがみついた、なんてことが確かにあったのを思い出す。

そういうのは、グッジョブ、って感じなのだけど。

「神林はどうして学校内を散歩なんてしてるんだろ。麻実子ちゃんは知ってる？」

「え？ うーん、理由までは知らないかな。でも、小学校の頃からそうだったよ。一緒に行こうって誘われたりもしたんだけどね」

麻実子ちゃんは苦笑を浮かべていた。

普通、校舎内を歩くのは散歩とは言わない気がする。学校内でも普段行かない場所とか、開かずの間みたいな場所があったりすれば、探検といった目的で行ったりする人もいるかもしれないけど。

神林の場合、そういう感じでもなく、校舎内をただ歩いているだけのようだった。いったいなにをしているのだろう。

こうやって話していると、見回りの時間はすぐに終わってしまう。危険があるかもしれない緊張感は確かにあったものの、麻実子ちゃんと一緒にいられるという、俺にとって最高に嬉しいひととき。

やっぱり楽しい時間は、あっという間に過ぎ去ってしまうものの

ようだ。

「それじゃあ、お疲れ様」

「お疲れ様。麻実子ちゃん、気をつけて帰ってね」

「うん、優歩くんもね」

手を振り合ってそれぞれの道へと別れる。

数日間、こんな日々が続いた。だけど、明日からはそれもなくなってしまう。

……とはいっても、たった二日間だけなのだけど。

というわけで、週末になった。今日は土曜日だ。

学校が休みなのだから、当然ながら美化委員の見回りもあるはずがない。

危険かもしれないという状況ではあったけど、麻実子ちゃんに話を聞いてみると、どうやら視線を感じるのは学校にいるときだけで、校門を出てから先はそんなことはないらしい。

だから大丈夫だよ、と彼女は言っていた。

はあ……。麻実子ちゃんに会えないのは、やっぱり寂しいな。かといって、どこか遊びに行こう、なんて誘えるわけもなく。

そんなこんなで、家から出る予定のないつまらない一日が始まった。

「お兄ちゃ〜ん!」

いつもながら、優佳いきなり部屋に飛び込んでくる。
ノックくらいしろって言ってるのに。ま、どうせ聞かないだろう
けど。

プリンもすでに慣れたもので、素早く音も立てずにベッドの脇の
すき間に身を滑り込ませていた。

「なんだよ？ 一応勉強中なんだけど」

それは本当だった。

さすがに最近いろいろとあつて勉強時間が減っていたため、土日
でしっかり取り戻そうと考えていたのだ。

他にすることが考えつかなかっただけ、というのもあるのだけど。

「まあまあ。息抜きも必要でしょ？ ちょっと外の空気吸ってこな
い？」

ニクニクしながら言う優佳。

「うん、それもいいか。……で？ なにを買ってきてほしいんだ
？」

「わっ、さすがお兄ちゃん、話がわかる！」

今まで何度同じようなことがあったかを考えれば当然の予測なの
だけ。

「とりあえず、レモン味のキャンディーが食べたい！ あとね、お
母さんに頼まれてるから、歯磨き粉も買ってきてね！」

「ちよつと待て！ 母さんに頼まれたのなら、お前が行けよ」

「え〜？ だつてお兄ちゃん、息抜きに行くって言つた〜。ついで

だし、いいじゃん。ね？」

と言ってお金を手渡してくる。

「ほらほら、ちゃんとお金出すからさー！」

「それは当たり前だ」

こんな感じで甘やかしていいのだろうか、なんて思わなくもないけど。

どうしても妹のお願いには逆らえなかった。

プリンがジト目でこっちを見ていそうな気配を感じながらも、それじゃあ行ってくる、と部屋を出る俺だった。

「優步って、ダメだなあ、ほんと」

プリンのぼやき声を無視しつつ、コンビニまでの道のりを歩く。

今日は朝起きてから、食事を取ってちょっとのんびりテレビを見たあと、ずっと勉強していた。

さすがに気分転換でもしようかと思っていたところだ。

それに、お菓子類や飲み物の調達もしたかった。どうも俺は勉強中もなにか口にしなからでないと集中力が高まらないらしい。

受験のときはそうも言っていられないだろうから、慣れないといけないとは思っているのだけだ。

ちなみに。

コンビニに向かって歩いていく最中、プリンはしつこく苺ミルクも買ってよと駄々をこねた。

うるさいし仕方ないので買ってやることにしたのだけだ。やっぱり俺って甘すぎるのかな。

「あれ、優歩くん？」

コンビニに着くと、自動ドアから出てきた麻実子ちゃんから声がかかった。

わっ、私服の麻実子ちゃんだ！

思わず感動してしまう。

中学に入ってから彼女と出会った俺としては、制服姿以外の彼女を見たのは初めてだったのだ。

水色のブラウスと白いスカートが春のそよ風に揺られて俺の目に爽やかに映り込む。高級な感じというわけではないけど、可愛いデザインで、春らしいセンスのよい服装だった。

なんだか、仕草まで普段と違った感じに見えるのが不思議だ。

俺のほうはTシャツの上に薄手のジャケット、下はジーンズといういたってラフな格好だったから、ちょっと恥ずかしくも思えた。

もう少しマシな服を着てくればよかったな。

と、それはともかく。

「麻実子ちゃん、あれから視線とかがって感じてる？」

俺は気になっていたことを尋ねてみた。

「ううん、大丈夫みたい。心配してくれて、ありがとう」

「そっか、よかった。今日はコンビニで買い物？」

「うん、そうなの。ちょっと、その……あはは、甘いものとか食べたくて……」

苦笑を浮かべつつ手に持つ袋を少し掲げる。

中まではよく見えなかったけど、たくさん買ったというわけではなく、デザート系とお菓子や飲み物なんかを少し買った程度だよだ。

勉強中つていろいろ食べなくなるから、と弁解するようにつぶやく彼女。

確かにそれには同意。だからこそ、俺も今ここにいるわけだし。妹に無理矢理押しつけられたお使用の用事もあるけど。

「あつ、私もお父さんのお使い頼まれたのよ。CD・Rつていうの？ これね。コンビニつてほんと、いろいろあつて便利だよね」

「そうだね。名前のとおりだけど。でも、だからこそ手軽にお使用に出されるんだし、お互い大変だね。麻実子ちゃんのお父さんつて確か、大学で教授をやつてるんだっけ？」

「うん、そうなの。研究のバックアップを取るためにたくさん使ったって。それなら大量に買ってあげばいいのにな」

「買ってもしすぐになくなっちゃうんじゃない？ でも、研究かぁ。なんかすごそうだね」

「あはは。どうなのかな。うちのお父さん、すぐくのんびりした感じだから……」

そのあと、もう少しだけ会話を続けてから、麻実子ちゃんは帰っていった。

さてと……妹に文句言われないうちに、俺も早く買い物が終わらせるとするか。

それにしても、休日に麻実子ちゃんと会えて嬉しかったな。それだけで、ちよつと幸せな気分になれた。

プリンは、もっと進展しなよキミたち、と言っていたけど。

確かに、恋愛のドキドキがプリンエネルギーになるといふのな

ら、俺はもっと積極的にならないといけないのかもしれない。

週休二日。

ゆっくりできるのはいいのだけど、二日間、暇で持て余したりすることも多い。

結局ぼーっとテレビを見たりマンガを読んだりして無駄に過ごしてしまうなんてこともしばしば。

昨日は思いがけず麻実子ちゃんと出会えて嬉しかったけど、今日もやっぱりとくにすることはない。

朝から少々勉強したあと、居間のソファに寝っ転がってテレビを見ていた。

一応自分の部屋にもテレビはあるのだけど、なにせ小遣いをせつせと貯めて買った小さいテレビだから……。

勉強中にちょっと見る程度ならともかく、普段はせっかくだから居間の大きなテレビで見たいのだ。

プリンが俺の前に現れてから、ちょうど一週間が経つ。

女王様とやらの決定が下されるまで一週間くらいと言っていた。そろそろ連絡が来る頃に違いない。

どうもプリンは、思い立つとじっと待っていられない性格のようで、こっちから連絡を取ってみると言っていた。

「お兄ちゃん、またゴロゴロしてる〜」

「いいだろ、休日なんだから」

突然かけられた声に文句を返しつつ振り向く、奥のソファに寝っ転がりながらポテトチップスの袋に手を突っ込んでいる優佳の姿

があった。

「おい。お前こそ、だらけすぎだろ」

「いいのよ、休日なんだから」

こいつは……。

まあ、とりあえずお菓子を少々いただき、テレビに視線を戻す。
今日はこのままゆったりとしていようかな。

そんなふうを考えていたのだけど。

あれ？

ふと視線を感じた気がして見回してみると、隠れて手招きしているプリンの姿が目に入った。

おいおい、両親は出かけたみたいだけど、妹がいるときに一階に下りてくるなんて。

「さてと、仕方ないから勉強でも始めるか」

ちょっとわざとらしくため息をついてから立ち上がる。

「頑張つてね」

と言いながらパリパリ音を立ててポテチを頬張っている妹を残し、俺は居間をあとにした。

「どうしたんだ？」

部屋に戻るなり、プリンを問い詰める。

「うん、悪かったね。連絡が来たんだよ」

そう言って話し始めるプリン。

守護している相手に姿を見られてしまう妖精というのは、実は結構いるのだという。その場合、通常規定されている処置を実行するのだけど、中には悪質な状況もあるらしい。

例えば、わざと見つかって守護している相手と仲よくなるう、なんて考えることが悪質と見なされるのだという。

そのため、そういう理由で見つかったのかどうかなど、様々な調査が行われる。だからこそ、調査に一週間もの時間がかかってしまうのだそうだ。

今回のプリンに関しては無事、わざとではないことが証明されたようだ。

わざと姿を見られるのがそんなに悪いことなのか、俺にはよくわからなかったけど、妖精にとっては重要なことなのかもしれない。

「というわけで、通常どおりの処置になったんだ。といっても優歩にはわからないよね」

もちろんわからない。説明求む。

「ま、いわゆるボランティアというか、奉仕活動をして点数を稼ぐって感じだね。実際にポイント制になっていて、活動内容によってポイントが加算されていく。で、一定値を越えたら許されて、姿を

消したりもできるもとの状態に戻してもらえらってわけ。連絡に使
ってる通信機能を使って、ポイントを確認することもできるんだよ」

プリンはそう言いながら、ポンポンとノートパソコン風の端末を
叩く。

ポイントって……なんだかゲームみたいだけど。

それはいいとして、奉仕活動ってなんだろう？

「前にも言ったと思うけど、オイラたちのような存在の中には、人
間を守っている妖精以外に、人間に危害を加えるような奴らもいる。
悪霊と認識される存在のことだね」

恐怖のドキドキ感を求めて、人間を脅かしたりする存在、ってこ
とか。

「うん。オイラたちは、基本的にこの世界には不干渉が望ましいと
されている。でも、そいつらのせいで起こった事柄なんかは、この
世界では自然ではないもの。大きな目線で見たら、オイラたちの世
界全体としての責任ということになる。そういうふう女王様は考
えてるんだらうね」

そう言って苺ミルクをすすするプリン。

昨日、ひとつだけじゃ足りないよ！ というので、いくつかまと
めて買わされあったのだ。

「悪霊たちをどうにかするのも、妖精としての使命なんだよ。でも、
通常オイラたちは人間に深い影響を与えたりはできない。ただ、こ
うやって姿を見られてしまって、姿を消したりできない状態になっ
た場合は別なんだ。実際に物に触ったり、積極的に人と話したりも
できるからね。だから、ついでというわけじゃないけど、悪霊退治

の奉仕活動で普通の妖精にはできないことをやってもらおう、というのが処置の内容なんだよ」

「なるほど、大変そうだな。ま、頑張れよ！」

と声援を送る俺に、プリンは事もなげにこう言い放った。

「なにを言ってるんだか。優歩も手伝うんだよ？ オイラだけじゃ、この世界に不慣れなんだから、キミにもいろいろとやってもらわないと」

「おいおい、俺には特別な力だとか、そういうのはないんだぞ？」

「それはわかってるよ。でもね、キミたちから見たらオイラたちは普通ではない存在だろうけど、オイラたちからすれば、キミたち人間のほうこそ普通でない存在なんだ。そして、相手になる悪霊もオイラたちと同じ世界の存在。ゆえに！ キミたちの存在自体が、ある意味『力』になるんだよ！」

そういうものなのだろうか。

でも、俺はこれでも受験生なんだけど……。

「その辺りは、落ち着いてからにしたほうがいいだろうね。どちらにしても、奉仕活動の人員として登録済みの状況だし。オイラだけじゃなく、優歩もね。悪霊にはすでに目をつけられていると思っておいたほうがいいと思うよ」

う……。なんか、酷くないか？

俺は静かで平穏な生活を送っていききたいのに。

「まあ、ここは諦めて頑張つてよ。べつに悪いことばかりでもないんだから」

……どう考えても悪いことばかりのような気がするけど。

「ほら、言ったでしょ？ 恋愛のドキドキがオイラのエネルギーになるんだって。悪霊を相手にするにも、エネルギーが必要なんだ。だから、キミは頑張って麻実子とラブラブになる必要があるんだよ」

ラブラブって……。

「ドキドキの度合いがエネルギー量になるから、キミたちの場合、そばにいて話してるだけでもかなりのエネルギーになってるんだけどね。それはそれで初々しい感じでいいんだけどさ。でも、もうちょよっと進展してもいいんじゃないかな」

なんて、ニヤニヤ顔を向けてくるプリン。悪かったね、奥手で。

「ドキドキしてさえくれば、それでも構わないってば。ただ、そういう恋愛感情に関しては、オイラたちはあまり直接的な干渉はできないことになってるんだ。なるべく手を貸すようにはするけどね」

そう言ってウィンクをする。

「とにかく、明日から活動開始だよ。情報収集はオイラがやるから、優歩はオイラの指示どおりにしてくれればいい。基本的には普通に学校に行って、放課後の時間で活動すればいいと思う。見回りがあるのは、ちょっと厄介な気もするけど、エネルギーも大切だしね。ま、お互い頑張ろう」

「お……おっ！」

なんだか面倒なことになりそうではあったけど。

でも、勉強だけしながら平穩無事に過ごしていく生活と比べたら、

ずっと有意義かもしれない。

プリンエネルギーのためという口実のもと、麻実子ちゃんも頻繁に話すことになるだろうし。

プリンがいなかったら、俺はそんな積極的になんてなれなかっただろう。

とりあえず明日からの今までとちょっと違った日々を思いを馳せつつ、今日の夜は受験勉強という普通でつまらない日常を過ごしておこう。

そんな決意をして勉強の準備をしているその横では、プリンがふたつ目の苺ミルクを飲みながら、連絡用のチャットで情報収集とやらを始めていた。

「わわわ、優歩。ゴメン、苺ミルクこぼしちゃった。あとさ、お菓
子もほしいんだけど。なにかないかな？」

……プリンがいる時点で、すでに普通でつまらない日常ではないのかもしれない。

というか、こぼした飲み物くらい自分で拭いてほしいものだけ
思わず、ため息が漏れていた。

週明けの朝というのは気が重いものだけど、今日は格段に重苦しく感じた。

退屈な日常よりマシだろうと思ったのは確かだったが、相手は悪霊なのだし、やっぱり不安はある。

基本的にはプリンに任せておいて、俺は手伝う程度でいいのだからけど、それでも危険はあるはずだ。

俺が悩んでいるというのに、巻き込んだ張本人は、さも当然そうな顔をしていた。

「ほむ？ どうした？ 元気ないね。忙しくなるんだから、気合い入れておきなよ！」

こんな調子のプリン。もう慣れたけどさ。

「そうそう、先に言うておくよ。オイラは一応ちよつとした力は使える。でもエネルギーの量には限界があるから、悪霊退治するといつても、一日に一体くらいしか相手にできないからね」

エネルギーっていうと、恋愛のドキドキで得られると言ってた、あのエネルギーのことか？

「うん、そうだね。まあ、キミが麻実子といい感じになってドキドキしてくれれば、その分エネルギーも多く使えるんだけどさ。それでも限界はそんなに変わるわけじゃないんだ。人間だって食事を取つてもすぐに力が出せるわけではないでしょ？」

なるほど。

「それと、得られるエネルギーは質が同じであることが望ましいんだ。つまり、たくさん異性を相手にするとか、恋愛だけじゃなくて恐怖のドキドキも取り込んでしまっ、という方法だと質が違うからあまり意味がないってことだね」

プリンが俺の肩をポンと叩いた。

「だから優歩は、麻実子のことだけを想い続けるんだよ」

「ああ、もちろん」

力強く答えた俺。結構恥ずかしいことを言ってるかも、と気づいて顔は赤くなっていたけど。

そんな俺の様子を、プリンは優しげな微笑みを浮かべながら見つめていた。

「ところで悪霊についてだけどさ。妖精界の情報ネットワークで調べてみたんだけど」

あのピンク色の端末で調べたってことか。ほんとに、パソコンと似たような感じなんだな。

「どうやら、悪霊が優歩の学校にも潜んでいるみたいなんだ。まずはその辺りを調べてみよう。確か月曜日は委員会の日だったよね。見回りもあるだろうから、それが終わったら活動開始にしよう。見回りのあと、キミは用事があるからとか言っって残ってくれればいいかな」

「ん、わかった」

「それじゃあ、頼んだよ」

悪霊との決戦を前に、心なしかプリンも緊張しているように思えた。

今日の授業は、まったく頭に入らなかった。

もちろん、いつもはちゃんと頭に入っているのかと言われると自信はないのだけ。

ともかく時間はあっという間に流れた。

美化委員会の集まりでは、強化月間とすることを甘野先生が宣言、すべてのクラスで毎日の見回りをするように指示していた。

私のクラスは自主的に見回りを始めていて立派なのよ、なんてウソっぱちなことまでつけ加えていたけど……。

俺が委員会に出ているあいだにプリンが校舎内を調査できればいいんだけど、彼女は俺の近くから離れられないため、それは無理だった。

やがて、委員会は無事に終わり見回りの時間となった。

見回りを始めると、いつもと同じようにプリンは隠れて俺と麻実子ちゃんのをつけてくる。

そのあいだも、見える範囲に悪霊がいないかはチェックするつもりだろう。

だから俺は麻実子ちゃんと話しながら、なるべくゆっくりとしたペースで歩き、プリンが周囲のチェックをしやすいようにした。

……なんてね。少しでも長く麻実子ちゃんと一緒にいたいだけ、というのが正直な理由なのだけど。

ひととおり見回りを終えた俺たちは、最後の確認場所、自分の教室へと向かっていった。

俺のクラスは三年一組。教室棟四階の一番端にある。教室以外の掃除場所はすべて特別棟だったため、渡り廊下を通過して教室棟に入り階段を上ったあと、その階の一番端まで歩くことになる。

階段を上り終えて一組の教室がある廊下へと曲がると、教室は五つ見える。一番奥が一組で、手前に向かって二組三組四組と並び、階段から一番近いところは空き教室だった。

空き教室があるのは少子化で生徒数も少なくなっているからだろう。でもそれなら、一番奥を空き教室にすればいいのに、とは思っただけど。

「おや、おふたりさん！ 今日もアツアツだねえ！」

その空き教室の前で、神林とぼったり出くわした。アツアツって……べつにそういうのではないのに。残念ながら。というか、神林はまた散歩中なのだろうか？

「そのとおり！ いや〜、やっぱり校舎の匂いっていうか、雰囲気っていうか、そういうのって心が洗われる感じだよ〜！」

それはマニアックな感覚かも、と思っるのは俺だけだろうか。いや、苦笑してるところを見ると、麻実子ちゃんも同じ気持ちのようだ。

「梨乃つてば、相変わらずだね」
「おかげさまで」

なんのおかげなのやら。
そんな感じで話し込んでいると、ふと、妙な気配を感じた。

「……おや？ なんだろ、これ」

神林も気づいたみたいだ。

ガタガタガタ！！

突然、すぐそばのドアが鳴った。

鍵がかけられて開かない空き教室のドアが、内側から無理矢理誰かにこじ開けられようとしているのか、ガタガタと音を立て始めたのだ！

「きゃっ！」

思わず俺の腕をつかむ麻実子ちゃん。

ほとんど無意識だったのだろう。腕に伝わってくる温もりで、ちよつとドキドキしてしまっただけど、今はそんな場合ではない。

そして、鍵がかかかっていて誰もいるはずのない空き教室のドアが今、俺たちの目の前で勢いよく開け放たれた。

オイラはいつもと同じように、ここそと隠れて、仲よく話しながら歩く優歩と麻実子のふたりを追跡していた。

たまに通りにかかる生徒が、じろじろこつちを見ていたりするのが少し鬱陶しいけど、そんなのはもちろん無視だ。

あ……いつもにも増してぴったり寄り添って歩いてるな。

いいよ。そうやって仲よくしていれば、オイラのエネルギーにもなるからね。優歩、頑張るんだよ。

でも、いつもそうなのだけど、あのふたりが仲良くしているのを見ると胸の辺りにもやもやと湧き上がってくるような、この変な感じはなんだろう？

心臓に針が刺さったかのように、ちくちくと痛むような気さえする。もちろん心臓に針なんて刺したことはないけど。

うーん、わからない。

でも、オイラたちは病気になったりしないはずだから、問題はな
いだろう。

それよりも今は、情報にあった学校内の悪霊を探すほうが先決だ。

仲よくお喋りをして笑い合っているふたりの周囲を、オイラはじ
つくり観察する。

見回りコースはいつも同じらしく、先週もずっと通っていた道順
を歩いていく。だから、その通り道以外の場所のチェックまではで
きない。

ま、それは仕方がないだろうね。途中で気になる部分があれば、
あとで学校内をしらみ潰しに調査すればいいだけだ。

……おや、あれは確か神林とか言っただけ？

麻実子の友人だったよね。

どういうわけか、見回り中によく出会う。優歩が言うには、校舎内の散歩が趣味の変わった奴だとか。

確かに教室で見えていても、なんとなく変わったオーラを発している感じではあった。そんな変なオーラを持つあの子がそばにいるからこそ、麻実子が余計に地味な印象を受けるのかもしれない。

そこでオイラは気づいた。優歩たちが今いる場所の横にある教室、そこから強烈な力を感じる。

すさまじい圧力、そこに近づくのを体が無意識に拒絶してしまうほどの「負の力」とでも言えばいいだろうか。

とにかく、そこにはなにか異常があるのは明らかだった。

オイラも体験するのは初めてだけど、これが悪霊というものの力だ。だってことなのか……。

その異常な力は、教室のドアによって閉じられているようだ。でも、そこから外へ　今ドアの前にいる優歩たちのほうへと向かって進み出ようとしていた。

その姿は見えなかったけど、オイラには視^みえるのだ。確かにそこにはなにかがいる。

そして今、その力は閉ざしていたドアの封印を突き破り、目を疑うほどの勢いで飛び出してきた。

ヤバい！

とっさにオイラは動いていた。

飛び出してきたその物体は、一直線に麻実子目がけて飛びかかる。それは麻実子の腕に絡みつき、優歩の腕につかまって抗う彼女の体を、異空間と言ってもいい状態になっている教室内へと引きずり込もうとしていた。

麻実子の悲鳴が辺りに響く。

ズシャツ！

オイラは腰から引き抜いた短刀でその物体を切りつけた。

ぐにゃっ、という妙な感触とともにそれはスパツと千切れ、その大もとは教室内へと素早く戻っていく。

切られて廊下に落ちた残骸は、いったいそれがなんだったのかを確認するいとまもなく、蒸発するかのように消え去った。

大もとの物体が舞い戻った教室のドアはそれを回収するかのようになり、そして、外にいるオイラたちを拒むかのように、一瞬で閉じられた。

引つ張られていた力がいきなりなくなって倒れかかった麻実子を支えている優歩の姿が見える。

「麻実子、大丈夫!？」

神林が叫ぶ声も響いていた。でも、それ以外の音はまったく聞こえない。

なにか特殊な力が働いているのか、今のこの瞬間、この廊下と、そこにいるオイラたち四人、そして教室の中にある物体だけが、普通の場所とは別の次元空間に閉鎖されている状態だった。

「プリンちゃん……?」

麻実子がオイラの存在に気づいて、不思議そうな目をしながらではあったものの名前を呼んだ。

とりあえず声を出せるのなら大丈夫だろう。

オイラは彼女の声には答えず、ドアを開ける。

なんらかの力で押さえ込まれて開かないかもしれないと思ったけど、ドアは意外にも、すんなりと開いた。

教室の中は、どう表現していいかわからないような、色の洪水で溢れた不思議な空間が広がっていた。

もはやここは、教室とは呼べないだろう。

オイラは一瞬戸惑ったものの、とにかく中に足を踏み込む。

相手の土俵に上がるのは不利なのは確かだけど、ここは突撃しないことにはどうにもならないと思ったからだ。空間ごと逃げられてしまう可能性もあるわけだから。

目の前に広がる空間には、教室だった痕跡は見られない。

机も椅子もゴミ箱も黒板もなにもない。それどころか、窓も床も天井も見えやしない。

ただ彩りいろどりの空間がある、そんな感じだった。

でもその空間の中央には、明らかに不自然と思えるなにかが感じられた。

ぼんやりと浮かび上がっているそれは、ここからではよく見えず、いったいなんなのか認識はできなかった。

とにかくそれをじっと見据えたまま、オイラは一步、その空間へと踏み出す。

その瞬間、ドアの横から先ほど切りつけたあの物体が勢いよく飛

び出してきた。

うわっ、しまった、畏だったのか!?

オイラは、その物体のぐにやっとした感触に包まれながら、元教室の謎空間に引きずり込まれる。

くう、失敗した!

でも今さら後悔しても遅い。

オイラはとつさに、唯一まだ自由に動かせる状態だった手首のスナップを利かせて、つかんだままになっていた短刀を優歩のほうに向かって投げつける。

「ゴメン、優歩、あとは頼むよ……」

すでに口もとまでその物体に包み込まれていたオイラには、かろうじて言葉として認識できるくらいの微細な声を発することしかできなかつた。

開いたドアから飛び出してきたもの。

速すぎて正体を認識できなかったけど、それは一直線に麻実子ちゃんへと向かった。

すぐ横で俺の腕につかまっていた麻実子ちゃん。

俺がとっさに守ることもできないほどの速度で彼女の腕に絡みついたその物体は、信じられないような力で彼女を教室の中に引きずり込もうとしてきた。

俺につかまり抵抗する彼女の腕をどうにか引き戻そうとはしたものの、あまりの強烈な力の前に太刀打ちできない。俺は自分の無力さを痛感した。

と、そのとき。

なにかが視界を塞ぐかのように現れた。

それは、長い藍色の髪を振り乱した少女　プリンだった。

プリンは右手に綺麗な飾りのついた短刀のようなものを構えている。

そして、すぐさまその短刀を、麻実子ちゃんに絡みつく物体目がけて振り下ろした。

ズシャッ！

形容しがたい音を立てて千切れる物体。

同時に、引っ張る力を失った麻実子ちゃんは、抵抗していた勢いで俺の胸の辺りに顔面から突っ込む形になった。

俺は彼女を受け止めたけど、そのまま勢いあまって廊下に倒れて

しまう。

麻実子ちゃんが俺の上に覆いかぶさるように倒れてきたため、彼女の体重を全身に受けて廊下にぶつかっただけだ。

勢いと重さで痛かったという本音は飲み込み、麻実子ちゃんの肩にそつと触れ、「大丈夫？」と声をかける。

彼女はなにが起こったのかわからないといった様子で肩を震わせていた。

教室の中から出てきた物体は、プリン短刀に怖気づいたのか、すると引っ込んでいく。

切られた物体の残骸は廊下に落ちるとともに、霧になったかのようになり、消えてしまった。

「麻実子、大丈夫!？」

神林もやつと状況を把握できたのか、麻実子ちゃんを心配して声をかけてくる。

麻実子ちゃんも少しは落ち着いたらしく、視線を周囲に巡らせていた。

「プリンちゃん……?」

彼女の目はある一点を捉え、驚きを浮かべた表情でつぶやく。

その声がプリンに届いたのかどうかはわからない。プリンはなにも答えなかった。

仁王立ちになっていたプリンが、一旦は閉じられたドアを開け放つ。

その視線の先には、妙な空間が広がっていた。

そこは教室のはずだけど、少なくとも今俺の目に見えるそこは教室ではない空間だった。

様々な色が入り混じってうごめいている、そんな印象を受けた。その空間を、プリンは鋭い眼差しで睨みつけている。

意を決した彼女が一步教室内に足を踏み込んだ。

と、それを待っていたかのように、ドアの両脇からとんでもない速度で飛び出す物体が見えた。

さつき麻実子ちゃんに襲いかかってきた、あの物体だ！

そしてそのまま、プリンはぐるぐる巻きにされ、教室の中に引きずり込まれていく。

カラン……。

俺の足もとになにかが転がってきた。

それはプリンが持っていた短刀だった。

その短刀とともに、

「ゴメン、優歩、あとは頼むよ……」

か細く力のない声が、俺の耳に微かに届いた。

えええええええ！？ 頼むって、プリン！ 俺にどうしろって言うんだよ！？

戸惑う俺の目の前で、プリンを引つ張り込んで満足したのか、ごくん、といった感じの妙な音を残してドアは閉まった。

とりあえず俺はプリンの短刀を手取る。

綺麗な飾りのついた柄の部分には、周りの装飾とは不釣合いな藤の紋様が刻まれていた。その部分だけ、やけに和風で浮いている感じだった。

短刀を手に取りはしたものの、俺はその場で立ち尽くしていた。

その横では麻実子ちゃんも怖がって震えている。

ただひとり、神林だけは、こりゃ行くしかないっしょ！ とノリノリな感じだったけど。目もキラキラ輝いてるし。

「ほら、名取！ 麻実子が見てるぞ！」

なんて焚きつける神林の声に後押しされ、俺は閉じられた教室のドアを一気に開け放った。

中には机や椅子が並び、さつきとは一変して普通の誰もいない教室の風景になっていた。

若干薄汚れた感じなのは、使われていない空き教室だからだろう。鍵がかけられて誰も入らない状態でも、ホコリは溜まるものだ。

美化委員としては、空き教室も掃除するように進言するべきかもしれない。

教室の中央付近には、班ごとに向き合わせるように、六つの机が配置されていた。その中央には、大きな白い皿が乗せられている。そして皿の上には、黄色っぱいなかでぐるぐる巻きにされたプリンが横たわっていた。

さらにその黄色の上には、赤い色をしたなにかが覆いかぶさって

いるように見える。

「おお、あれはクレープ生地に、ストロベリーソースだねえ！」

ひょっこり俺の横に顔を出した神林が言う。

なぜに、クレープか。それより、君は驚いたりもしないのか。

いろいろとツッコミどころではあったけど、そんなことを気にしている場合ではないだろう。

クレープ生地に包まれたプリンは顔をこっちに向けてはいたけど、鼻の辺りまですっぽりと覆われて身動きが取れない状態のようだ。

涙目になって俺のほうを見つめている。

そしてその、命名「プリン巻きふんわりクレープ・ストロベリーソース仕立て」の横には、ナイフとフォークを両手に持って掲げている太った男がいた。

よだれをだらだらと垂れ流してプリンを見下ろしているその男。

おそらく俺たちと変わらないくらいの年齢だろう。ガクランも着ている。

でも……。

その背中からは、最初に会ったあの日、プリンの背中に見たのと同じような、綺麗で優雅な模様をたずさえた蝶の羽根が生えていた。

こ……こいつ、妖精なのか!?

そう思うよりも先に俺の頭に浮かんだのは、こんな感想だった。

う……うあ~~~~! 似合わねえ~~~~!!

そいつは俺たちに気づいて、ゆっくりと椅子から立ち上がる。
ゆらゆら。

そんな効果音がつきそうな印象を受けた。

「お前ら、なんだよ！ おやつ邪魔するなよお！」

こもった声を響かせるそれは、ブヨブヨに脂肪のついた体を震わせ、俺たちのほうを見据える。

「もごつ。優歩、そいつが悪霊だよ！ オイラの短刀で、奴の羽根をぶった切るんだ！ もごっつ」

プリンが叫ぶ。

口の周りに巻きついてたクレープ生地をもぐもぐと食べながら、緊張感台無しだ。口の横に生地がちょっとくっついたままだし。

「あつ、結構いけるね、これ」

そんなつぶやきまで聞こえてきたけど。

今はそんなことを気にしている場合じゃない。

ぐおおおおん！

雄叫びを上げる悪霊。

両手のナイフとフォークを振り回すと、教室のいたるところからなにかが伸びてきて、俺たちに迫りくる。

クレープ生地だ！

もはや教室の壁全体がクレープ生地になっていた。

「お前らも、おやつにしてやるう〜〜〜！」

奴が激しく腕を動かすと、その動きに合わせるかのように舞い踊るクレープ生地が、俺たちを包み込もうと迫る。

俺はプリンの短刀を素早く振るい、それに応戦する。

短刀とはいつても家庭用の包丁と同じくらいの長さはあった。それなのに驚くほどの軽さ。

体の一部になったかのように思いどおりに刃を操ることができた。

麻実子ちゃんは、神林とともに俺のすぐそばにいた。

なんとか教室内に入ってきたものの、再びしゃがみ込んでしまった麻実子ちゃんとは対照的に、神林は身を乗り出して状況をしっかりと目に焼きつけようとしている。

俺はそんな神林を手で制した。

「ふたりは下がって。ドアのところだけはクレープ生地になってないみたいだから、そっちへ行つて！」

そのあいだも、クレープ生地は襲いかかってきていた。

それを短刀で切り刻みながら、ふたりを安全な場所まで導く。

短刀を振るたびに、神林の歓声上がる。

「お〜お〜、さすが男の子だねえ、カッコいい！ 頼りになるなあ

！ 麻実子もそう思っしょ？」

「え？ う、うん」

なんて会話まで聞こえてきた。カッコいいなんて言われると、悪い気はしないな。

おっと、会話に耳をすませている場合じゃなかった。
集中し直し、飛びかかってくるクレープ生地を切り刻む。

でも、このまま防戦していても埒が明かない。プリンを救出に向かうか奴の羽根を切り落とすにかかるか……。

とはいえ、奴はナイフとフォークを大げさな動きで振り回しているわけだし、奴のそばまで近づくのは危険だ。

とすると、まずはプリンをあのクレープから引っ張り出して、彼女の力でどうにかしてもらおうほうがいいだろうか。

そう思ってプリンに目を向けると、一心不乱にクレープ生地を頬張っていた。

すでにストロベリーソースのかかっている部分まで達しているため、口の周りは赤いソースでべちゃべちゃだ。

行儀悪っ。思わずそんな感想が浮かぶ。

プリンはものすごい勢いで生地を食べているけど、手も足も自由に動かせない状態だ。

そのまま脱出できるところまで食べ進められるわけでもないだろう。

俺はプリンを助け出そうと駆け出した。

と、それに気づいたプリンがこちらを睨んで叫ぶ。

「優歩、オイラのことはいいから、とにかく奴の羽根をやるんだよ

」！

「う……。そう言われても、どうやってあいつに近づけばいいものか……。」

苦悩しながらも観察を続けていると、俺はあることに気づいた。

奴は腕を素早く動かし、クレープ生地を目が追いつかないほどの勢いで繰り出している。

だけど、あいつ自身はその場から一步も動いていない。動いていないというより、動けないんじゃないだろうか？

悪霊という存在だから頭から離れていたけど、見るからに太ったあんな体型をしているのだから、そのほうが自然にすら思える。

見たところ、この空間にある食べられそうな物は、あのクレープ生地とストロベリーソースだけ。

悪霊なら食べ物がなくても生きていけるのかもしれないけど、プリンも言っていたじゃないか。美味しいものは美味しいと感じると。

奴は自由に動かせる生地とソースを自分の口まで運ぶだけでいい。自分はゴロゴロして腕だけ動かせばそれでいいのだ。

そうやって食の欲求を満たしながらここに存在していた悪霊は、その結果ここまで太った。

俺の考えが正しいかどうかはわからないけど、そう考えれば、おのずと勝機の糸口は見えてくる。

ここは、賭けてみるしかない！

俺は縦横無尽に襲い来るクレープ生地をひたすら短刀で切り続けた。

そのあいだ、教室の中を激しく動き回る。

それに合わせてあいつも俺のほうに向き直り、両手を大げさに動かし生地を繰り出す。

そんな攻防が十分間以上もの長きにわたって続いた。

緊張した面持ちで成り行きを見守る麻実子ちゃん。

そしてその横で、飽きてきたのか大きなあくびをしている神林。
こいつはもしかしたら、ものすごい大物なのではないだろうか…
…。

「ちょこまかと、鬱陶しい奴だなあ〜！ 早くおやつになっちゃえよあ〜！」

悪霊が焦り出しているのが伝わってくる。

奴は焦ってもその場から動こうとはせず、ただひたすら両手を動かすのみ。

その額に腕に体中に汗のようなものが浮かび、周りに飛び散らせていた。

「うわ、ばっちい〜！」

飛んできた汗っぽいものがひっかかったのか、プリンが不快な声を上げている。

顔の周りの生地はほとんど食べ終えたみただけど、やはり身動きは取れないようだ。

腕が動かせないから拭うこともできず、彼女は泣きそうな目をしていた。

でも、今はそれどころではない。とりあえずしばらく我慢してくれ、プリン。

動き回る俺。

狙いはあいつを疲れさせること。

あれだけ大きな身振りで両手を動かしているのだ、そのうち

限界が来る。そう踏んでの作戦だ。

悪霊だから疲れ知らず、なんてことになれば作戦は大失敗、いくら若い健康な中学生とはいえ運動部でもないのにこんなに動き回っていけば、俺のほうが先にダウンしてしまうだろう。

でもあの体型で、しかもあれだけ異常に汗を飛ばし始めている状況……。

これならいけるはずだ。俺はそう確信していた。

プリンも、降りかかってくる汗にまみれながらも、よし、その調子だよ！ といった表情を向けてくれている。

「あつ！ 優歩くん、後ろ！」

！？

突然、背中に衝撃が走った。

くっ、闇雲に繰り出してきているだけかと思ったら、ちよつとは考えてやがったか！

奴はおとりのクレープ生地を俺の目の前に複数突撃させながらも、背後から別の生地を向かわせたようだ。

麻実子ちゃんの声でとつさに反応できた俺は、直撃だけは避けることができた。

でも、背中がズキズキする。どうやら制服を突き破られ、背中が少し切れているみたいだ。

クレープ生地のくせに、硬さを変え勢いをつけることで、こんな芸当までやってのけるとは。

だけど、向こうも焦りが出てきているのは明白だった。

プリンの澄んだ可愛らしい声で繰り出される罵詈雑言攻撃に、思わず視線をそちらに向ける悪霊。

悪霊に、モテるモテないなんてあるのだろうか、ふとそんなふうに思ったけど。

奴の顔がみるみるうちに怒りで赤く染まっていくのを見る限り、そういうのもあるってことなのだろう。

「うるさいうるさいうるさい！ お前は黙ってる！ 動けないくせに生意気な奴め！」

野獣のように叫んでプリンに襲いかかろうとする。

その背後に、奴の視界から逃れた俺が立った。

！！

奴も気づいたようだけど、もう遅い！

俺は高々と掲げた短刀を、奴の似合わない羽根の根もとに向けて、一気に振り下ろした。

短刀が鮮やかな光を放つ。

その光は切り裂いた奴の羽根の根もとを中心に、辺りの景色をすべて呑み込むかのように広がった。

ぐあああああああああ！！

断末魔の悲鳴とともに、嫌な匂いと音をまき散らしながら、奴はその場に崩れ落ちた。

太った人間型をしていた奴の体は、どろどろとした液体状になって床に広がり、そのまま床に染み込んでいくかのように消え去った。

静かになった教室には、呆然とする俺たちの他には、壁や天井、床にくつついたままのクレープ生地やストロベリーソースと、食べかけになった「プリン巻きやわらかクレープ・ストロベリーソース仕立て」だけが残っていた。

それにしても、これは掃除が大変そうだ。

空き教室は掃除場所になっていないし、美化委員である俺たちが処理することになるのだろうか。

「おいこら、優歩！ 動けないよ！ 早くどうにかして！ この、のろま！」

プリンが叫んでいた。

まだ動けないようだし、このままにしておいたほうがいいのかも。なんて意地悪なことを考える俺だった。

ふう、とにかく一段落。

でも、麻実子ちゃんと神林にどうやって説明すればいいものやら……。

そう考えていたのだけど。

どさっ。

突然床に倒れ込むふたつの影。

俺がクレープ生地を引き裂いて助け出すと、プリンはずぐさま麻実子ちゃんと神林のふたりに近づいた。

そして呆然としていたふたりにプリンがそつと触れると、彼女たちはそのまま目を閉じてその場に倒れたのだ。

「お……おい、プリン！」

なにしてるんだ、お前は！

そつ叫ぼうとした俺を制する彼女。

「眠らせたただけだよ、心配しないで」

ふたりが安らかな寝息を立てているのを確認すると、プリンは俺のほうに視線を向けた。

「さすがに、マズいからね。とりあえず、夢だと思わせるしかないでしょ？」

そう言ってプリンは立ち上がる。

そして、まだクレープ生地とストロベリーソースの香ばしい匂いを漂わせながら、教室の中を見回した。

「どうやら完全にもとに戻ったようだね。あいつの気配もなくなっ
たよ」

静かになった教室に、プリンの凜とした声だけが響いていた。

「あいつはどうなったんだ？」

あの悪霊、俺が羽根を切ったことで死んでしまったのだろうか？
悪霊とはいえ、殺してしまったと思うと、あまりいい気分ではな
かった。

「羽根を失くした悪霊は、この世界に存在するための安定感をも失
って消え去るんだよ。でも消滅するわけじゃない。この世界からも
この世界に強制送還されるって感じかな。そして送還された悪霊は、
女王様の裁定を受ける。その後どうなるかは、オイラにはわからない
けどね」

制服にこびりついたクレープ生地をつまんで、ぱくつと口に放り
込みながら彼女は続けた。

「あいつは、食いしん坊な生徒に取り憑いた悪霊だったみたいだね。
ここで食べるお弁当が好きだったとか、そうだった理由で教室に縛
られてたんじゃないかな。とにかく、その取り憑いていた生徒がい
なくなつたあとこの教室に残されて、そのまま存在し続けていた
んだろうね。キミたちの言葉で言うと、地縛霊ってことになるのか
な」

そう語りながらも、ちょっと寂しそうな目をしているように見え
たのは、はたして俺の気のせいだったのだろうか。

「教室に住み着いた悪霊は、エネルギーを得ようとしただろうけど、
それは叶わなかった。ここが空き教室になってしまったからだね。
でも、ここに縛られていたあいつは教室から出ることができなかつ
た。だから記憶の中の食べ物を頼りに生きてきた。そんな感じだっ
たんだと思うよ」

プリンは、まだ手の甲についたままだったストロベリーソースを、
ぺろりと舐め取る。

「甘くて美味しい……。あいつにとって一番心に残っていた食べ物
が、たまたまクレープだったんだろうね。取り憑いていた生徒が好
きだったんじゃないかな。オイラたちのような存在は、自分が依存
している人間の笑顔や歓喜の音が大好きだからさ」

そう言いながら、俺のほうを見て微笑む。

「そして、その記憶だけを頼りに、どうにかエネルギーを絞り出し
て生き延びていた、ってところかな。記憶だけであれだけのパワー
を出せるあいつの精神力って、相当なものだと言えるのかもしれない。
教室から溢れそうなほどのパワーだったしね。それだけ、その
生徒のことが気に入っていたんだろうね。そう考えると、あいつは
オイラと同じで守護妖精だったのかもしれない。でも、なんらかの
事情で守護していた生徒と離れなければならなくなった。例えば、
その生徒が事故で死んでしまったとか……」

目を伏せる彼女の長いまつげが震えていた。

「実際どうなのかわからないけどね。もう消えてしまったから、あいつ自身に訊くこともできないしさ」

彼女はなにか思いついたように、はっとした表情を浮かべて言葉を続けた。

「あつ、このあいだ、植木鉢が落ちてきたことがあったよね？ あのとときの植木鉢があったのって、この教室のベランダじゃないかなあいつの強大なパワーに当てられて、固定してあった鉢が落ちてしまったのかもしれないよ」

そういえば、確かにここは四階の中庭に面した教室。

ベランダのちょうど真下は、植木鉢が落ちてきた場所ということになりそうだ。

プリンは、ぱつと明るい表情に切り替え、俺と、そして倒れている麻実子ちゃん、神林に次々と視線を移す。

「優歩、さつきはありがとね。オイラとしても初めての悪霊退治だったから、油断しちゃった。キミがいなかったら、オイラはそのままあいつに食べられていたかもね。もしそうなら、あいつはこの場所からも飛び出して、自由に恐怖のエネルギーを食べ続ける力を得てしまったかもしれない」

「俺は、べつに……」

照れて赤くなっているのが自分でもわかった。

最初は恐怖感と戸惑いでなにもできなかったけど、あの短刀を持っていたからなのだろうか、自分でも不思議なほど自然に体が動いていた気がする。

とはいえ、やっぱりあんなことはもうしたくない、ってのが本音ではあったけど。

「麻実子にカッコいいところを見せたかったただけだ、とか？」

からかい気味の意地悪な笑顔を浮かべながら、そんなことを言うてくる彼女はもう、いつもと同じプリンだった。

「う……ん……」

麻実子ちゃんが目を覚ましそうだ。

神林はまだ、いびきをかいて寝ていたけど。この状況でそんなにも完全に寝入ることができるなんて、ある意味優れた才能の持ち主と言えるのかもしれない。

プリンも、こいつすごいなあ、といった感じの目で見ているようだった。

「それじゃあ、オイラは隠れておくね。上手くごまかすんだよ！」

そう言っただけで彼女はパタパタと廊下の先まで走り去っていった。もちろん曲がったところで、いつものこそこそのぞき魔モードに入るのだからうけど。

彼女が去ったあとには、ただ甘ったるい香りだけが残っていた。

それにしても、クレープ生地とストロベリーソースなんて。

いったいどうやってごまかせばいいのだろうか……。

「うん……」

麻実子ちゃんが目をこすり、まだ寝ぼけた様子のまま身を起こした。

その目の前には、俺がいる。

俺は彼女のそばに寄り添うように、心配そうな顔でのぞき込んでいた。

「あ……優歩くん……」

俺の存在に気づいた麻実子ちゃんは、辺りを見回しながら、自分はどうして眠っていたんだろう、と疑問符を浮かべたような表情に変わる。

微妙に首をかしげている姿も可愛らしい。

「麻実子ちゃん、大丈夫？ 急に倒れたから心配して、ずっと見てたんだ。神林も一緒に倒れたしさ。俺は大丈夫だったから、毒性の気体が充満してるとかじゃないだろうけど、放ってはおけなくて心配してたんだ。でも、麻実子ちゃんたちを残したまま、ここを離れるわけにもいかないと思ったから、とにかく気がつくまで待ってたんだよ」

彼女が目を開けるまで、声には出さずに頭の中で何度も復唱して練習していた言葉を紡ぎ出す。

内心は、やっぱり怪しまれるかな、とビクビクしていたのだけど。そんな気持ちも表情に出ないように注意しながら、俺は彼女の思考を導く作戦を取った。

麻実子ちゃんを騙すことになるという罪悪感で少し心が痛んだけど、本当のことを言うわけにもいかないだろう。

彼女に余計な心配をかけたくないし。

まだ寝ぼけていたからというのもあるだろうけど、どうやら彼女は俺の言葉にまったく疑いを持たなかったようだ。

「あ……そうなんだ。うん、そうね、なんか思い出してきた……。ちよっと変な夢を見ていた気もするけど……」

若干納得のいかないような表情ではあったけど、さっきのあの尋常ならざる状況を考えれば、夢だったという結論に達するほうが、より自然な感覚だろう。

麻実子ちゃんは、おとなしい普通の女の子なのだから。

……神林は、普通ではないかもしれないけど。

「梨乃……」

ようやく、隣で横たわっている友人に気が回るほどには頭がはつきりしてきたようだ。

麻実子ちゃんは神林の肩を揺する。

「梨乃。大丈夫？」

そう言いながらも、大丈夫だろうな、という顔をしている麻実子ちゃん。

それを指摘してみたら、「だって、梨乃だし」なんて答えが返ってきた。

一緒にいる機会の多い彼女のことだから、よくわかっている。そんな表情だった。

もつとも、神林は今、いびきをかいて寝ているのだから、大丈夫だと思つのも当たり前前の判断かもしれないけど。

「むにやむにや、おっはよおくん」

麻実子ちゃんの声に答えるかのように、神林はまだ目が開いてるのかわからないのかわからないような顔でそう言いながら体を起こした。

「麻実子おっ、ご飯まだあ〜？」

思ったとおり、まだ寝ぼけているようだ。

麻実子ちゃんは「ふふっ」と微かな笑い声をこぼし、そんな神林を優しい瞳で見つめている。

やっぱりすごく仲がいいんだな。そう再認識する。

このふたりが同じ小学校出身だというのは以前から聞いていた。

確か、六年間ずっと同じクラスだったとか。

そして中学も三年間一緒。それどころか、幼稚園も年少の頃から一緒だったみたいだし、合計すれば今年で十二年目の同じクラスということになる。

運命的なほど強い絆を感じるんだ、なんて麻実子ちゃんは話していたけど、確かにそこまで一緒だとそう思つのも頷ける。

「おっ、名取まで！ あれ？ あたし、こんなところでなにをしてたんだっけ？」

ぼやけた頭を振り絞って考え込んでいる神林。

また同じように説明して思考操作を、と思つ間もなく、麻実子ちゃんが説明を加えてくれた。

神林はその説明を聞いても、あまり納得していないような雰囲気

だったけど。

「うーん、そうだったけ？　なんか腑に落ちないんだけど。どうも引っかかってるんだよね」

ギクリ。余計なことは考えないでほしいものだ。

「そういえば、すごく甘い匂いがしてるね。ここって開き教室だよ？　それなのにどうしてこんな匂いがするんだろ？」

麻実子ちゃんまで不思議に周囲を気にし始めた。

マズいな。壁にくっついていたりした生地なんかは、プリンがぱっと飛んで掃除してくれたけど、匂いまでは消せていない。

よく見れば、一部のこびりついたままになっているクレープ生地にも気づいてしまっただろう。

うーむ、どうしたものか……。

頭を悩ませていたら、勝手に状況は解決へと向かった。
神林によつて。

「あ〜、そっか！　あたしだ！　ほらっ！」

ポケットから、ぐちゃっとなったなにかを取り出す彼女。

それは、どこかの店で買ってきたと思われる、ラッピングされたままのクレープだった。

生地の中は生クリームとバナナだったけど、そのクレープには、たっぷりとストロベリーソースがかかっていた。

「これさあ、あまりにも美味しそうだったから買ってたんだよお〜！　んで、いけない、散歩しないと！　と思つてポケットに突っ込

んで、そのまますっかり忘れてたんだ！」

え〜っと……。

普通、クレープとかそういう柔らかい感じの食べ物ってポケットに仕舞い込むかな……？

呆然としている俺の横で、麻実子ちゃんも目を丸くしていた。

十二年一緒にいても、やっぱり神林の行動には驚くらしい。……そりゃそうか。

「……あはははは！ やっぱり梨乃ってすごい！」

麻実子ちゃんは楽しそうに笑い始める。

でも、そんな神林と十二年も友達を続けている君だって、かなりすごいと思うよ。

なんて言葉は、もちろん口には出さなかった。

それから俺たちは、職員室に行って甘野先生に美化委員日誌を渡すついでに、空き教室のドアが開いていることを告げた。

その後、下校するために校門の前までやって来ていた。

普段はこの時間、見回りを終えた麻実子ちゃんとふたりきりだったりするのだけど、今日は神林も一緒だった。

「ふう、今日の見回りは疲れたね」

俺は努めて明るい声で話し出す。

その声に振り向いたふたりも、疲れた感じではあつたけど笑顔も浮かべていた。

「そうだね。今日は梨乃までいたし。でも、なんだろう、ちょっとすっきりした感じもするの」

麻実子ちゃんは、不思議、とつぶやく。

もしかしたら、学校に悪霊が住み着いている空気をずっと感じ取っていたのかもしれない。

霊感が強いとか、そういう感じなのかも。

「ふたりとも倒れてたけど、もうなんともないの？ 大丈夫？」

気遣いをかける俺の声に、神林はビシッと親指を立てて答える。

「うん、大丈夫！ 帰り道は同じだし、麻実子はあたしが守るから安心して！ ……あつ、もしかして名取、俺が送るつもりだったのにとか思ってる？ あはは！ 邪魔してごめんねえ、でもまあ、今日のところはあたしに任せなさい！」

ひとりで盛り上がっている神林。

そりゃあ、送っていきたいのは山々だったけど。ここは彼女の言葉に従っておこう。

「それじゃあ任せたまよ、神林。 ……麻実子ちゃん、また明日ね」

「うん、バイバイ。また明日」

手を振って歩き出すふたりの姿を見送る俺の目には、夕陽に照らし出された彼女たちの背中が、赤く綺麗に輝いて映っていた。

「いろいろ不手際もあったけど、とりあえず初仕事は無事終了だね」
横から発せられた声は言うまでもなくプリンだった。

「無事だったか？ クレープ生地まみれにされて涙目になってたのは、どこのどいつだ？」

ちよつと意地悪を試してみる。日頃の恨みつてのもあるし。

「ぐう！ なんだよ優歩！ キミだってオイラがいろいろ手助けしてやんなきゃ、なにもできなかつたくせにさ！」

本気で反論してくるプリン。

相変わらずうるさい妖精ではあるけど、これはこれで可愛いかもしれない。

「ははは！ うん、ありがとな！ 俺たちって、結構いいコンビなんじゃないか？」

笑顔を浮かべてそう言っていると、プリンは真っ赤になりながら慌てた声を上げる。

「ほ……ほむ！ そりゃそうでしょ！ 守護妖精をやってるオイラはキミとずっと一緒だったんだから、当然だよ！」

「ま、どうせこれからも、まだ悪霊退治しなきゃならないんだろ？」

「うん。だからキミはしっかりオイラと協力していかなきゃならな

いんだよ。わかったかい？」

「わかったよ。これからも、よろしくな！」

「う……うん、こっちこそ、よろしくね！」

少々照れながらも、プリンはいつもどおり俺の腕に絡みつきな
ら笑顔を向けてくる。

こっついう状況にも、なんだかもうすっかり慣れてきたな。

ともかく、俺とプリンの悪霊退治生活の日々はこっつうして始まっ
たのだった。

「今日は放課後になったら、学校の外に行くよ！」

起き抜けのぼやけた頭で制服に着替えている俺に向かって、プリンがそう言った。

「悪霊だな？ でも見回りとかあるけど、そのあとでいいんだよね？」

「うん、もちろんだよ。麻実子との時間も大事でしょ？ 優歩にとっても、オイラにとってもね」

言葉のやり取りは、最小限ですむようになっていた。だいたいお互いの考えていることもわかる。

プリンのほうは、さすがにずっと俺の守護妖精をやっていただけのことはある、といったところだろうか。

俺のほうもプリンの考えがだいたいわかるというのは、彼女の性格のおかげかもしれない。言葉遣いはちょっと変だけど、結構素直な奴だし。

「とはいえ、ちょっと時間がかかるかもしれない。日が暮れると面倒だろうし、見回りは早めに終わらせるようにしてくれるかな？」

「うん、わかったよ」

彼女の言葉に、素直に従っておく。俺はプリンの手伝いをしなければならぬ身なのだから。

最近は結構慣れてきているけど、プリンがずっと俺のそばから離れられず姿を消すこともできないままでは、いつか問題になるだろ

う。

そうでなくても、いとこのプリンとイチヤイチャしながら登校している上に、クラスメイトにも想いを寄せる二股野郎なんて噂まで流れ始めていた。

麻実子ちゃんへの想いまでバレバレっぽいのは恥ずかしいところだけど、宵夢が言うには、見ていれば誰でもわかるらしい。

うーん、そんなにわかりやすいのだろうか。

でも、そういうのって麻実子ちゃん本人も耳にはしていると思うのだけど……。

迷惑に思われてたら嫌だけど、そんな素振りは見せないし、ちょっとは期待してもいいのかな……。

ともかく、俺は素早く着替えを終えた。

「う……。お兄ちゃん、もう起きてる。ちえ〜っ」

なんて言いながら自分の部屋に引っ込んだ優佳の声を聞きながら、俺は学校へ行く準備を進める。

このところ、プリンが情報ネットワークチェックとやらで朝っぱらから端末のキーボードをカチャカチャ鳴らすため、目覚めるのは早いのだ。

「今日ね、梨乃ったら、ポケットに苺大福入れて持ってきたんだよ。……潰れてたけど。苺大福なんて、そんなの売ってるんだね。知らなかった」

放課後、いつもどおり見回りをしながら麻実子ちゃんのお喋りの時間を楽しむ。

神林は相変わらずのようだ。

苺大福ってかなり前に話題になった食べ物だよな。アンコと苺が入ってるんだっけ、確か。

「よお、優歩」

不意に目の前に現れたのは、宵夢だった。

「あつ、桑島……。こんにちは」

宵夢にちよつと複雑そうな視線を向けて、それでも一応挨拶する麻実子ちゃん。

昔自分がふった相手だし、変に意識してしまうのかもしれない。

当の宵夢は、今となってはもう全然気にしてないようだったけど。

「笹樹、相変わらず可愛いね」

ニコツと爽やかな笑顔を見せる。

中一当時は本人に対しても「麻実子ちゃん」とな馴れ馴れしく呼んでいた宵夢だったけど、俺に気を遣ってなのか、それとも興味がなくなったからなのか、今では普通にクラスメイトを呼ぶのと同じように名字で呼んでいた。

「あ……ありがとう」

麻実子ちゃんは一応お礼を述べながらも、ちよつと頬を染めてうつむく。

やっぱり、話しづらいのは確かなようだ。
そんな彼女に優しい視線を向けたあと、宵夢は俺に話しかけてきた。

「美化委員の見回りか。甘野のクラスだし、お前たちも大変だよな。
……優歩は嫌ではないんだらうけど」

なにもかも、お見通しな宵夢。
ま、頑張れよ。視線でそう語っていた。

「このところ、ずっと見回ってるからかな、みんなちゃんと掃除してるみたいなんだ。だから、結構楽になってきてるよ」
「そうかそうか」

「それより宵夢、もうそろそろ予選会じゃなかったっけ？　こんなところをふらふら歩いてていいの？」
「ん、まあ、ちょっと気分転換つてやつだ。こうやって歩いてるとよく神林と会っただけど、あいつは今でもまだあんな感じなんだな。そりゃあ、そうそう変わったりはしないだらうけどさ」

一年生の頃、麻実子ちゃんに想いを寄せていたわけだから、宵夢も彼女の親友である神林のことは知っている。

あんな変わった感じの奴だから、知らない生徒のほうが珍しいとは思っけ。

そういえば一時期、神林は宵夢のことが好きなのは、なんて噂も流れていたっけ。

それを聞いて、あれはあれで可愛いんじゃないか？　なんて平然と言っただけの宵夢にちょっと驚いたものだ。

「さてと、それじゃあ練習に戻るかな。トイレだからって抜け出してきただけだし」

「おいおい、道場からはかなり遠いぞ、ここ」

「だから、気晴らしなんだって。仲むつまじいふたりの姿も見れたし、また練習に励むさ」

そんな軽口を残して去っていく宵夢を見送り、俺と麻実子ちゃんは見回りを再開した。

「じゃあ、また明日」

「うん」

いつものように校門の前で手を振って別れる俺と麻実子ちゃん。彼女の姿が見えなくなると、すぐにプリンが駆け寄ってきて俺に腕を絡めてきた。

「今日もお疲れ様。さて、それじゃあ行くよ！」

明るい笑顔を振りまいて宣言するプリン。

確かに……こんな状況では、いろいろ噂にもなるか。

そう思っ頭をぼりぼりと搔いている俺を、「どうした？」って目で首をかしげながら見つめるプリンの顔は、その吐息がかかるくらいの距離しか離れていなかった。

「今日はこの上の家に行くよ」

プリンが言っ指差したのは、町の中にある小高い丘だった。

この丘は、とあるお金持ちの私有地になっている。そして丘に作られた石段を上った先に豪邸があつて、そのお金持ちはそこに住んでいる、というのを聞いたことがあつた。

お金つてあるところにはあるんだな。

見上げるとめまいがしそうな石段を、俺たちは黙って上り始める。石段の両脇には桜の木が植えられているようだった。

五月も半ばのこの時期だと、もうすっかり花は散って、青々と茂る葉っぱしか見えかつたけど。

石段を上りきると、そこには大きな門が待ち構えていた。太い二本の柱のあいだに作られた大きな両開きの門。柱の横からは長い扉が左右に伸び、ずっと遠くまで続いていった。

右の柱には大きな表札がかかっている。藤を象った紋の下に続く「いつくしま 巖島」の文字、それがこの家の主のあまじ名前だった。

仲のよい夫妻が、この大きな屋敷に住んでいるらしい。

こんな大きな屋敷だと、お手伝いさんを雇ったりするイメージがあるけど、他人が入り込むのを嫌うのか、今はふたりだけで生活しているのだとか。

今は、と言ったのは、数年前までは夫妻のひとり娘も一緒に住んでいたからだ。

ただ、もともと病弱だった娘さんは数年前に亡くなってしまった。そのせいで夫妻は塞ぎ込んでしまい、それまで以上に周りとの接触を極端に避けて生活していると聞いたことがある。

「でつかいねえ……」

さすがのプリンですらも、口を大きく開けて呆然とするほどの大きな屋敷。

俺のような小市民が、プリンの言葉に対して反応もできない状態なのは、仕方のないことだろう。

と、突然門が開いた。

「今日何つという連絡はすでに入っているはずだ」

プリンは石段を上るあいだにそう言っていた。「はずだ」と言う

からには、連絡したのはプリンじゃないということになる。
おそらく女王様とやらが手を回したのだろう。

「ようこそ、いらっしやいました」

門の中にいたのは、深々と頭を下げる品のよさそうな夫妻だった。直々に出迎えてくれたところを見ると、噂に聞いていたとおり、お手伝いさんなどはいないのだろう。

「あ……」

頭を上げたふたりは、急に驚きの表情を浮かべ声を漏らす。その視線の先には、俺とプリンがいるだけだ。

「ほむ？ どうした？」

プリンが問いかけると、はっとしたように女性は微笑んだ。

「いえ……なんでもありません。私は巖島美千代いづくしまみちよと申します。こちらは夫の秀嗣ひでつぐ。本日はわざわざありがとうございます。とにかく、中にお入りください。母屋までは少々歩きますが」

そう言って歩き出す美千代夫人。

歳は四十代前半くらいだろうか、落ち着いた雰囲気いづくしまみちよを漂わせている。

旦那さんのほうも同じくらいの年齢だろう。さっきは夫人と同じように少し驚いていたみたいだったけど、今では笑顔に戻っていた。

夫妻は母屋へと向かう石畳をゆったりと歩き出し、俺たちについて来るように促す。俺とプリンは素直にそれに続く。

石畳から見える庭のあまりの広さに、声も出せなかった。

ゆっくりとした足取りだったとはいえ、母屋までは数分ほど歩くことになった。優に数百メートルはあったのではないだろうか。さすがに広すぎるといふ印象を受ける。

門から出たとしても、長い石段を上り下りする必要があるわけだから、かなり不便な場所なのは確かだった。

でもこの夫妻には、娘さんとの思い出が溢れるこの家を出るなんてことは考えられないのだろう。

「どうぞ」

豪華な部屋に通された俺とプリンに、美千代夫人は紅茶と苺のケーキを出してくれた。

カップもお皿も、見るからに豪華な装飾が施されている。

屋敷自体の外観は完全に純和風な感じだったけど、中は意外と洋風な造りも取り入れられていた。この部屋も、お客様用だからというのもあってか、完全に洋風の部屋になっていて、豪華な装飾の施されたソファとテーブルが置かれていた。

「すみません。いただきます」

かしこまった感じでお礼を述べる俺とは対照的に、プリンはいつもどおりの軽い口調のままだった。

「お、ありがとね、おばさん。うわ、すっごく美味しそうだよ」

なんて舌なめずりしている。こいつには行儀作法を教え込む必要がありそうだ。

「ごめんなさい、失礼な奴で……。
そう言う俺に、いえいえ、元気があっていいわよ、なんて微笑みを浮かべてくれる美千代夫人。
その横では旦那さんも同じように優しい笑顔を見せていた。

お金持ちということ、気難しい人だったりしたら嫌だなあ、なんて思いながらここまで来たのだけど、すぐくほんわかつた雰囲気を感じのいい夫妻のようだった。

でもなんとなく、笑顔を浮かべながらも、瞳の奥に寂しさのようなものを感じられる気がした。

「それじゃあ、もごっ、詳しい話を、もごっ、聞かせてくれるかな？ ごくっ」

口の周りにクリームをいっぱいくっつけながら、プリンが言う。
こら、いくらなんでもそれは行儀悪すぎだろ。せめて手づかみで食べるのだけはやめろよ！

美千代夫人はそんな様子にも動じることなく現状を語り始めた。

夫妻には病気で亡くなった娘さんがいた。それは噂で聞いたとお
りだった。

十歳という若さでこの世を去ったその娘さんは、深鈴みすずという名前
に合った、凜とした響きの深い綺麗な声をしていたそうだ。

夫妻にとつてはたったひとりの娘の死。もう世界が終わってしまったかのように悲しみに暮れた日々を過ごしていた。

そんなことをあの子が望むはずはない。わかつてはいても、どうしても気持ちは切り替わらなかった。

娘さんを忘れることなんて、到底できないのだから。

娘さんの部屋は、生前のままの状態にしてあるらしい。

いつあの子が帰ってきてもいいように、そうつぶやく夫人の目は悲しげな光に満ちていた。

ところが、いつしか娘さんの部屋から物音が聞こえるようになってたという。

もしかして、深鈴が帰ってきたの？

そう思って部屋の中に入ってみても、もちろん誰もいるはずはない。でも、夜ごとに音は聞こえてくる。

気のせいなのかもしれない。

清潔にしているはずだけど、ねずみなんかがいるだけなのかもしれない。

そう思っではいるものの、毎晩聞こえてくる音に、どうしても娘さんの面影を感じてしまう。

娘さんへの思いが強すぎることから生じる幻聴、頼んで来てもらった精神科の先生はそう言っていた。

この家は手放して、どこか別の場所に移ったほうがいいと勧められた。

やっぱり、私たちがおかしいだけなのよね。そう思いながらも、この家を出ていく気にはなれない。

実際に音が聞こえることで、娘さんがこの家に戻ってきているように見え、複雑な気持ちを抱きながら、夫妻は日々を過ごしていた。

そんなある日、物音だけでなく、とうとう声まで聞こえてくるようになっていった。

はつきりと聞こえるわけではないため、本当に娘さんの声なのかまではわからなかったものの、さすがにこれはおかしい。

とはいえ、このままではなにもわからない。ちゃんとした調査を依頼すべきなのではないか。

「そう思っていたところだったんです。絶妙なタイミングで調査に来てくださるとご連絡をいただいで、とてもありがたく思っているんですよ。……かなりお若い方がいらして、びっくりしましたけれど」

そう言いながらプリンに視線を向けて苦笑している美千代夫人。
若いからだけでなく、別な意味でも不安だろう、プリンのこんな状態を見ていたら。

そんな俺の心配をよそに、当のプリンは、ケーキを食べ終えたお皿を名残惜しそうにペロペロと舐めていた。

だから、行儀悪すぎだっば。

俺とプリンは、とりあえず現場である娘さんの部屋を見せてもらうことにした。

場所は二階の奥。ドアには「深鈴」とネームプレートがつけてあるという。

夫妻も一緒に来ると言ったのだけど、危険があるかもしれないからと諭して、俺とプリンだけが目的地へと向かうことにした。

一歩一歩ゆっくりと進む。ゆっくりなのは、やはり恐怖心もあるからだ。

……プリンはケーキのおかわりまでして全部で四つも食べていたから、単におなか膨れているだけなのかもしれないけど。少しは遠慮しろよな……。

部屋が近づくにつれて物音が激しくなる、なんていう状況を覚悟していたのだけど、廊下は拍子抜けするほど静かだった。

本当にそんな物音や声があるのだろうか、と疑いの念すら湧き上がってしまう。

とはいえ、今はまだ夕方。物音や声するのは夜になってからという話だから、本番はまだ先ということだろう。

「ここだね」

ネームプレートがあるのだから、言うまでもなかったけど。声に出すことで少しでも緊張感をほぐそうとしたのだろう。

優歩が先に入ってよ、とプリンが背中を押してくる。

こいつ、ほんとに俺を守護する気あるのか？ などと思いつつも、俺は仕方なくドアノブに手をかけた。

ガチャッ。

ドアは、すんなりと開いた。

部屋に足を踏み入れる俺。プリンは怯えた様子でそれに続いて入ってくる。

部屋は娘さんが生前生活していたままにしてあると言っていた。

小さい子とはいえ、さすがに良家の娘さんといったところか、散らかっている部分なんてまったくなく、可愛らしいぬいぐるみや小物なんかも几帳面に並べられていた。

薄いピンクのカーテンや絨毯などで覆われた、可愛い雰囲気の部屋。女の子の部屋だなあ、って感じだった。

「ほむ、べつになにも異変はないね」

部屋の様子を見て、そんな感想を漏らすプリン。

枕の下やらタンスの中やら、細かいところまで隅々としろじろ見たり調べたりし始めた。

しっかりとたたんであった服まで引っ張り出し、その辺に放り投げている。

「うーん。とりあえず、夜まで待つしかないね」

ひとしきり部屋を引っ掻き回したあとで、プリンがベッドの上でドサッと寝っ転がった。

あゝあ、布団も綺麗にセットしてあったというのに……。

部屋の中が、まるで優佳の部屋のように散らかってしまった。なんて優佳本人に言ったら、すごい声で抗議されるだろうな。

美千代さん、ごめんなさい、あとでちゃんと直しておきます。俺は心の中で謝罪した。

プリンが危険だからと言って夫妻を部屋に来させなかったのは、本当は思う存分暴れるためだったのだろうか？

と、一瞬ぞくつと背筋に寒気が走った。

振り向くと、そこには怒った顔の少女が立っていた。

怒った顔とはいっても、鬼の形相とかそっぴい感じではなく、可愛いものだったのだけ。

この子が巖島夫妻の娘さんの幽霊……ってことになるのかな？

「ねえ、おじちゃん、おばちゃん。なにしてるの？ お部屋汚れちゃってるよ？ お母さんに怒られるよ？ ちゃんとお掃除しなさい！」

ああ、こんな小さな子から見たら、中学生の俺でもおじさんになるんだな。

俺はそんなふうを考えながら、落ち着いた表情でその女の子を見ていた。

……のだけ。

落ち着いてないのが約一匹……。

「お……おばちゃんんっ！？ それは酷すぎだよ！ この美人で聡明なオイラに対して、おばちゃんだなんて！ 綺麗なお姉さんと呼びなさい！！」

いや、それはどうだろう。

それより、幽霊ちゃん、怯えきっているじゃないか。

幽霊を怯えさせる妖精って……。でもプリンは、妖精も幽霊も似

たよつな存在だと言っていたっけ。

とりあえず、プリンを黙らせないと。俺はプリンを口を手で塞ぐ。うきーうきー！と、うなり声を上げて、手に噛みつかれそうな勢いだっただけ。

「あとで苺ミルク買ってやるから」

ぼそつと放ったひと言で、プリンはピタッと静まった。

……お姉さんどころか、お子様じゃないか。

「君が、深鈴ちゃん？」

怖がらせないように気を遣いながら、女の子に話しかける。

「違うよ」

あれ？

予想外の答えが返ってきた。

「それじゃ、君はいつたい誰なんだ？」

「あたしは、エリザベス」

ええ？ 外国人なの！？

少女の言葉に驚きを隠せない俺。

だってその子は、どう考えても純和風な服装をしていたからだ。

藍染めの綺麗な着物に身を包み、瞳も髪も綺麗な黒。顔立ちも日本人としか思えないのだけど……。

考えてみると、この部屋は可愛いフリルのついたカーテンやら天蓋つきの豪華なベッドやらがあつて基本的に洋風だし、クローゼットの中也洋服ばかりだったのだから、この子が夫妻の娘さんではないというのは確かなのかもれないけど。

まさか、あの夫妻が娘さんに洋風な別名までつけていた、なんてことはないよね、さすがに。

「えーっと、エリザベス？ 君はどうして、ここに居るのかな？」

「あたしは……」

そうつぶやくと、エリザベスは目を潤ませ始める。

「深鈴ちゃん……。深鈴ちゃん……ん！」

いきなり叫び出したかと思うと、彼女を中心に風が巻き起こった。うわ！ ここ部屋の中なの！？

「わわわ、この子、すごいパワーだよ！」

プリンが焦りの表情を浮かべている。

「み〜ず〜ず〜ちゃ〜ん〜ん！！！」

「おおおおおおおおお！」

風は、つむじ風となり、突風となり、台風となった。

そんな感じを受けるほど、その強さを一気に増した風は、すでに部屋の中で大暴れしていた。

部屋中のありとあらゆる物が、風に巻き上げられ宙を舞う。散乱していたのが、洋服やぬいぐるみだけだったのは不幸中の幸いか。なんて悠長に考えている場合じゃない。

エリザベスは、その風に乗るかのようにその身を浮かせ、そして窓を突き破って外へ。

いや、正確に表現すれば窓ガラスをすり抜けて外へと飛び出していった。

窓を開けて外を見ると、風は石段に沿って丘を下っていた。

「とりあえず、追っよう！」

横から勢いよく飛び出すプリンにつられて、俺も飛び出していた。

って、ここ二階だった……！

「……後先考えて行動しなよ、非常識な奴だね」

お前に非常識だなんて言われたくない……。

そんな文句を言えるはずもなかった。

俺は綺麗な羽根を羽ばたかせるプリンに抱えられて、庭へと降り立った。

庭に降りた俺たちは、門を開け、石段を急ぎ足で下っていた。
あれ、そういえば。

「プリン、お前さ」

「ほむ？」

走りながら声をかけた俺に答えるプリン。

彼女は羽根で空を飛んでいるかと思いきや、今は普通に自らの足で走っていた。

「羽根だけは消せるとか言ってたっけ？ それなのにさつきは羽根がしっかり見えてたけど。それに飛べるのになんで走ってるんだ？」

「あのね優歩。飛ぶつてのは結構消耗が激しいんだよ。今のオイラじゃ、そうそう使ってもいられないのさ。羽ばたいても気を抜くと羽根が見えてしまうしね。もとの姿に戻ることができればもっと使えるんだけど……。だいたい今日は、ラブラブパワーの補充も少なかったからねえ」

なんて言いながら、プリンはニヤつく。もっと頑張つてよね、と目で語っていた。

「あつ、いたよ」

エリザベスが石段をちょこちょここと下りている姿が見えてきた。彼女も幽霊のはずなのに、見るからに危なっかしい足取りで走っているのは、プリンと同じような理由からなのだろう。

「これなら、すぐに追いつけるな」

そう思った矢先、追いかけてくる俺たちに気づいたのか、エリザベスは石段の横の小道へと入ってしまった。

上ってきたときには気づかなかった細い道が、石段の横に生い茂る木々のあいだから続いていた。

「こんなところに、道があったのか」

「行くよ！」

プリンが迷いもなくその小道へと身を躍らせる。

桜の木は石段に添って植えられてあるだけのようで、その先にはうっそうとした森が広がっていた。そんな中を俺たちはひたすらに走る。

小柄なプリンでも、道の脇に生える木々に腕や肩がぶつかるくらい細い道。俺が通るのはかなり厳しかった。

それでも、ここは行くしかないだろう。

腕に枝で擦り傷ができるのも構わず俺たちは小道に分け入り、奥のほうでガサガサ音を立てながら逃げるエリザベスを追う。

プリンの長い髪が枝に絡まりそうになりながらも、どうにか身を進めていくと、やがて突然、視界が開けた。

「……あれ？ 優歩くん!？」

「うあっ!？」

目の前に、麻実子ちゃんの顔があった。

「なんで麻実子がこんなところにいるんだい？」

「あれ？ プリンちゃんまで……。それは、こっちが訊きたいんだけど。どうしてそんな森の中から出てきたの……？」

驚いた表情のまま尋ねる麻実子ちゃん。

確かに、最初こそ細い道のようになっていたけど、そのうち道はどンドン細くなり、道があるのかどうかすらわからない茂みの中を、音を頼りに走ってきたわけだし。俺たちのほうが不思議がられてもおかしくない状況だよな。

でも今は、ゆっくり説明している場合でもないのだけど……。

「麻実子ちゃん、こっちに女の子が走ってこなかった？」

「え？ ん〜と、私は見てないけど……」

さっきの子、俺たちからそれほど遠く離れたとは思えないのに、麻実子ちゃんは見ていないのか。

とすると、こっちへは来なかったのかな。どこへ行ったのだろう。俺は辺りを見回す。

「JJJJは……？」

目の前に広がった景観を一瞬把握できずに、俺は思わずつぶやいた。

その声に麻実子ちゃんが答えてくれる。

「天道あまのこの社やしろって言うってね、飼い犬とか飼い猫とか、ペットを供養するための場所なの」

森の中に広がった空間にたたずむ質素な感じの社の周りには、盛り土の上に卒塔婆を立てただけの簡素な墓が無数に広がっていた。

「うちで昔飼っていた犬も、今はここに眠ってるんだ」

そういえば、彼女は小学生のときに犬を飼っていて、死んでしまったときには声が枯れるくらい泣いたという話を聞いたことがあったつけ。麻実子ちゃんは、その犬の墓参りに来ていたのだ。

社の向こうには、鐘の吊るされた建物があり、その先には石段もあるようだ。麻実子ちゃんはそこから上ってきたのだろう。

「夕方になるとね、宮司さんが鐘を鳴らすの。学校にいても微かに聞こえると思うけど。その時間に合わせて、毎月ここに来てるんだ。鐘は毎日鳴らされてるんだけどね」

確かに鐘の音は聞いたことがあった。こんな社があるなんて全然知らなかったけど。

「あまり有名じゃないもんね、ここ。社も見てのとおり小さいですよ？ でも、この町のペット好きな人ならみんな知ってると思うよ」

そうなのか……。俺の家ではペットは飼っていないからなあ。

母さんは動物の毛でアレルギー反応を起こすらしく、優佳が猫を飼いたいと駄々をこねたときも断固反対していたつけ。

……俺は今じゃ母さんに隠れて妖精を飼っている身だけだ。

と、その妖精であるプリンだけど、さっきから俺のすぐ後ろで黙ったままだった。

彼女にしては珍しいな、と思って表情をつかがってみると、少し緊張しているような雰囲気を漂わせていた。

「ほら、優歩。……来るよ」

プリンの微かな声が、耳もとに響いた。

グガシャッ！！

大きな音を立てて、弾き飛ばされる。

でも 宙を舞ったのは、ぶつかっていったエリザベスのほうだった。

もちろん、ぶつかられた麻実子ちゃんも衝撃は受けたようで、俺のほうに倒れかかってはきたのだけど。

その体を受け止める俺の目に映ったのは、地面に倒れた犬と、麻実子ちゃんの服の下からこぼれ落ちた、砕けた緑色の石がついたペンダントだった。

「身に着けてくれてたんだね、麻実子」

砕けたペンダントを見つめながら言うプリン。

それは、このあいだ教室でプリンが麻実子ちゃんにプレゼントした、妖精石と言っていたペンダントだった。

「うん……だって、やっぱり嬉しかったから」

そう言って微笑む麻実子ちゃん。どうやら怪我もなく、無事のようだ。

一方のエリザベスは、倒れた身体をどうにか起こそうとするものの、それすらもできないほど弱っているみたいだった。

「妖精石には、受けた力をそのまま相手に跳ね返す力があるんだよ。衝撃で壊れちゃったけどね」

そうプリンが解説を入れる。それだけ渾身の力を込めた一撃だっ

たということか。

もしあのペンダントがなかったら、大変な事態になっていたろう。

「……深鈴ちゃんは……どこ？」

エリザベスがかすれた声を上げる。その声は先ほどの少女の声だった。

弱々しくも、じつとこちらを見据える瞳は、うなりを上げていたときの瞳とは明らかに違う、優しげな、それでいて悲しみも帯びたような輝きを携えていた。

「君が、エリザベス？」

「うん。あたしは深鈴ちゃんと一緒にずっと楽しく過ごしてきたの。いつでも一緒だった。がっこう、って場所に出かけたときも、あたしはずっと帰りを待っていた。深鈴ちゃんは帰ってきてあたしの姿を見つけると、嬉しそうに笑うの。いつも、そうだった……。でもあの日、深鈴ちゃんはお屋敷から石段を下りていったきり、帰ってこなかった……。あたしは深鈴ちゃんが戻ってくるまで、ずっと待っていないといけないの。帰ってきたときにあたしがいなかったら、深鈴ちゃんが寂しがるから」

思いのたけを必死の瞳でぶつけてくるエリザベス。

「そっか。深鈴の飼い犬だったエリザベスは、ここでずっと待ち続けていたんだね。自分が死んでしまったあとも、ずっと……」

プリンをつぶやきに、俺も頷く。

でも、酷かもしれないけど、ここは真実を伝えるべきだろう。

「でもね、エリザベス。深鈴ちゃんは、もういないんだ。残念だけど、病気で亡くなってしまったんだよ。もうずっと前にね」

エリザベスは首をかしげながら、まっすぐな瞳を俺に向ける。犬ではあるけど、ちゃんと話の内容は理解している、それはよくわかった。

「石段を下りた先にある病院で亡くなったんだ。だから、もうこの丘には戻ってこないんだよ」

「でも……深鈴ちゃんが寂しがる……」

理解はしていて悲しげな表情を浮かべながらも、信じたくはないのだろう、エリザベスは小さくつぶやく。その気持ちは痛いほどわかるけど、今のままの状態で放っておくわけにもいかなかった。

「深鈴ちゃんは、先にお空で待ってるんだ。君が行ってあげないと、お空の上の深鈴ちゃん、ずっと寂しいままなんじゃないかな？」

俺の言葉に、エリザベスはハツとした表情を浮かべる。

その姿はいつの間にか、さっきの女の子の姿に戻っていた。

「深鈴ちゃん……。あたし、深鈴ちゃんのところに行く！」

そうはつきりと決意を口にしたエリザベスは、まばゆい光に包まれ、そして、夕焼けで赤く染まった空へと昇っていく。

「お空の上で、また深鈴ちゃんと遊ぶんだ！ 今度は本当のお友達として、一緒に遊べるの！」

満面の笑顔をたたえたエリザベスの姿は、赤い色を帯び始めた大

空へと吸い込まれるかのように消えていった。
あとには、ただ夕方の静けさだけが残されていた。

麻実子ちゃんは気を失っていた。エリザベスの体当たりで受けた衝撃は、やはり大きかったのだろう。

でも息も乱れていないし、見たところ怪我もしていないようだから、おそらく大きな問題はないはずだ。

「とりあえず、屋敷に戻ろう」

そう言って歩き出そうとするプリン。でも、麻実子ちゃんをこのままにはしておけない。

「そうだね……」

プリンはずっと麻実子ちゃんの額に手を当てる。

「気を失ってるから、そのままでも平気かもしれないけど、一応昨日みたいに眠らせておいたよ。気づかれると、いろいろ面倒だからね。また夢だったと思ってもらおう。起きたら、ごまかすのは優歩の役目だよ。任せたらからね」

任せられても、どうやってごまかせばいいのやら……。

「ま、とりあえず行くよ。麻実子をここに寝かせておくってわけにもいかないだろうし。優歩がおぶっていきなよ？ そうすれば、ド

キドキパワーも補充できるからね」

ニヤニヤしながら、プリンはそんなことを言い出す。

で……でも、もしいきなり目を覚ましたりしたら、どう言えばいいんだよ！

なんて反論する間もなく、プリンはすでに歩き始めていた。問答無用ってやつだ。

俺は麻実子ちゃんをおぶったまま、森のあいだの小道を抜け、石段を上り、巖島夫妻の屋敷へと向かった。

「プリンはさ、どうしてあのペンダントを麻実子ちゃんにプレゼントしたんだ？ そのおかげで助かったけど、もしかしたらプリンは、今日のことを予測してたのか？」

俺の問いに一瞬考え込むプリンだったけど、すぐに答えを返してきた。

「いや、さすがに予測なんてしてないよ。でも、なんでだろうね。なんとなくプレゼントしたかったんだ、あのときは」

そう言ったプリン自身も、どうやら首をかしげているような雰囲気だった。

麻実子ちゃんは決して重くなんてなかったけど、さすがにおぶったまま石段を上るのはちょっときつい。

ふう疲れた、そうつぶやいて立ち止まると、

「重くて疲れたって？ 麻実子に言いつけちゃうよ？」

プリンが意地悪な笑みを浮かべて、からかいの言葉を向けてきた。

「ま、頑張りなよ。男は女を支えていくもんでしょ？」

支えるの意味がちよっと違う気がする。そうは思ったものの、反論する気力も体力も、俺には残っていなかった。

俺は麻実子ちゃんの吐息を耳もとで感じ、彼女の体重と温もりを背中全体に感じながら、一步一步、石段を上っていった。

「うーん、なんだか背中が重いなあ」

プリンがつぶやく。

羽根を痛めたりでもしたのだろうか？

背中だと自分では見えないだろうし、あとで確認してやるか。

石段を上り終わると、門のところで巖島夫妻が心配そうな顔で待っていた。

「いきなりいなくなったから、心配していたのよ」

そうだった。俺たちは部屋を調べに行っただけ、そのままだったのだ。

いくら調査のためとはいえ、夫妻にはついて来ないように言って深鈴ちゃんの部屋まで行き、そして散らかしたままの状態で突然いなくなったのだから、怪しまれても仕方がない状態だっただろう。

それなのに、夫妻は俺たちの身を案じて待っていてくれたようだ。

「すみません」

俺は頭を下げる。

背中 of 麻実子ちゃんに不思議そうな目を向けたあと、俺に続いて上ってきたプリンに視線を移すと、夫妻の顔が一瞬で変わり、驚いたような嬉しいような表情になった。

「ありがとう」

ふと、プリンの中からいつもの彼女とは違った音色の音が発せられた。

そしてすぐに彼女の体は輝き出し、羽根の辺りを伝ってなにかが空へと昇っていった。

「深鈴……」

娘さんの名前を優しげな声で呼ぶ夫妻の目には、温かな雫が浮かんでいた。

巖島夫妻の屋敷の応接間に、俺とプリンは再び招かれた。ソファには、まだ目を覚ましていないため、眠ったままの麻実子ちゃんも身を横たえている。

目の前のテーブルには、やはり紅茶とケーキが準備されている。当然のようにプリンが真っ先に手を伸ばし、すでに口の周りにはクリームをべっとりつけていた。

「最初に見たときにも驚いたのだけれど、プリンちゃんは、深鈴にそっくりなのよ」

美千代夫人は優しげな瞳でプリンを見つめながら、そう言葉をこぼした。

まあ、ここまで食いしん坊なところは、似ていないだろうけど。

「いえいえ、それもなかなか似ているのよ。……もちろん、ここまですごくはなかったけれど」

ちよつと苦笑を浮かべている美千代夫人に、ん？ なんだい？ と不思議そうな目を向けるプリン。相変わらず遠慮なんてせずに、ケーキでおなかを満たしていた。

「深鈴には、とても可愛がっていたペットの犬がいたのよ」

俺があので見たことを報告すると、夫人は昔を懐かしむように語り出した。

ペットの犬とは、もちろんエリザベスのことだ。

「とっても可愛がっていて、いつも一緒に、本当に仲よしだったの。深鈴が出かけたときには、あの石段の途中まで下りて、ずっと待っていたわ。そんなエリザベスは、深鈴が病院で亡くなったあとでもずっと待ち続けていた。痩せ細ってしまったも、いつまでも、いつまでも……。私たちがいくら屋敷に連れ戻そうとしても、頑としてその場を動かそうとはしなかったのよ」

さすがに心配はしていた。でも、エリザベスの気持ちもわかる。だから無理強いはしなくなかったのだという。

「やがてエリザベスは衰弱して倒れてしまった。私たちはすぐに獣医を呼んで診てもらったのだけれど、そのときにはもう手遅れだったの。強引にでも連れ戻すべきだったと、すごく後悔したわ」

そしてその後、天道の社で埋葬してもらうことにした。

それでもエリザベスの魂は、深鈴ちゃんを待ち続けていたのだ。

俺たちの前に人間の姿で現れたのは、ずっとエリザベスが願っていたからではないか、そう夫人は言った。

ペットと飼い主の枠を越えて友達同士として遊びたい、そう思っていたのだろう。

それは深鈴ちゃんのほうとしても、同じ思いだったに違いない。

さつきプリンが羽根を重く感じていたのは、深鈴ちゃんの魂が一度、天国から戻ってきていたせいだったらしい。

ほんの一瞬だけとはいえ、プリンの羽根を媒介にして、深鈴ちゃんはこの世に現れたのだという。

「エリザベスを解放してくれてありがとう、というオイラたちへのメッセージと、なによりも、私とエリザベスは大丈夫だから元気になってね、今までありがとう、という両親へのメッセージを伝えるためにね」

悲しげな目をしながら、プリンはそう言っていた。

さつきプリンの口からこぼれ落ちた言葉は、深鈴ちゃんからのメッセージだったのだ。

「深鈴はもう戻ってこないけど、元気そうだったじゃないか。だから、おばさんたちも元気出しなよ、ね？」

プリンは、彼女なりに最大限の励ましの言葉をかけているようだった。その想いは通じたのだろう、美千代夫人も秀嗣さんも、まだ寂しさは微かに混じっていたものの、確かな笑顔を浮かべていた。

「プリンちゃん……もしよかったら、また遊びに来てちょうだいね」「うん、またケーキを食べに来るよ！」

おい、その辺は遠慮しろよ、とも思っただけ。

明るく笑みをこぼす夫妻を見た俺は、こんなプリンでも、このふ

たりに元気を与える力になれるだろうと、そう確信していた。

まだ目を覚ましていなかった麻実子ちゃんを背負い、横に並ぶように歩いているプリンとともに俺は石段を下りていた。

いつもと比べると、とても悲しそうな顔をしているプリンが、不謹慎かもしれないけど妙に綺麗に見えた。

「おばさんたち、元気になれるかな……」

彼女は敵島夫妻のことを、すごく気にしているみたいだった。

「元気になったとしても、深鈴が戻ってくるわけじゃないけど……。それでも、元気に笑って生きていってほしい、そう思った」

そんなことを口にするプリン。俺は、うん、そうだね、と答えた。

俺は麻実子ちゃんを背負っているから、プリンもいつものようにくっついてきてはいなかったけど、手が空いていたら彼女の頭を優しく撫でているところだ。

こんな口調だけど、結構寂しがり屋だったりするみたいだから。

「プリン、あとで苺ミルクだ！」

俺が気遣っているのを感じたのだろう、プリンも笑顔になって答えてくれた。

「あはは、ありがとね！ でも今日は甘いものを食べすぎたから、ダイエツトもしないといけないかな……。よし頑張ろう！」

おなかをつまんで拳を握り締めているプリンを、俺も彼女と同様の素直な微笑みをたたえながら見つめていた。

「でもさ、今回のことって、悪霊退治だったのか？」

「え？ ……うーん、考えてみたら違うような気もするね。でも、悪いことではなかったはずだし、これでよかったんだよ」

最後に、疑問に思っていたことをぶつけてみたけど、プリンは自分なりに納得しているようだった。

うん、それならいいのかな。

石段を下りきっても、麻実子ちゃんはまだ起きない。

夕陽も完全に沈み、辺りはもう夜の冷たい闇に包み込まれていた。

「このまま家までおぶって行ってあげればいいんじゃないかい？」

なんてプリンと言う。もちろん嫌ではないけど、さすがにちょっと疲れた。

とりあえず、落ちそうになる彼女の体の位置を戻すように、よっからせと背負い直す。

と、いきなり背後から声がかかった。

「おお〜？ 名取じゃん！ こんなところでこんな時間に、麻実子になにしちゃってるのさっ？ うわっ、しかも麻実子、寝てるし！」

神林だった。

そっちこそ、どうしてこんな時間にこんな場所なんかにいるんだか。

「そりゃもちろん、散歩だよ散歩っ！」

「神林の趣味は校舎内の散歩じゃなかったっけ？」

「たまにはいいっしょ！ 気分転換だよ！ ……で、そっちは？ プリンちゃんもいるんだから、変なことをしようとしてたわけじゃないだらうけど」

変なことってなんだよ。

でも、とりあえずこっちのほうが怪しい状況なのは確かだ。

さすがにここでまたプリンに神林を眠らせてもらって処理する、
というのは明らかに不自然だろうし、適当な理由をつけてごまかす
しかないか。

「えっと……丘の上の厳島夫妻とは母親が知り合いでね、たまに遊
びに行ってたんだ。夫妻には深鈴ちゃんっていう娘さんがいたんだ
けど、彼女の遊び相手になるためにね。娘さんはもう、亡くなって
しまったんだけど……。今日は深鈴ちゃんが飼ってたペットの墓参
りにも行ってきたんだよ。そうしたら、天道あまじえの社に麻実子ちゃんが
倒れてたから、さすがに日も暮れるし放つてはおけないだろ？ そ
れで、おぶってここまで来たところだったんだ」

とっさに考えたにしては、結構まともな言い訳になったかな？
自分ではそう思ったのだけど。

「天道の社かあ。麻実子も昔飼ってた犬が死んでそこにお墓あるん
だよな。でもさ」

怪訝そうな顔になる神林。

「社からだ、この石段を下りてくるのは変じゃない？」

うっ……そうだった。

社からこの石段まで来るには、あるかどうか見分けがつかないく
らいの小道を通らないといけないんだった。

「社からの抜け道があつてね。厳島のおじさんおばさんも一緒だっ
たから、一旦こっちの石段まで戻ってきたんだよ」

プリンが言葉をつけ加える。

「ふうん、そうなんだ。……まあ、いいけどさ！」

それでちゃんとごまかせたのか、もともと神林はたいして気にしてなんていなかったのか。

……おそらく後者だろうな。心配して損したかも。

「う……ん……」

「おっ。おはよう、麻実子！」

さすがに周囲がうるさかったのか、麻実子ちゃんはここで目を覚ました。

辺りは暗くなっていて、俺におんぶされていて、いきなり神林ままでいて、彼女はさすがに状況が理解できずに頭にハテナマークを浮かべたような表情をしていたけど。

「あれ〜？ 私どうしたんだろう？ 社にいたはずなのに。それから犬がいて、襲いかかってきて、それで……」

どうやら、結構しつかりと覚えているみたいだった。

たとえプリンでも、記憶を消すことまではできないのだから、当たり前といえば当たり前か。

「犬が襲いかかってきた〜？ 麻実子、夢でも見てたんじゃないの〜？」

「う〜ん、そうなのかなあ……」

神林の無意識と思われるフォローが、今は絶妙にありがたかった。

「名取は、犬とか見たの？」

「え？ いや、べつになにも見てないけど」

麻実子ちゃん、ごめん。

ここは夢だと思ってもらうために、嘘をつかせてもらおうよ。

「麻実子ってば、結構妄想の激しい子だからねえ。起きてても幻覚
見てるような感じだし！」

「ちょっと、それじゃあ私、なんだか危ない人っぽいよお」

起き抜けでぼーっとしてはいたけど、麻実子ちゃんはさすがに反
論する。

でも、どうやら神林のおかげでごまかせそうだ。

「ところでさ、名取」

「ん？」

突然真顔になって語りかけてきた神林に、ちょっと緊張した声に
なる。

「いつまで麻実子をおぶってるのさ？」

「あっ
っ！」

俺と麻実子ちゃんの声が重なった。麻実子ちゃんは慌てて俺の背
中から飛び降りる。

あはははは！ と大声で笑っている神林を、プリンが黙ったまま
じっと見つめていた。

「ここからは交代つてことで、あたしが麻実子を連れてくよ！」

そう言う神林に麻実子ちゃんを任せて、俺は家へと戻った。

学校からでもそうだけど、この丘からでもやっぱり、麻実子ちゃんの家とは反対方面になるからだ。

「うん」

帰り道で、プリンがうなっていた。

「どうしたんだ？」

「神林ってさ、変だよな」

激しく同意。ほんと、変わった奴だよな。

「そういうことじゃなくてね……。ん、まあ、いいか」

それっきり、プリンは黙り込んでしまった。

もう五月も半ばになるといつの間に、やけに肌寒い風が俺たちふたりのあいだを吹き抜けていた。

俺たちはその後も、放課後や休みの日を中心に悪霊退治を続けた。悪霊というものは、結構世の中に蔓延しているようだ。その影響の度合いは様々だから、人間が引き起こしていることに比べたら他愛のない悪さ程度しかしていない悪霊もいる。

恐怖のドキドキを与えればエネルギーが得られるのだから、例えばいきなり背後から、「わっ！」と声をかけて脅かすだけ、それ以上のことはしない、なんていう悪霊もいた。

そういった悪霊でも、俺たちは退治した。その辺りの裁定は、やはり女王様が下しているらしい。

「オイラは言われたターゲットを女王様のもとに送り届ける。それだけだよ」

プリンはそう言っていた。そう言いながらも、完全には納得していないように思えたのは、はたして気のせいだろうか。

悪霊退治に向かった先では、なにかと麻実子ちゃんが巻き込まれることが多かった。

なんでいつもオイラたちの行く先にいるんだろう、とプリンはかなり不審に思っているみたいだった。確かに、いくら同じ地域に住んでいるとはいえ、こつも毎回巻き込まれるのはおかしいと考えるのが普通だろう。

でも、麻実子ちゃんの中一の頃からずっと見てきたけど、単に運が悪いだけという気もする。

壊れた蛇口から水が噴き出したときも、水をかぶったのは並んで

歩いていた神林ではなく、麻実子ちゃんだった。

もつと些細なことでは、たまたま教科書を忘れたときに限って先生に指名されたり、今日はメロンパンが食べたい気分、なんて話しながら購買に行ったら売りきれで別のパンを買っていたりといったレベルのことならば日常的に起こっていた。

笹樹ってちよつと不運すぎるよね、なんて噂になっていた時期もあったくらいだ。

それと、神林や宵夢が悪霊退治をしたあとに通りかかることも多かった。

宵夢はともかく、神林についてはプリンもかなり気にしているようで、学校でも注意して観察しているのだそうだ。

「ところで」

俺が話しかけると、部屋でキーボードをカタカタと鳴らしなげやら打ち込んでいたプリンは、その手を止めて苺ミルクを口に含む。いつもどおり買わされたやつだ。

毎日のように飲んでいるけど、飽きないのだろうか。と、そんなことはどうでもいい。

「もつかなり悪霊退治してきたと思うんだけど、ポイントだけ？
今、どうなってるんだ？」

気になっている点について尋ねてみた。

ポイントが一定まで溜まれば、俺に姿を見られる前の状態に戻れると言っていたはずだ。

もつそろそろなんじゃないかと、そう思っていたのだ。

実をいうと、今の生活は結構楽しいと思っている。

少し鬱陶しいところもあるけど、プリンはいつも明るく元気を分けてくれる。それに、見回りで一緒にいる以外に、偶然巻き込まれているとはいえ、麻実子ちゃんとは放課後や休日の悪霊退治のときにまで会えるようになってる。

もちろん悪霊退治で俺ができることなんてほとんどないし、危険な目に遭うことだってあった。それなのに、俺は楽しいと感じていたのだ。

受験勉強メインで退屈な日常に戻ってしまうことからの現実逃避なのかもしれないけど、今の生活が壊れてしまうのはなんだか寂しい。そう思うようになってるのは紛れもない事実だった。

「そうだね、ちょっと確認してみるかな」

プリンは素早くキーボードを操作する。以前にも言っていたとおり、ポイントの情報をこの端末から確認することができるようだ。

「……………あれ、おかしいな……………」

画面を見ながらつぶやいている彼女。その画面をのぞき込んでみると、数字の書かれた表が映っていた。

一番上の欄に少し大きめの数字、その下に区切られた場所がいくつかあり、中にはまた数字が並べられていた。

その表をどうやって見ればいいのか、俺にはまったくわからなかったのだけだ。

「ポイント自体は確かに増えてるね。増えてるんだけど、思ったほどではないって感じかな。もちろん状況に応じて加算されるポイントは違うんだけど、これはさすがに少なすぎるよ。だからポイントの履歴も表示してみたんだけど、どうも、増えるだけじゃなくて、

減ってることもあるみたいなんだ」

「減ってる？」

「うん。増えてる履歴は、日時を見ても悪霊退治の結果だと思う。でもそれ以外に、減ってる履歴がいくつも残ってるんだよ。通常ポイントが減ることなんてありえないはずなんだけど……」

プリンはアゴに人差し指を添え、考え込んでいた。

「とりあえず、いつものチャットで連絡を取ってみるよ」

再び画面に視線を戻した彼女がキーボードを叩く。

引き続き画面をのぞき込んでいた俺だけど、文章は読めない文字で書かれている。だから俺にはどんな内容だかさっぱりわからなかった。

それでもプリンの表情を見る限り、あまり芳しくない内容だと予想はできた。

「やっぱりチャットじゃ埒が明かないよ。向こうに行って直接文句を言ってこよう！」

そう言ったかと思うと、途端にプリンの体が輝き始めた。

向こう………というと、女王様のいる世界ってことか。妖精界って表現すればいいのかな。

プリンは便宜上とそう呼ぶだけ、と言っていた気がするけど。

俺にはなにもできないのがもどかしいけど、ここは素直に彼女の帰りを待つしかないだろう。

そう考えていら、ふっとプリンを包んでいた光が消えた。

「ほむむ。考えてみたら、オイラはキミから離れられない状態だっ

た」

「どうやら向こうの世界に行くのも、距離的な扱いとなるようだ。

そして、再度考え込んでいたプリンの口から、俺に向けてこんな言葉が発せられた。

「よし。優歩、キミも一緒に行こう！」

彼女は俺の腕をつかむと、またもや光り輝き始めた。今度は俺の体も一緒に。

「って、こら待て、俺もっ!？」

さすがに、心の準備ってものが……うああああ!

困惑する俺の目の前で、光は膨張するかのようにその輝きを強め、そしてすぐにすべてを真っ白な世界へと包み込んだ。

ほわん。ほわん。

歩くたびに地面が俺の体をふわふわと空中に浮かび上がらせる、明るい桃色の空がどこまでも広がる世界。

キラキラと光る球体状のなにかが舞い踊り、果物がたわわに実った木々が辺りに甘い香りを漂わせている。

見るからにファンタジーな世界、そういった印象だった。

ここが、妖精界？

「優歩の中にあるイメージを使って、頭の中で変換されてそう見えている感じなんだけどね」

そんな解説をされても、よくはわからなかったけど。

「とにかく、向こうに見えるのが女王様のいるお城だよ」

プリンが指差す先には、いかにもといった雰囲気を漂わせたファンタジー風の城が建っていた。

「なるほど、優歩にはそういう感じに見えるんだね。それじゃあ、行くよ！」

すたすたと早足で歩くプリンのあとを、俺も急いで追いかける。辺りの景色は危険なんてありそうもないほのぼのした雰囲気ではあったけど、念のためプリンから離れないほうがいいだろう。

俺は彼女のそばに寄り添うように歩いていった。

城の周りにある堀に架けられた橋を渡ると、大きな門の横にふたりの屈強な門番が立っていた。

「ご苦労様！　と言いなから勝手に入ろうとしたプリンを、当然ながら門番たちが静止する。」

「女王様に用があるんだよ、通して！」

おい、お前はこんな相手にでも、その口調なのかよ！

もつとも城自体が俺の頭の中で作られたイメージだというのだから、実際は違った感じなのかもしれないけど。

そんなことを考えているあいだにも、門番たちはプリンの目の前で槍を交差させるようにして完全にガードしていた。

「邪魔するな！　通してよ！」

いや、もうこの状態じゃそれは無理ってものでしょ。

それどころか、牢獄送り決定、といった状況なのかもしれない。

「その者たちを、通しなさい」

覚悟を決め始めていた俺の耳に、凜とした女性の声が響いた。

綺麗な生地を何重にも重ねたような衣装、十二単っていうんだっけ？　そんな感じの服を身にまとった美しい黒髪をたたえた女性だった。

西洋風の城なのに日本風の衣装なのは、俺の頭の中のイメージがおかしいということなのだろうか。

ともかく、投獄されるのだけは免れそうだ。安堵のため息をつく。

女性に導かれ、俺たちは城の中へと入った。

城の中はとても綺麗な印象で、手入れも行き届いている様子だった。

大理石だろうか、大きな柱には明かりが煌々と灯っていた。ろうそくなどではなく、どうやら魔法の力が込められた水晶玉のようなものが明かりとして使われているみたいだ。

黒髪の女性に連れられた俺とプリンは、謁見の間へと通された。

部屋の奥には、質素な服を着た少々歳の行った男性がひとりいるだけだった。

微かに品のよさそうな笑みを浮かべながら迎えてくれたその男性は、優しいおじさんといった印象だ。

そして俺たちを連れてきた黒髪の女性が、部屋の中央へと歩み出る。

「それでは、お話を伺いましょう」

この人が女王様なのだろうか？

「いえ。女王はご多忙の身ゆえ、側近を務めております私、袖子葉が
お話を伺います。奥にいるのは監査役兼記録係の観蓮です」

プリンとは違って、丁寧な口調と仕草で説明してくれた黒髪の女性。

ゆったりとした物腰で、大和撫子という言葉がしっくり来る。プリンにも少しは見習ってもらいたいところだ。

「オイラのポイントのことなんだけど、どうして減ってるんだい？」
前置きもなしで、プリンは率直に直球で訊く。
もし礼儀のなさでポイントが減らされるというのなら、原因はわかりきっていると言えるだろうけど。

「申し訳ありません。その件はこちらでも状況を把握しているのですが、原因解明までは到っていないのです」

柚子葉さんは表情を崩すことなく答えてくれた。
そんな彼女に、プリンが詰め寄る。

「原因なんてどうでもいいからさ、とにかくポイントを戻せばいいでしょ？」

「それはできません」

「どうして!?!」

俺は、柚子葉さんにつかみかからんばかりの勢いで叫ぶプリンの体を抱え、どうにか押し留めていた。

「ポイントは絶対なのです」

プリンの勢いにもまったくひるむことなく答える柚子葉さん。
観蓮さんのほうも、笑顔を絶やさぬまま淡々と議事録らしきものを取っているようだ。笑顔になっているわけではなくて、笑ったよ
うなあの顔が地顔なのかもしれないけど。

「ポイント管理のシステムが壊れてるとかはないのかい？」

「それもありません。下界の機械とは違うのですから」

下界というのは、俺たちの住む世界のことだろう。どうでもいいけど、今俺がここにいるのは問題にはならないのだろうか。

「大丈夫です。女王の許しは得ていますから」

最初にプリンと会ったとき同様、完全に俺の思考を読んでいるように答えが返ってくる。

下手なことは考えられないな。そう思うとちょっと緊張してしまう。

「そんなに硬くなる必要はありませんよ。考えることに罪はありませんから。たとえどんな内容であったとしても。それを口に出したり、行動で示したりした場合に限って、裁定は下されるのです」

その裁定も女王様が下すということか。

「そうです。女王は絶対ですから」

そういう考えは危険なのは。思わずそう考えてしまったけど、それに対して柚子葉さんはなんの反応も示さなかった。

「とにかく、あなた方はこのまま悪霊退治を続けてください。原因はそちらでも探っていたいただけると助かりますが、私どものほうで引き続き調査致します」

「……わかったよ。よろしく頼むね」

今度は素直に引き下がるプリン。俺が柚子葉さんとやり取りしているあいだに、頭に上った血も少しは冷めたのだろう。

「ただ、ひとつだけ気になることが……」

帰り際、柚子葉さんが遠慮がちに言葉をつけ加えた。

「優歩さん。あなたの周りにわずかですが、あなた以外の妙なオラを感じます。今回の件の原因は、もしかしたら優歩さんのすぐ近くにあるのかもしれない」

次の日は、朝から初夏の日差しと思えるくらいの暖かい気候だった。

こんな日曜日はお出かけ日和、ということとで妹がはしゃいでいた。友達と買い物に行くのだそうだ。

そして、今日は俺もお出かけ準備中だった。……もちろん、目的は悪霊退治だけだ。

「早くしなよ、優歩」

一刻でも早く出発したいプリンが急かしてくる。

今日の目的地は、あの丘の上にある巖島夫妻の家だったからだ。

そんなに紅茶とケーキが気に入ったのか、ということももちろんそうではなく、この前の一件以来、夫妻のことがすごく気になっているのだという。

なんでそんなに気になるのかは、プリン自身にもわかってはいないみたいだけど。

ともかく、プリンが気になっている夫妻の家で再び悪霊が暴れているというのは、なにかあるような気がする。

状況を見てみないと正確な判断はできないけど、急いで現場へ向かうことについては俺も賛成だった。

「うん、美味しいー！」

出されたケーキを頬張りながら満面の笑みを浮かべているプリンを見てると、さっきまでの真剣な表情は嘘だったのかと疑いたくなってくる。

とりあえず、口の横のクリームは拭けよ。

「さてと」

三つ目のケーキを食べ終え、紅茶を飲み干したプリンがやっと立ち上がる。

窓から庭のほうに目をやると、そこにはなにやら輝くものが無数に舞っているのが見えた。

一時間ほど前に家から出てきた俺とプリン。

石段を上り終え大きな門をくぐった俺たちを出迎えたのは、その光る無数の悪霊たちだった。

「急いでこちらへ！」

叫ぶ美千代夫人の姿を目指してその悪霊の群れの中を駆け抜けた俺とプリンは、屋敷の中へと身を滑り込ませた。どうやら夫妻が今朝目覚めたときからこんな状態だったらしい。

屋敷の中までは入れず、また門から外へも出られず、ひたすら庭の中を舞い続ける悪霊たち。

さて、どうしたものか、と作戦会議という名のお茶会になっているというわけだ。

「とりあえず、掃除しちゃおうかな」

大丈夫なのか？

あんなにたくさん集まっているのに。

「どうだろうね。でも、どうにかしないと。女王様の認識で悪霊という区分になっっているんだからね。屋敷の中までは入れないとしても、なんらかの力でおじさんやおばさんに危害が及ぶ可能性は高いでしょ」

おじさんとおばさんはオイラが守ってあげるんだ、そんな決意がプリンの表情からうかがえる。

その手には悪霊を切り裂くあの短刀が握られていた。

庭に出た刹那、夫妻でも、そして俺でもプリンでもない悲鳴が響いた。

どうして!?

庭の真ん中で頭を抱えてうずくまっているのは、なんと麻実子ちゃんだった。

無数に舞い踊る悪霊たちが、彼女の身体のあちこちにぶつかる。

その衝撃のひとつひとは大きいわけではなく、彼女の髪をバサッと巻き上げる程度でしかなかったのだけだ。それでも何十、何百と途切れることなく、悪霊たちは彼女に襲いかかっている。

警告のつもりなのだろうか。

状況のわからない麻実子ちゃんは恐怖でその場にうずくまり、ただただ震えていた。

「どうしてここに麻実子がいるんだよ!」

舌打ちしながら、プリンは短刀を構えて駆け出し、麻実子ちゃんの周りに集まっている悪霊たちを、振りかざした短刀で追い払う。

短刀は以前のデブ悪霊を切り裂いたときのようには輝いてはいない。とりあえず、こちらも威嚇しつつ、まずは麻実子ちゃんの安全を確保することを優先的に考えているのだろう。

プリンは、ああ見えて結構冷静だ。と言いたいところだけど、そうでもなかった。

プリンには俺から離れられない。あまり離れると俺のほうに引っ張られるような感じになる。以前彼女はそう言っていた。では、プリンが勢いよく俺から離れていった場合はどうなのか。

俺のほうへ引き戻される力とプリンが離れていこうとする力がふたりのあいだに生じる。そして、今みたいにすごい勢いでプリンが駆け出した場合、離れていく力のほうが強くなり、その結果 当然のように俺が引っ張られてしまう。というわけで。

「うわ、優歩、どうしてそんなところで寝っ転がってるのさ？」

お前のせいだろ！

などと反論することもままらない。

プリンに引っ張られた俺は、ロープで結ばれて引きずられたかのような感じで、庭に突っ伏していた。しかも見事に顔面から地面に突っ込む形で。

俺は痛みを堪えてどうにか立ち上がり、うずくまっている麻実子ちゃんのもとへ急ぐ。

「麻実子ちゃん、大丈夫？」

俺の声に気づいて、我に返る彼女。怯えた目をしたままではあつ

たけど、小さく首を縦に振る。

「優歩、キミは麻実子をしつかり守るんだよ！」

立ち上がったプリンの手にする短刀からは、青白い輝きが発せられていた。

その光に引き寄せられるかのように、集中的にプリン目がけて飛びかかってくる無数の悪霊たち。

プリンはそれらを短刀一閃でいくつもまとめて消し去る。

矢継ぎ早に迫りくる悪霊を素早い身のこなしでかわしつつ短刀を振り、ひたすら返り討ちにしていく。

プリンの長い藍色の髪が短刀の青白い輝きと悪霊たちの放つ光に映え、美しく俺の目に映り込む。

俺の横で、麻実子ちゃんもその様子をじっと見つめていた。

「うっ！」

プリンがうめき声を上げた。悪霊の数が、やはり圧倒的に多すぎたのだ。

麻実子ちゃんに対しては警告だっただろう悪霊の一撃は、短刀の光で危険を察知したからか、プリンの身を切り裂く攻撃に変わっている。

切り裂かれた袖から、血がにじんでいるのが見えた。

彼女の動きは明らかに鈍くなっている。

プリンひとりなら、どうにかなったのかもしれない。でも彼女は、俺と麻実子ちゃんを守りながら戦っているのだ。

防ぎきれなかった悪霊によって、俺や麻実子ちゃんにも、切り傷ができるようになっていた。

「これはちょっと、ヤバいかな……」

苦悶の表情のプリン。汗が彼女の額に髪を張りつかせていた。

「優歩、走るよ。門の外へ。麻実子を支えてあげてね」

ぼそっと俺の耳もとでささやくと、プリンは門へと向かって駆け出す。

俺もすぐに反応していた。麻実子ちゃんに肩を貸すようにして、なるべくプリンから離れずに走る。

麻実子ちゃんもどうにか、足をもつれさせながらも自力で走っていた。

「おじさんおばさん、屋敷の中で待ってて！」

玄関口で状況を見守っていた夫妻にそう叫ぶプリン。

こうして俺たちは、一時撤退した。

石段まで出ると、悪霊は追いかけてこなかった。

いや、やはり門からは出られないのだろう。

理由はわからないけど、とりあえず助かった。

「や」と

プリンはじっと麻実子ちゃんを見据える。どうしたもんかな、と

考えているようだった。

「大丈夫だよ」

口を開いたのは、意外に落ち着いた様子の麻実子ちゃんのほうだった。

「プリンちゃんは、普通の人じゃないのよね？ あのね、私は守護霊っていうのかな、その人の声が聞こえるの。その声に導かれて、今日もここまで来たんだ。いろいろ信じられなくて驚いちゃったけど、でも大丈夫だから」

麻実子ちゃんは必死だった。

完全に状況を理解して受け入れているわけじゃないだろうし、プリンに対してちよつとした恐怖心も持っているかもしれないけど。彼女は、忘れたくないのだと懇願する。プリンが記憶を消したりできると思い込んでいるのだろう。

「人に言ったりはしないから」

「ほむ、わかったよ」

彼女の勢いに負けたのか、プリンは素直に受け入れた。そして、

「でも、今日はもう帰るんだ。あとはオイラたちに任せてね。正直に言えば、麻実子がいても足手まといなだけだからさ」

きっぱりと言い放つ。

プリンだってそんな言い方はしたくなかっただろう。でも、麻実子ちゃんに危険が及ぶかもしれないのは事実だった。

だからこそ、プリンはあえてそう言ったのだ。

「……わかった」

麻実子ちゃんは、ふらつく足取りで石段を下り始める。

それを追い越す形で、俺とプリンは石段を駆け下りた。

すぐに自分の家まで戻って、女王様にお伺いを立てないと。プリンがそう言ったからだ。

麻実子ちゃんが心配だし、家まで送ってあげたいところだったけど、今は時間がなかった。

「それじゃあ、気をつけて帰ってね！」

それだけ言い残すと、俺はプリンと一緒に家を目指した。

妖精界との通信は、俺の家の中でしかできないらしい。

妖精界と下界をつなぐエネルギーが少しでも節約できる場所でない、正常な機能を果たせないからだという。

守護妖精であれば、その守護する者の居住地が一番エネルギーの少なくてすむ場所になるようだ。

もつとも、仮に他の場所で通信できたとしても、端末は結構大きくて見た目より重いから大変だろうし、なにより鮮やかなピンク色の物体なんて持ち歩くのも恥ずかしいだろうけど。どうせ持たされるのは俺だろうし。

時計を見ると、もう三時過ぎになっていた。

部屋に戻り急いでプリンが押入れの中に置いてあった端末を取り出す。

と、そこへ優佳が入ってきた。

「うあつ！ お前、帰ってたのか。買い物は終わったのか？」

プリンはいつものように、素早い動作でベッドの横に身を滑り込ませている。

端末が壁にぶつかったのがガタツという音がしたけど、優佳は気づかなかったようだ。

「……見てわからないの？ 新しいお洋服なのにい」

嬉しそうに目の前でぐるりと一回転する優佳。

ひらりと短めのスカートがたなびく。

妹の服なんて普段あまり気にしていないから、新しいのかどうかは、よくわからなかったけど。

「そうかそうか。うん、いいんじゃないかな。それで、なにか用か？」

「ん〜っとねえ……あれ？　なんか、眠くなっちゃった……」

「お……おい」

優佳は目をこすってあくびをしたかと思うと、俺のベッドに倒れ込み、すぐさま安らかな寝息を立て始めた。

ああ、もう。寝るなら自分の部屋で寝ろよ。

軽く肩を揺すっても起きる気配はない。

仕方がない、部屋まで抱えていくか。

ため息をつきながら優佳の腕を持ち上げたとき、俺はすぐ横に立つ人影に気づいた。

「わっ！」

思わず声を上げてしまう。それは人の姿をしているものの、気配がまったく感じられないように思えた。

俺の視線に気づいたその人（？）は、軽く会釈をする。

その顔は、麻実子ちゃんとそっくりだった。

「守護妖精……か？」

変化に気づいたプリンが、ベッドの脇からおそるおそる顔を出してつぶやいた。

「守護妖精？ ああ、人の言葉で言つと、ということですね。はい、そうです。少々強引ではありますが、あなたたちに伝えたいことがあります」

丁寧な言葉を紡ぎ出すその声は、やっぱり麻実子ちゃんの声に似ていた。

妹の守護霊であるこの人が、俺やプリンになにかを伝えるために優佳をこの部屋まで導いた、ということなのだろう。

そんなことまでできるんだな、守護妖精って。

麻実子ちゃんと似ているのは、単なる偶然、もしくは俺自身の勝手なイメージ、といったところか。

「柚子葉さんから承った女王様の伝言です。まず、丘の上に悪霊が集まっているのは、あの庭のどこかに惹きつけるなにかがあるのだと思われます。それをどうにかしないと、あなたの短刀で悪霊たちをもとの世界に戻したとしても、きりがありません」

プリンは真剣な面持ちで話を聞いている。

俺はというと、麻実子ちゃんとそっくりなその姿に、思わず見惚れていたわけだけど。

「それから、悪霊を惹きつけているのは私たちの世界から持ち出された物のようです。つまり、私たちと同じような守護妖精や悪霊と呼ばれる存在がなんらかの目的で動いている、そう思って間違いないでしょう」

「なるほど、やっぱりそうなんだね」

俺にはわからなかったけど、プリンにはなにか感じる部分があったのだろう。

「今は一刻を争います。早くあの屋敷に戻ってください。それと、これも預かっていますので、持っていつてくください」

まっすぐプリンの目を見据えて話す麻実子ちゃん似の守護妖精に、プリンのほっも素直に頷き、差し出された物を受け取った。

「わかった、ありがとう。優歩、行くよ！」

「お……おう！」

駆け出すプリンを急いで追いかける。

俺の部屋に残された守護妖精は、こちらを見つめて優しげな微笑みを浮かべていた。

丘へと向かう途中、プリンが妙なことを言い出した。

「ねえ、優歩。キミの妹って、変な趣味とか持ってるのかい？」

は？

「守護妖精ってのは、その守護する対象が想っている相手に近い姿で現れる場合が多いんだよ。絶対にそうとは言いきれないけどさ」

それってつまり、優佳は女性が好き、という趣味だったことか？
うゝむ、そうだったのか……。妹に関する衝撃の事実。

「でも、絶対ではないから。麻実子似だったのも気になるところだ

けどね。ともかく今は、そんなことを考えてる場合じゃない。急ぐよ、優歩！」

丘の上へと続く長い石段は、目の前まで迫っていた。

毎回思うけど、ここを駆け上がるのは結構しんどい……。

プリンのをあとを追いかけてっつ、俺は心の中でそうぼやいていた。

石段を上り終わると、麻実子ちゃんがいた。

「なんで麻実子がここにいるのさ!? 帰れって言ったじゃないか！」

「ごめんなさい……どうしても気になって、来ちゃった……」

顔を伏せる麻実子ちゃんに、プリンは呆れた表情をしていた。

でも俺は、危険だというのはもちろんわかっていたけど、それでも正直ちよっと嬉しかった。やっぱりどんな状況だったとしても好きな子の顔が見られるだけで嬉しいものだ。

「ま、仕方ないね」

「ありがとう、プリンちゃん!」

明るい表情になって喜ぶ麻実子ちゃん。

「でも、麻実子はここで待ってるんだよ。門から中には絶対に入っちゃダメだからね!」

そう言い残してプリンは門の中へと身を滑り込ませる。

慌ててそれを追う俺は、麻実子ちゃんと目が合った。彼女は微かに笑みを浮かべていたけど、その瞳には少し寂しげな色が映っているように思えてならなかった。

とにかく俺は、プリンに引きずられるように門をくぐった。

「わわ、やっぱり増えてるね」

想像はしていたけどさ。そうつぶやくプリン。
確かに庭の中を漂っている悪霊たちの数は目に見えて増加し、お互いがぶつかり合うたびにさらなる輝きを放っていた。

「これ以上増えると、溢れて外にまで出てしまっただろうね」

「どうするんだよ、プリン。短刀で切ってもきりがないんだろ？」

「うん。だから、一気に消すしかない。本当は大もとを断ってからのほうがいいんだけど、この状況の中で探るのは不可能だろうからね。まずは今いる悪霊だけでも消し去る、それが先決だよ」

そう言って、手に持っていた物を俺に見せる。

プリンの手のひらに乗っていたのは、ピンク色で奇妙な形をした、いくつかの小石だった。

十字架のようにも見えるその石は、下側の長い部分の先端が少しだけ尖っていた。プリンがぐっと手を握ると、その小石が手のひらでジャラジャラと音を立てる。

「フェアリークロスっていう石だよ。命名したのは柚子葉さんらしいけど。フェアリーコンピューターもあの人のネーミングだったかな」

なんとというか、そのまんまだ。柚子葉さん、ネーミングセンスないですね。

「まあ、ともかく。壁沿いの地面にこの石を立てて庭全体を囲むんだ。そうすることで、庭全体を妖精界に送り込める。飛び回る悪霊ごとね。そして送ったところで石の囲いを解けば、向こうの世界に悪霊たちを置いてくれるってわけ」

このピンク色の石は、あの端末に使われている素材と同じものなんだよ、とプリンはつけ加える。

言いたいことはなんとなくわかったけど、でも。

「庭全体を囲むって、門の外にいる麻実子ちゃんは大丈夫だろうけど、お屋敷の中にいる巖島夫妻とか、俺やプリンは巻き込まれてしまっくんじゃないか？」

「そのとおりだよ」

プリンは事もなげに言う。

「でも、固定されている物体は一旦妖精界に送られたとしても、囲いが解除されたらもとに戻るんだ。だから囲いを解除するとき、どこかにしっかかりつかまっていれば、問題なくここに戻るはずなんだよ。もちろん、やったことなんてないんだけどさ」

「だけど、これしか方法はないんだよ。彼女は真面目な顔で言い放った。」

「おじさんおばさんには伝えている時間がない。妖精界に庭全体を送り込んだら、囲いを解く前に優歩がふたりのもとへ行って、どこかにつかまるように言うんだよ。もちろん、優歩もどこかにつかまっつてね」

俺は小さく頷いた。

「よし、これ以上悪霊が増える前に、急いでやるよ！ しっかかりついて来てね！」

門の近くから屋敷の裏側を回って、再び門の辺りまで。

屋敷の周りを囲っている塀に合わせる形で、俺たちは素早く小石を配置していく。

そのあいだも悪霊たちは俺やプリンにその身を突撃させ、明確に邪魔をしてきた。そんな悪霊たちを、短刀を振りかざして排除するのが、俺の役目だった。

短刀はさっきまでとは違い、青白い光を放っている。

輝いているそのパワーは、プリンの右手から、つないだ俺の手を通して短刀へと与えられていた。

どうして俺が短刀を握っているのかといえば、プリンが小石の配置に集中するためだ。

フェアリークロスを配置するには、下側の先端を地面に突き刺して固定しなければならぬ。そのため、襲いかかってくる悪霊に意識を向けている暇はないのだそうだ。

だから、短刀にエネルギーだけ伝えてもらい、俺が悪霊たちをなぎ払う。

クレープの悪霊のときには、相手は一体だけだったから問題なかったのだけど、短刀に込められたパワーは悪霊を切り裂くことで消えてしまう。

無数の悪霊を相手にしている今は、一体を切り裂くたびにパワーを注ぎ込み直す必要があった。

そのために、しっかりと手をつないでいる。

ここでプリンが傷つけられたら、すべてが無駄になってしまう。

俺は汗まみれになりながらも、次々と迫ってくる悪霊を切りつけ、プリンの動きに合わせて走り続けた。

屋敷は尋常ではないほどの広さがあった。

もちろん普通に全速力で走ったら、何十分もかかったりするような距離ではない。それでも、無数の悪霊たちに阻まれつつ進む俺には永遠とも思えるような時間に感じられた。

「優歩、頑張れ！ もう少しだよ！」

励ましの声をかけてくれるプリンは、俺なんかよりもっと辛い状態に達しない。

つないでいる彼女の手は汗でベタベタになり、激しく震えているのが感じられた。

門が見えた。あそこまで行けば準備完了だ。

俺とプリンは最後の力を振り絞って、門を目指した。

と、突然門から庭に飛び込んでくる人影があった。
それは。

「な……優佳!？」

妹の優佳だった。どうしてここにいるんだ!？

勢いよく飛び込んできた優佳は、髪の毛とその髪を結んでいるリボンを集中的に狙われ、執拗に悪霊たちからの攻撃を受けていた。威嚇のつもりなのか直接的な攻撃ではないものの、それでも激しく連続で頭を小突かれるような状態。

必死に腕で防いでいた妹だけど、耐えきれなくなったのか、その場にしゃがみ込んでしまった。

さらにその後ろから、もうひとつの人影が優佳に向かって飛び込んできた。

麻実子ちゃんだ!

「くっ……入るなと言ったのに……!」

プリンが苦しげな声を上げる。彼女もかなり限界近い状態のようだった。

庭に飛び込んできた麻実子ちゃんは、しゃがみ込んだ優佳に覆いかぶさるようにして、悪霊たちの突撃を自分の身に受ける。

優佳を、守ってくれているのだ。

視界に捉えられる距離だというのに、すぐにふたりのそばまで飛

んでいきたいのに、悪霊たちに阻まれてなかなか距離を詰められない。

そのあいだにも、麻実子ちゃんは無数の悪霊たちの体当たり攻撃を食らい、袖やスカートから見える彼女の白い腕や足が赤くなっていくのが見えた。

「麻実子ちゃん！ 優佳！ もう少しだ、待ってる！」

俺は、声を限りに叫ぶ。

それに気づき、こちらに弱々しい視線を向けるふたり。

「よし、次でラストだよ！ 優歩はふたりのもとへ急いで！」

「わかった！」

俺とプリンは、つないでいた手を離して駆け出す。

プリンは門のほうへ、俺は麻実子ちゃんと優佳のそばへ。

「優歩くん！」

「大丈夫？」

俺は近くの悪霊たちを威嚇するように短刀を振るう。

プリンの力がない今では、悪霊を消し去ることはできなかったけど、一時的にでも追い払えればよかった。

麻実子ちゃんが身を挺して守ってくれていた優佳は、どうやらすでに気を失っているようだ。

そのとき、突然声が響いた。

「この悪霊たち……どうやらこの庭にある花の香りに引き寄せられて集まったようです」

声は麻実子ちゃんと似た感じだったけど、麻実子ちゃんは今、身を丸めて必死に妹を守ってくれている状態だ。

とすると、この声 さっき会った優佳の守護妖精か！

「庭に花壇がいくつもありますね、その辺りになにかがあるのは間違いないでしょう」

「悪霊たちを追い払ったら、頼みますよ」

え？

守護妖精さんの声が続いて、さらに別の声が聞こえたような気がした。

女性のようにも男性のようにも聞こえる、ちょっと幼くも感じる声。

思わず周囲を見回す俺のもとに、プリンの声が届いた。

「優歩！ 行くよ！」

「……了解！」

今はこっちのほうが優先事項だ。

俺はしゃがみ込み、麻実子ちゃんと優佳のふたりをかばうようにして身を寄せる。

と同時に、プリンは大げさな身振りで、ピンク色の小石の最後のひとつを門の真下に固定した。

白！

小石で囲った庭の内部が、強烈な真っ白い光に包まれた。そのまぶしさに思わず目を覆う。

そして。

辺りの景色は、一変した。

正確には庭も屋敷も木々も塀も門も、すべてそのままではある。でも、空や塀の周りは淡い桃色の空間に包まれていた。

悪霊たちがざわめく。

実際に声を上げているわけではなかったけど、そう表現するのが一番的確と思われる、そんな波動が全身に感じられた。

「優歩！ おじさんとおばさんを頼むよ！」

そうだった。

俺は「行つてくる」と麻実子ちゃんに言い残し、その場から駆け出した。その後ろからプリンの声が聞こえてくる。

「麻実子！ 近くの木につかまって！ 優佳の体もしっかり抱えて、絶対に離しちゃダメだよ！」

それに対する麻実子ちゃんの返事は聞こえなかったけど、彼女が優佳を引きずりながら近くの木のそばまで這い進む音は微かに聞こえてきた。

俺は振り返りもせず、ただひたすら走る。

屋敷の玄関には、巖島夫妻がこちらを心配そうに見つめながら立ち尽くしていた。

「おじさん、おばさん！ どこかにつかまっってください！」

俺の声に、戸惑いながらも玄関の柱にすがりつく夫妻。

そのまま俺も走ってきた勢いに任せてふたりのもとへ。そして、そばにあった柱にしっかりと手をかける。

「プリン！ いいぞ！！！」

大声で叫んだ。

ここからでは、門のそばにいるはずのプリンの姿は見えない。それでもすべての力を込めて、声を張り上げた。

その瞬間。

庭を、塀を、屋敷を　この空間のすべてを包んでいた光が、その強さを一気に増大させ、まぶたを通してでも感じられるほどの真っ白な世界に、俺も巖島夫妻も、おそらくはプリンや麻実子ちゃんたちも、飲み込まれていった。

空は抜けるように青かった。

静かな玄関に、美千代夫人と秀嗣さんが倒れている。まっ先に動いたのは秀嗣さんだった。

「お前、大丈夫か？」

そう声をかけると、美千代さんも身を起こした。

「あなた、これは、いったい……」

俺はそんなふたりの、驚きながらも安らいだような表情を見て、こっちは安心だな、と思った。

そして走り出す。一心に庭を駆け抜け、門のそばにいるはずの三人のもとへ急いだ。

俺の目に、彼女たちの姿が映る。

どうやら無事のようだ。安堵で自然と速度は緩み、俺はゆっくりとそばへ歩み寄った。

「優歩。終わったよ」

笑顔を向けるプリンを見て、無言で親指を立てる。

そんな、安心しきっていた俺の心を、麻実子ちゃんの声が切り裂いた。

「優佳ちゃん……優佳ちゃん？」

え？

プリンの傍らにしゃがみ込んでいる麻実子ちゃんは、横たわったままの優佳の体を必死に揺すっていた。

「優歩くん……優佳ちゃんが、起きないよお……」

プリンの顔もこわばる。麻実子ちゃんは今にも泣き出しそうな表情をしていた。

俺も妹のそばへと駆け寄る。

「おい、優佳！ 起きろよ！」

揺する俺の手にも、反応はなかった。

「そんな……！ 優佳ちゃん！」

「優佳！！」

三人の手が、優佳の肩を腕を背中を激しく揺らす。
そんな俺たちの耳に響く声。

「うーん、もう食べられないよお……むにゃむにゃ……」

優佳の寝言。

……忘れてた。こいつ、眠りが深くて起こしてもなかなか起きないんだっただ。

「まったく、こいつは。心配かけて……」

「まあまあ、優歩くん。平気だったんだから、いいじゃない」

麻実子ちゃんはそう言つて優佳の頭を優しく撫でる。

確かに、無事でよかった。

さっきの寝言からすると、ご馳走をおなかいっぱい食べる夢でも見ていたのだろう。妹は幸せそうな寝顔をさらしていた。

とりあえず優佳はこのまま寝かせておいても大丈夫だろう。それよりも、気になるのはさっきの声だった。

「さつき、声が聞こえたんだ。悪霊たちは、庭に咲く花に引き寄せられたみたいだつて」

麻実子ちゃんに視線を向ける。麻実子ちゃんも聞いたでしょ？

という意味を込めて。

でも

「え？ そんな声、聞こえなかったけど……」

彼女は、あっさりと否定を返してきた。嘘をついているようには見えなかった。

どういうことだろう？ あれは幻聴だったのだろうか？

でも、はつきりと耳に残っているあの声。麻実子ちゃんに似た声だと感じたのだから、聞き間違いではないはずだ。

それに、もうひとつの声も、はつきりと……。

いや、今はそれを確認している場合でもないな。

それよりも、あの声言っていた内容を伝えないと。

「花壇になにかあるみたいなのを言つてた」

俺の言葉に、麻実子ちゃんとプリンは半信半疑ながらも手分けし

て花壇を探り始めた。

もちろん俺も、春の匂いが心地よく感じられる花壇の土を手で軽く掘ったりして調べてみた。

コツツ。

軽く土の中に手を潜り込ませただけだったけど、すぐに指先がなにかにぶつかる感触があった。

「おっ、なにかあったぞ」

「こっちにも」

プリンも麻実子ちゃんも、そして俺も、それぞれ違う花壇の土の中から、複数の小石のような物を発見していた。

色は様々だったけど、綺麗な宝石のような石だ。

これは……。

「ねえ、これって……」

麻実子ちゃんも思い出したみたいだ。

夢だと思わせていた記憶の中で、襲いかかってきたエリザベスの力をはじき返した石。妖精石。

「うん、確かにこれは、妖精界の石だよ。麻実子にあげたのとは違うタイプのエネルギーを持った石だけどね」

とりあえず、その石はすべてプリンに渡した。

「帰ったら調べてみるよ」

そう言って石をポケットにしまい込む。

そんな彼女の様子をじっと見ていた麻実子ちゃんだったけど、な

んだか表情が冴えない感じだった。
どうしたのだろう？

「ねえ……ほんとにこれでよかったのかな？」

ふと、麻実子ちゃんがそんなつぶやきを漏らす。

「どうして？」

「ん……あのね。さっきの、悪霊？ あの光が消えるときに、叫び声というか悲鳴というか、そんな悲しくて苦しいような声が、いっぱい聞こえたような気がしたの……」

プリンは黙っていた。

麻実子ちゃんは、悲しげな表情を浮かべている。
俺はどうすればいいのかわからなかった。

でも、彼女に溢れている思いを少しでも和らげてあげられたら、そう思っただけ、微かに震えている彼女の細い肩をそっと抱き寄せた。
空はその青さを地平線の彼方へと追い出し、徐々に夕焼け色へと変わりつつあった。

優佳はまだ寝ていた。

周りを見渡してみたけど、守護妖精の姿も見えない。もちろん姿を消しているのが普通だとは思っけど。

「ふう。また人をおぶってこの石段を下りるのか……」

俺がげんなりした声を上げると、麻実子ちゃんが申し訳なさそうに口を開いた。

「あ……ごめんね。このあいだ、私、重かったよね……」

最初にここへ来たときのことを思い出し、彼女は目を伏せていた。そういつつもりじゃなかったのだけど……。

「いや、そんなことは……。あのときは、全然大丈夫だったよ！」

「そうそう、エネルギーもすっかりたまったしね！」

「エネルギー？」

ニヤニヤしてるプリンの言葉に首をかしげる麻実子ちゃん。俺は慌ててプリンの口を押さえた。

「いやいや、なんでもないよー！」

「ふうん？」

彼女をおぶってドキドキしていたのは確かだったが、それを知られるのは恥ずかしい。

まだ頭にハテナマークを浮かべている麻実子ちゃんから目を逸ら

し、渡されたままだった短刀をプリンに返すと、俺は妹をおぶった。

「ま、このままここにいっても仕方がないし、帰ろう」

妹は小柄ではあったけど、やっぱりそれなりに重かった。

もちろんまだ小学生の優佳だから、麻実子ちゃんより軽いのは確かだけど。……なんて言ったら怒られるだろうか。

「あの、また助けてもらって、本当にありがとうございました」

振り返ると、門のそばまで見送りに来てくれた美千代夫人が頭を下げていた。

「ありがとう」

秀嗣さんも夫人の横で頭を下げている。

「いえいえ、これは自分たちのためでもあるので」

俺がふたりの声に答える。当のプリンは、うつむいてなにか考え込んでいる様子だった。

「あら？ その短刀は……？」

ふと美千代夫人がつぶやく。その視線の先は、言葉どおりプリンの短刀だった。

「それは、あなたの？」

「うん、そうだよ？」

どうして、そんなことを訊くのさ？ プリンは首をかしげる。

「いえ、それと似たようなのが、うちにもあるのよ。もっと古ぼけているのだけれど」

え……？

綺麗な洋風の飾りの中に、和風の藤の紋章が入った、こんな変わった短刀と似たようなものが？

「そうなんだ。すごい偶然だね！」

俺は不思議に思ったのだけど、プリンはあっさりしたものだ。彼女がそう言うのなら、やっぱり単なる偶然なのかな？

そんなプリンは、意を決したように夫妻を見上げ、力強い声を発した。

「おじさん、おばさん！ もう大丈夫だとは思うけど、世の中には絶対なんてことはないんだ。もしかた今日みたいなことがあったら、すぐに飛んでくるから！ オイラがふたりを守るからね！」

「まあ、ありがとう。頼もしいわねえ」

微笑みを浮かべる夫人の顔を見て、満足そうにしているプリン。彼女はこの夫妻のことがとても気に入ってるみたいだ。それはよく伝わってきた。

麻実子ちゃんもそう思ったのだろう。笑顔でプリンのほうを見つめていた。

「また遊びに来て、いいかな？」

「ええ、是非」

少し遠慮がちに言うプリンに、美千代夫人は優しい声で答えてくれた。

そんな夫人とその横で笑顔を絶やさずに立つ旦那さんに別れを告げ、俺たちは石段を下り始めた。

それにしても、優佳の眠りは深すぎだ……。

「お疲れ様」

麻実子ちゃんが笑顔で労ってくれる。

本当によく寝てるね、と優佳の鼻を軽く指でくすぐる彼女。

優佳は俺がおぶっているのだから、麻実子ちゃんは俺のすぐそばまで近寄ってきたことになるわけで。

風になびいた彼女の短めの髪が軽く俺の鼻をくすぐり、ちょっとドキツとしてしまう。

「おっ、エネルギー！」

ニヤついているプリンを軽く蹴飛ばす。

「それじゃあ、もう暗くなるし気をつけて帰ってね。本当なら、家まで送ってあげたいところだけど……」

「うん、優佳ちゃんもいるもんね。大丈夫よ、なんたって私には、白馬の王子様がついてるんだから！」

王子様って……麻実子ちゃんの守護妖精のことか。声が聞こえるって言っていたよね。

「絶対、カッコいい人なんだよ！」

麻実子ちゃんは胸の前で両手を合わせ、夢見がちな表情をする。どうやら姿は見えず、声だけ聞こえる状態のようだ。

だけど……麻実子ちゃんって、ちょっと妄想癖があるのかもしれない。そういえば、神林も以前、妄想が激しいとか言ってたっけ。

それはともかく、王子様だなんて愛しさいっぱい瞳で言うから、俺はちょっと嫌な気がしてしまった。

つまり、嫉妬だよな、これ。相手は守護妖精だというのに。

「それじゃあ、またね」

笑顔で手を振り、去っていく麻実子ちゃん。

俺はプリンのことを守護妖精だとは言っていないけど、普通の人ではないと知られてしまった。

さっきの妖精石の話もしてしまったし、妖精だということには気づいたかもしれない。

……麻実子ちゃんもプリンのことで嫉妬したりするのかな。ふと、そんなふうに考えてしまう。

とりあえず今は早く家に帰ろう。

プリンは妖精石の調査があるだろうし、なんととっても背中が重かった。

ふと妹の寝息で、さっきの声を思い出した。

あれは幻聴なんかじゃなかったと思うのだけど……。

思わず辺りをきよるきよると見回す俺の様子に気づいたプリンが、そつと話しかけてきた。

「さっき言った声の主を探してるのかい？ いるかどうかはオイ

ラでもわからないんだよ。人間にだけでなく、妖精同士でも干渉はしないし姿も見せない、気配も感じさせないというのが守護妖精の普通の生活様式なんだ。今回はすでに干渉していたんだし、今さらな気もするけどね。それに、通常なら主人から離れることだってできる。オイラはキミに姿を見られてしまったから離れられないけど」

そう言って、プリンはいつものように俺の腕に絡みついてくる。そのまま俺たちは黙って歩き出した。

妹をおぶっているのに、さらにプリンにまでくっつかれるのは歩みにくいことこの上ない。

でも、なにか思うところがあるのか、プリンの顔にいつものように明るく無邪気な感じが見られないのが気になって、俺は彼女のしたいようにさせていた。

家に着くと、母さんが出迎えてくれた。

当然ながら、プリンは外から回って先に二階のベランダへと飛んでいる。

「ちょっと優ちゃん、どこに行ってたの？ あらあら、優ちゃんまで一緒に。寝ちゃってるじゃない。やあねえ、お行儀が悪いわ」

いつもながら母さんは、俺のことも妹のことも同じ呼び方だし…。

せめてふたり一緒にいるときくらい、呼び方を変えてもいいのに。

「優ちゃんは部屋に寝かせてあげなさい。ご飯はもうできてるから、すぐに下りてらっしゃいね」

母さんは、俺に文句を言う暇も与えず、さっさと台所に引っ込んでしまった。

とにかく俺は優佳の部屋に入り、妹をベッドに寝かせた。服を着たままだけど、寝苦しかったら自分で起きるだろう。というか、そろそろ一旦起きてもいいと思うのだけど。

俺が自分の部屋に戻り窓を開けると、すぐさまプリンが入ってきた。

「ふー、やっぱり自分の部屋が一番落ち着くね！」

お前の部屋じゃないだろ。

「うるさいよ。ま、相部屋とかそんな感じでいいでしょ。それとも同棲って言ったほうがいいかい？」

「じじじ。」

「まあ、夕飯食べてくる」

「ほむ、行ってらっしゃい。オイラは、さっきの石のことを調査してみるね」

俺は部屋を出ると、階段を下りながらいろいろと考えた。

今日の悪霊のこと、麻実子ちゃんとその守護妖精のこと、優佳の守護妖精のこと。

悪霊については、プリンが調べている石からなにかわかるかもしれない。

麻実子ちゃんは自分の守護霊　つまりは守護妖精の声が聞こえると言っていた。

巖島夫妻の屋敷に行ったのも、その声に言われたからのようだった。

でも、大丈夫だったとはいえ、危険な場所だったのは確かだろう。守護妖精なのに、主人を危険な目に遭わせるようなことをしているものなのだろうか。

ちよつと怒りを覚える俺がいた。やっぱり王子様発言が少々気になっっているみたいだ。

優佳の守護妖精のことも気になる。巖島夫妻の屋敷の庭で聞こえたあの声は、どう考えても幻聴ではなかったと思う。だけど、どうやら俺にしか聞こえなかったみたいだ。

それに、別の声も聞こえた気がした。あれは、麻実子ちゃんの守護妖精の声だったのだろうか？

「優ちゃん？　どうかしたの？」

母さんが、ぼーっとしながら夕飯を食べている俺の目の前で首をかしげていた。

「いや、なんでもないよ」

笑顔を作っておかずに箸を伸ばす。

「しっかり食べて、頑張ってね！」

そつだ、頑張らないと。

母さんの言った「頑張って」は、当然ながら受験勉強のことなの

だけど。

でも、俺には他に頑張らなければいけないことがあった。
今はそっちを優先して頑張ろう。そう心に決めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0637y/>

妖精ing（フェアリング）せんせ～しょん

2011年11月1日00時11分発行